

2023年度

授業の自己評価報告書

奥羽大学 薬学部

目 次

授 業 科 目	担 当 教 員	頁
医薬の歴史 A	押尾 茂	4
医薬の歴史 B	押尾 茂	5
高齢者の健康 A	小池 勇一	6
高齢者の健康 B	小池 勇一	7
基礎薬学計算	木田 雄一	8
健康の科学	押尾 茂	9
言語学 A	伊藤 頼位	10
言語学 B	伊藤 頼位	11
心理学	竹ヶ原靖子	12
薬学英语Ⅲ	伊藤 頼位	13
薬学英语Ⅳ	伊藤 頼位	14
薬学英语Ⅵ	伊藤 頼位	15
数学Ⅰ	木田 雄一	16
数学Ⅱ	渡邊 哲也	17
化学Ⅰ	石山 玄明	18
化学Ⅱ	西村 良夫	19
物理学Ⅰ	小野 哲也	20
物理学Ⅱ	志村 紀子	21
生物学Ⅰ	櫻井 敏博	22
薬学基礎実習	石山 玄明	23
フレッシュマンウィーク	伊藤 頼位	24
フレッシュマンセミナー	伊藤 頼位	25
情報科学講義	木田 雄一	26
IT技能演習Ⅰ	木田 雄一	27
IT技能演習Ⅱ	木田 雄一	28
ITプレゼンテーション演習	木田 雄一	29
日本語表現Ⅰ	伊藤 頼位	30
日本語表現Ⅱ	伊藤 頼位	31
統計学	木田 雄一	32
薬学入門	押尾 茂	33
医療コミュニケーション論	竹ヶ原靖子	34
臨床コミュニケーション演習	竹ヶ原靖子	35
生化学Ⅱ	古泉 博之	36
機能形態学Ⅰ	高野 真澄	37
解剖学	高野 真澄	38
微生物学	三宅 正紀	39
細胞生物学	古泉 博之	40
分子生物学	古泉 博之	41
有機化学Ⅰ	西村 良夫	42
有機化学Ⅱ	金原 淳	43
有機化学Ⅲ	西村 良夫	44
有機化学Ⅳ	石山 玄明	45
有機化学演習	石山 玄明	46

授 業 科 目	担 当 教 員	頁
機器分析学	石山 玄明	47
薬用植物学	村田 清志	48
生薬学	村田 清志	49
医薬品化学Ⅰ	石山 玄明	50
医薬品化学Ⅱ	石山 玄明	51
化学系実習	石山 玄明	52
基礎分析化学	鈴木 康裕	53
薬品分析化学	鈴木 康裕	54
臨床分析化学	鈴木 康裕	55
物理化学Ⅰ	小野 哲也	56
物理化学Ⅱ	柏木 良友	57
放射薬品学	志村 紀子	58
物理系実習	柏木 良友	59
物理化学Ⅲ	柏木 良友	60
環境衛生学Ⅰ	熊本 隆之	61
環境衛生学Ⅱ	佐久間 勉	62
栄養化学	櫻井 敏博	63
食品衛生学	佐久間 勉	64
公衆衛生学Ⅰ	押尾 茂	65
公衆衛生学Ⅱ	押尾 茂	66
衛生薬学実習	押尾 茂	67
衛生薬学演習	押尾 茂	68
薬の効き方と作用点薬理系 1	佐藤 栄作	69
末梢神経に作用する薬と生体反応薬理系 2	西屋 禎	70
生体内で生み出される生理活性物質薬理系 3	西屋 禎	71
薬と病態（精神疾患）薬理系 6	関 健二郎	72
薬と病態（神経・筋疾患）薬理系 7	関 健二郎	73
薬と病態（感染症）薬理系 8	三宅 正紀	74
薬と病態（心・血管・呼吸器疾患）薬理系 9	佐藤 栄作	75
薬と病態（腎・泌尿器・生殖器疾患）薬理系 10	佐藤 栄作	76
薬と病態（消化器疾患）薬理系 12	西屋 禎	77
薬と病態チュートリアル1（神経疾患）	小池 勇一	78
薬と病態チュートリアル2（循環器疾患・代謝性疾患）	小池 勇一	79
薬と病態チュートリアル3（消化器疾患）	小池 勇一	80
臨床検査学	高野 真澄	81
薬理学実習	西屋 禎	82
医薬品毒性学	佐藤 栄作	83
医薬品情報評価学	中川 直人	84
医療統計学	熊本 隆之	85
薬剤学Ⅰ	渡邊 哲也	86
製剤学	柏木 良友	87
薬剤学Ⅱ	杉野 雅浩	88
薬剤学実習	柏木 良友	89

授 業 科 目	担 当 教 員	頁
薬剤学Ⅲ	渡邊 哲也	90
薬物相互作用学	渡邊 哲也	91
薬物送達システム	渡邊 哲也	92
薬物代謝学	小池 勇一	93
セルフメディケーション学	伊藤 鍛	94
健康食品学	佐久間 勉	95
医療薬学総論	中川 直人	96
薬事関係法規	佐藤亜希子	97
漢方医学	村田 清志	98
薬局管理学	伊藤 鍛	99
社会薬学総論	志村 紀子	100
処方解析学	中川 直人	101
薬学演習Ⅱ	志村 紀子	102
薬学演習Ⅲ	佐久間 勉	103
薬学演習Ⅳ	鈴木 康裕	104
薬学演習Ⅴ	中川 直人	105
薬学演習Ⅵ	佐藤 栄作	106
放射化学実習	志村 紀子	107
からだと生命の基礎原理	柏木 良友	108
天然物化学	石山 玄明	109
実践臨床薬剤師論	中川 直人	110
遺伝医学概論	熊本 隆之	111
臨床心理学	竹ヶ原靖子	112
センサー概論	柏木 良友	113
地域医療概論	佐藤亜希子	114
新薬概論	西屋 禎	115
有機化学IT技能演習	石山 玄明	116

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医薬の歴史A	第1～4学年
科目責任者(記載者)	押尾 茂	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬の歴史から医療制度の歴史までを学ぶことで、医療における薬剤師の役割を明確にすることが本講義の目的である。これに対応する講義をおこなっている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

講義はシラバスに沿って、適切に進行した。学生からの評価も高く、医薬の歴史を理解するという初期目標を達成出来ている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

コロナ禍でもあり、学生の講義への参加を促すことは出来ず、その部分の点数が低かったと思われる。感染症が落ち着いたときには、参加型の質疑を行っていききたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

一部を記入型とした講義資料を配付した。講義では、パワーポイントを使用した。

2) 自己点検・評価

講義資料は毎年最新のものに変更しており、今後もその態度で進めていきたい。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今後も現状の方針で進める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

毎回提出されるレポートを採点し、それを合算して総合評価とした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

無出席あるいは欠席回数が多いために受験資格無しと判定したものを除くと25名中22名が合格した。不合格者はレポート未提出が複数あるもので、未提出分は0点となるために合格基準点に未達であった。成績評価は適切に行われた。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今後も現状の方針で進める。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医薬の歴史B	第1～4学年
科目責任者(記載者)	押尾 茂	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本講義では、教科書の記述に基づき人類の歴史を変えてきた代表的な30の病気を選び、その成り立ち、歴史的影響、治療法に至るまで、書来薬剤補となった時に医療人としての基礎的な教養を持つことを目標としている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

講義はシラバスに沿って、適切に進行した。学生からの評価も高く、歴史に影響した病気を概観できるという初期目標を達成している。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

コロナ禍でもあり、学生の講義への参加を促すことは出来ず、その部分の点数が低かったと思われる。感染症が落ち着いたときには、参加型の質疑を行っていききたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

あらかじめ、講義範囲の教科書部分を読んでから講義に出席するように指導した。また、一部を記入型とした講義資料を配付した。講義では、パワーポイントを使用した。

2) 自己点検・評価

講義資料は毎年最新のものに変更しており、今後もその態度で進めていきたい。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今後も現状の方針で進める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

講義で取り上げた病気の中から7つを選んでまとめる作業を課し、レポートとして提出してもらい評価をした、さらに、感染症に関する映画を複数例示し、その中から1作品を鑑賞し、その感想文の提出を受け、先述の病気の解説と合わせて評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

無出席のものを除くと全員が合格した。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今後も現状の方針で進める。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	高齢者の健康A	第1～3学年
科目責任者(記載者)	小池 勇一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

高齢者の国政、老化、疾患、予防、介護などについて理解を深める。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

学生へのアンケート調査結果からは、授業は理解しやすいように工夫されていた、教員の話し方は聞き取りやすかった、知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた、この授業の関連分野に関心を持つことができたなどの項目の評価が高いことから見て、目標は達成できたと考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

一方で、学生に効果的に授業へ参加させることができた項目についてはやや評価が低く、双方向性について改善の余地があると考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教育方法としては、全て講義であり、配付資料をもとにシラバスの授業内容について出来るだけわかりやすく、また、講義時点でのトピックスを盛り込みつつ資料を作成し、学生に講義するようにした。また、講義中に出来るだけ学生に内容を理解しているかどうかを質問したりして、双方向性に留意した。

2) 自己点検・評価

授業はシラバスに沿って、系統だっておこなわれた、理解しやすいように工夫されていた、重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた、などのアンケート項目が高評価であったことから、教育方法に関しては教員の意図をくみ取って理解しているものと考えている。一方で、質問に対する回答が的確であるとの項目はやや評価が低かった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

次年度の改善方策としては、出来るだけ学生の参加を促すような授業方法を志向したいと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

成績評価については、形成的評価は特におこなっておらず、定期試験結果に基づいて総括的評価をおこなった。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

定期試験結果の合格率が100%であったことから見て、当初の目的は達成できていると考えられる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

次年度の成績評価も本年度と同様にしたいと考えている。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	高齢者の健康B	第1～3学年
科目責任者(記載者)	小池 勇一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

高齢者に多い疾患について症候と病態の特徴を把握し、薬物療法、麻酔に関する留意点を学ぶ。また、老年医学と社会について理解を深める。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

学生へのアンケート調査結果からは、授業は理解しやすいように工夫されていた、教員の話し方は聞き取りやすかった、知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた、この授業の関連分野に関心を持つことができたなどの項目の評価が高いことから見て、目標は達成できたと考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

一方で、学生に効果的に授業へ参加させることができた項目についてはやや評価が低く、双方向性について改善の余地があると考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教育方法としては、全て講義であり、配付資料をもとにシラバスの授業内容について出来るだけわかりやすく、また、講義時点でのトピックスを盛り込みつつ資料を作成し、学生に講義するようにした。また、講義中に出来るだけ学生に内容を理解しているかどうかを質問したりして、双方向性に留意した。

2) 自己点検・評価

授業はシラバスに沿って、系統だっておこなわれた、理解しやすいように工夫されていた、重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた、などのアンケート項目が高評価であったことから、教育方法に関しては教員の意図をくみ取って理解しているものと考えている。一方で、質問に対する回答が的確であるとの項目はやや評価が低かった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

次年度の改善方策としては、出来るだけ学生の参加を促すような授業方法を志向したいと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

成績評価については、形成的評価は特におこなっておらず、定期試験結果に基づいて総括的評価をおこなった。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

定期試験結果の合格率が100%であったことから見て、当初の目的は達成できていると考えられる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

次年度の成績評価も本年度と同様にしたいと考えている。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎薬学計算	第1学年
科目責任者(記載者)	木田 雄一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬学数学の学習に必要な基礎学力の向上を要する学生を対象として、基本的な計算力と基礎知識を習得させる授業を行っている。具体的には、分数の計算とそれを使った割合・比例計算、簡単な指数計算と対数計算、方程式の計算、基本的なグラフの読み書きの知識と技能を習得する演習を行う。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

全体平均より大きく悪い評価項目は無く、科目の到達目標の達成に必要な各項目について授業ができており、最終的な成績もよいので大きな問題はないと考えるが、知的好奇心の刺激の項目が悪かった (全体平均より0.12ポイント低) ので改善の必要があると考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

基本的な演習問題を沢山解かせる授業なので、計算に苦手意識を持っていたり、逆にその日の演習内容はすでに理解してしまっている (と自分では思っている) 学生には、あまり面白い授業ではなかったかもしれない。しかし、実際に手を動かして計算する事で気づく事はあるはずであり計算力も確実に向上するので、その面白さを理解してもらえよう努力したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

自作問題集を配布して、始めの60分間に解かせる。この間に、学生は教科書を見たり教員に質問したりして問題の解き方を覚える。教員は教室を巡回して、質問に答えたり解答に躓いている学生に説明したりする。その後、小テストを行って解答を提出させる。翌週までに採点し、間違えている部分に赤ペンで補足説明を追加したのち返却し、復習するよう指導する。各授業の終了時に自作問題集と小テストの解答を配布する。

2) 自己点検・評価

自由記述欄に「とても分かり易い」「重要ポイントと理解しにくい所を黒板に記載してくれた」「先生方がすごく熱心だった」「計算力が上がった」「沢山問題を解けて良いと思った」「解き方を詳しく説明してくれて自分でも解けるようになった」「基礎を固める教科なので、これからの学習がはかどると思った」など肯定的な意見が多かったので、教育方法に大きな問題はないと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

その一方で、「質問をされる前に教えに行くのは自分から取り組むことを妨げられる気持ちになる」という意見があり、こちらが教えすぎにならないように改善する必要がある。ただ、分からないときにも自分から質問できない学生もいるので、その見極めが難しい。今後は、説明する前に「説明が必要ですか?」としっかり確認するようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形式的評価として、授業中に自作問題集を解答させた。学生が解答している間に教室を巡り、解答の進捗と内容を確認して理解度を判断すると共に、質問に答えたり躓いている学生に説明するなどした。また、毎週小テストを行い、採点したのち返却した。
総括的評価は、定期試験の成績(80%)と講義中の小テストの完成度(20%)で行った。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

選択授業なので学生の意欲が元々高いこともあり合格率と平均点が高く、自由記述にも成績評価に関する不満の意見はないので、総括的評価は問題ないと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

自作問題集や小テストの問題をブラッシュアップして、より多角的に学生の理解度を把握できるように改善したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	健康の科学	第1学年
科目責任者(記載者)	押尾 茂	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

市民としての基本的な素養として健康や医療に関する情報を適確に判断することができる健康に関するリテラシーを身につける。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

講義はシラバスに沿って、適切に進行した。学生からの評価も高く、歴史に影響した病気を概観できるという初期目標を達成している。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

コロナ禍でもあり、学生の講義への参加を促すことは出来ず、その部分の点数が低かったと思われる。感染症が落ち着いたときには、参加型の質疑を行っていききたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書は使用せず、一部を記入型とした講義資料を毎回講義時に配付した。講義では、パワーポイントを使用した。

2) 自己点検・評価

講義資料は毎年最新のものに変更しており、今後もその態度で進めていきたい。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今後も現状の方針で進める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

毎回、講義に関連したレポートの提出を義務付け、その採点結果を合算して最終評価とした。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

14名の受講者中2名を付加判定とした。レポートの未提出2回の者1名、1回の者1名である。いずれも総合得点が基準点に未達のため、不合格判定とした。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今後も現状の方針で進める。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	言語学 A	第 1～4 学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

言葉に対するより鋭敏な感覚を養うために、言語を科学的に分析する言語学の中心的な研究対象とその研究成果を知り、自ら言語を客観的にとらえる態度を養成することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

言語学の主要な領域について扱っており、目標と授業内容は合致している。また、合格率も高いことから、目標は達成できていると考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義・演習等の割合：講義 100%。
自作の教科書 (A4サイズ20ページ) を初回授業時に配付。講義時には毎回スライドを使用。スライドの枚数は各回20枚前後。スライドには必要に応じて音声やビデオを活用した。毎回の授業終了前に、リアクションペーパーに授業内容に関するコメントや質問を記入して提出するよう求め、次回の授業時に追加解説を行った。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。特に、毎回の授業の冒頭に行った、前回の授業の内容に関する質問への解説を評価する意見が多かった。また、受講者の出席率も問題なく、授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価：行っていない。
総括的評価：レポート 100%

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

履修放棄者 1 名を除き、評価の対象となった学生は全員合格した。成績評価に問題はないと判断する。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	言語学B	第1～4学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

言葉に対するより鋭敏な感覚を養うために、言語を科学的に分析する言語学の中心的な研究対象とその研究成果を知り、自ら言語を客観的にとらえる態度を養成することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

言語学の主要な領域について扱っており、目標と授業内容は合致している。また、合格率も高いことから、目標は達成できていると考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義・演習等の割合：講義 100%。
自作の教科書 (A4サイズ20ページ) を初回授業時に配付。講義時には毎回スライドを使用。スライドの枚数は各回20枚前後。スライドには必要に応じて音声やビデオを活用した。毎回の授業終了前に、リアクションペーパーに授業内容に関するコメントや質問を記入して提出するよう求め、次回の授業時に追加解説を行った。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。また、受講者の出席率も問題なく、授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価：行っていない。
総括的評価：レポート 100%

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

履修放棄者、レポート未提出者を除き、評価の対象となった学生は全員合格した。選択科目のため、一定数の履修放棄者があるのは想定内と評価する。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	心理学	第1～3学年
科目責任者(記載者)	竹ヶ原 靖子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医療従事者として支援に携わる前段階として、人間の心の動き、グループダイナミクスなどのメカニズム等に関わる知識を習得する。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

シラバスにそって授業を進めた。キーワードについてもなぜそうなるかなどを実験内容も紹介しながら説明した。しかし「一般教養の選択科目」として学生が捉える「心理学」との乖離があったようだ。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生との認識の乖離は担当者変更により新たな内容が周知されるのが遅かったためと考えられる。オリエンテーションで扱う内容や学生に求める学習姿勢などについて周知していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

担当教員が作成した講義資料を用い、講義を進めた。

2) 自己点検・評価

アンケートから講義の難易度について疑問の声があがったが、一般心理学の基本的な内容を中心に講義内容を作成したため問題ない。担当者が変わったことで講義内容も大幅に変更になり、前年度までを参考に履修を決めた学生にとっては不満があったと考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

薬学生、薬剤師にとっての心理学の必要性が低学年のうちには特にイメージがしにくいため上記のような意見が出ると考えられるため、初回のオリエンテーションの中で、薬剤師と心理学のつながりについて丁寧に触れるようにしたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験100%で評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率から見て大きな問題はないと思われる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特になし。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学英語Ⅲ	第2学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

大学での学習・研究および薬剤師としての実務において必要となる英語運用能力の基盤を確立するため、薬学に関連する平易な英文の正確な聞き取りおよび読解の能力を習得することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標と授業内容は合致している。また、合格率が97%となったことから、科目の目標は達成されたと考える。授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義・演習等の割合：演習 100%
教科書の他に、各ユニットA4サイズ4ページのワークシートを配付。提出課題を採点し、模範解答を付して返却した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。また、受講者の出席率も問題なく、授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価：提出課題を採点し、模範解答を付して返却した。
総括的評価：提出課題の達成度 30%、定期試験 70%

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

履修を放棄し、定期試験を受験しなかった1名を除いて、評価の対象となった学生は全員合格した。評価方法については問題がないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

評価について問題はなく、改善すべき事項はない。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学英語Ⅳ	第2学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

大学での学習・研究および薬剤師としての実務において必要となる英語運用能力の基盤を確立するため、薬学に関連する平易な英文の正確な聞き取りおよび読解の能力を習得することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標と授業内容は合致している。また、合格率が95%となったことから、科目の目標は達成されたと考える。授業評価でも大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

上記の通り、到達目標は現状で達成されており、特に改善を要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義・演習等の割合：演習 100%
教科書の他に、各ユニットA4サイズ4ページのワークシートを配付。提出課題を採点し、模範解答を付して返却した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケート結果は良好であった。また、受講者の出席率も問題なく、授業方法について改善が必要な点は見られない。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価：提出課題を採点し、模範解答を付して返却した。
総括的評価：提出課題の達成度 30%、定期試験 70%

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

履修を放棄し、定期試験を受験しなかった3名を除くと不合格者は2名だった。評価方法については問題がないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

評価について問題はなく、改善すべき事項はない。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学演習VI	第4学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

大学での学習・研究および薬剤師としての実務において必要となる英語運用能力を確立するため、薬学に関連する語彙のつづり・発音・語義を習得すること、更に、薬学に関連する英文の正確な読解能力を習得することを目標としており、授業はこれに沿って行われている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標と授業内容は合致している。また、受講者全員が合格したことから、科目の目標は達成されたと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

到達目標と授業内容は一致しており、変更の必要はないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義・演習等の割合：演習 100%
本授業はオンデマンド形式の遠隔授業で行った。講義を音声ファイルとして配信し、受講者は各自の立てたスケジュールで受講した。
毎回の授業時に学習項目ごとの要点と演習問題を掲載したA4サイズ6ページ前後のワークシートを配付した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートでは「知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた。」「教員は質問に対して的確に分かりやすく答えてくれた。」「この授業の関連分野に関心を持つことができた。」の評価が低かった。オンライン授業のため、十分な双方向性の確保ができなかったこと、授業内容と学生の専攻領域の内容との関連を十分に伝えられなかったことが原因と考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

メール等を通じて質問がしやすい環境を構築する。専攻領域との関連性をより明確にして解説する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価：毎回のワークシートに復習課題を提示し、次回の授業時にその一部から成る小テストを課した。小テストは採点後に返却した。
総括的評価：提出課題 30%、定期試験 70% で評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

受講者全員が合格しており、評価方法に問題はないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特に改善すべき点はない。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	数学Ⅰ	第1学年
科目責任者(記載者)	木田 雄一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬学を学ぶ上で基礎となる数学に関する基本的知識を習得でき、それらを薬学領域で応用するための基本的技能を身につけて、数学Ⅱへの橋渡しとなる授業を行っている。具体的には、等差数列と等比数列・行列と連立方程式・確率・指数関数と対数関数・微分と積分の計算、および、それらの応用としての微分方程式と反応速度式の計算に関する基礎知識について授業している。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

科目の到達目標の達成と数学Ⅱの理解に必要な各項目について授業ができており、定期試験の成績もよいので、大きな問題はないと考える。ただ、うしろの授業項目になるにつれて正解率が低下していくことは、ある程度は難易度も上がっていくため仕方ないことではあるが、改善すべき点と考える。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

正解率が低下していくうしろの授業項目(具体的には、微分・積分・微分方程式)のテキストや小テストの内容をより充実させ、さらに詳細かつ丁寧な説明にすることで改善していきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義は黒板とプロジェクタと自作テキストを用いて行った。プロジェクタは、各種の関数とグラフの関係を動的に示すため等に使用した。自作テキストは、教科書の理解を助けるために要点を抽出し、公式の理論的な意味とそれを使った計算方法などの補足説明を加えたものとして作成して配布した。双方向性を確保するため、小テストを講義中にプリントとGoogle Formsで行い、学生に解答させたのち解説した。

2) 自己点検・評価

学生の参加の項目の評価が悪い(全体平均より0.37ポイント低)ので、改善が必要である。例題や小テストを解かせる「作業」は行っているが、学生に発言させたり学生との議論はしていないのが原因だと思われる。1年生の前期でまだ大学に慣れていない学生が委縮するかもしれないと考えて避けていたのが良くなかったと思われる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業に積極的に活発そうな学生を指名して例題の解き方を説明させるなど、学生が発言する機会を増やすよう工夫する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形式的評価として、講義中に小テストを解答させた。学生が解答している間に教室を巡り、解答の進捗と内容を確認して理解度を判断した。また、小問を随時Google Formsで解答させ、即座に結果を集計して示すと共に正解を解説した。総括的評価は、定期試験の成績(90%)と講義中の小テストの完成度(10%)で行った。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率も平均点も高く、自由記述にも成績評価に関する不満の意見がないので、総括的評価は問題ないと考えている。形式的評価については「授業の最後に例題を解いて実践を交えて説明するのが分かり易い」「練習問題を沢山載せてくれるのがいいと思う」「答えのプリントがあるので分からない問題の解き方や公式を覚えやすい」などの意見があり、問題はないと考える。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

例題、練習問題や小テストを積極的に出題して、解かせた後で解答を示して確認させる実践的な学習が好評なので、計算問題をより充実させていきたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	数学Ⅱ	第1学年
科目責任者(記載者)	渡邊 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬学を学ぶ上で基礎となる数学に関する基本的な知識を習得し、それらを薬学領域で応用できる力を身に付ける。物事の現象を数学的に考えられるようになる。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

薬学教育に必要な数学を演習問題を用いて解説しながら講義を進め、理解度のチェックとして宿題を課した。学生の本試験の平均点が72.9点であり、本科目の不合格者が5名いたが、概ね科目の到達目標を達成した。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生からの講義に対する不満は特にないことから、今年度も引き続き同様とする。クラス分けに関しては、入学者の実力によるが、Aクラスの人数よりBクラスを多くする予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

小テストまでは行っていないが、演習問題を学生に解かすことで学生の理解力を計った。その際、学生の解答の進捗具合を確認した。これは成績には反映させていない。さらに、宿題を課し、学生の理解力を把握した。講義80%、演習20%

2) 自己点検・評価

宿題を課し、解答方法を確認することで習熟度を確認しながら講義を行う方法は学生にとっても自分の理解度を確認するうえでとても重要であると考えられた。宿題をすることで、わからないところを自分で解決し、解決できない場合は、教員に聞きに来ることもでき学生からも好評であった。本試験の平均点が76.3であり、特に問題がある講義等ではないと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。演習問題に関しては少し問題を入れ替える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験及び追・再試験の成績に基づき評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

本試験の平均点が72.9点であり、本科目の不合格者が5名いたが、概ね科目の到達目標を達成した。学生からの講義への不満はないことから本科目の講義に関しては特段の問題はないと考える。昨年度より平均点が下がったが、不合格者が5名であることから特に問題ないと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。演習問題に関しては少し問題を入れ替える。クラス分けに関しては、手厚く指導することを考え、Aクラスの人数を減らすこととする。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	化学 I	第 1 学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

今後の大学での化学系の専門科目を無理なく履修できる知識の修得を目標としている。具体的には、酸・塩基、酸化還元反応、有機化合物の性質、医薬品を含む化学物質の分析の基礎、さらに有機化学反応などである。高等学校において『化学』を履修してこなかった学生も一定数いることを踏まえて、次の化学Ⅱ、さらにその先にある有機化学Ⅰ～Ⅳへ続くことを考慮して目標設定している。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

『授業は理解しやすいように工夫されていた。』という項目では、8割以上の学生がそう思うと答えており、さらに定期試験の平均点が73点以上であったことから、1年生前期の段階での目標は概ね達成できたと考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

「目の前で実験を披露してくれるのは楽しい」、「授業の要点を実験で理解しやすいように工夫されている点が良い」などのコメントを頂いたので、次年度以降も継続したい。また、「授業の最後に確認問題を解くことが、知識を深めるために役に立った」との意見もあったので、継続する予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

指定の教科書「薬学生のための基礎化学(修正版)」の他に、授業資料(対応する教科書のページを記載)を作成し、可能な限り実験を見せることをで授業を進めた。高等学校で化学を未履修の学生にも分かるように、なるべく専門用語は使わず説明した。授業資料には練習問題も記載し、授業時間の最後に確認問題を解いて提出させ、正答率の低い問題については次回の授業の冒頭で説明を加えた。

2) 自己点検・評価

化学Ⅰは3名の教員で担当したが、『授業はシラバスに沿って、系統だっで行われた』という項目で約8割そう思うと回答しており、それぞれの教員の担当がうまくいっていたと考えられる。また、『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』の項目では約7割がそう思うと回答していることから、次年度以降も重要な基本事項を丁寧に説明していきたい。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

『教員は効果的に学生の参加(発言、作業)を促した。』の項目でそう思うと回答した学生が5割を下回った。確認問題にコメントを書く欄を設けているが、授業中に発言を促すことはほとんどなかった。次年度以降は、実験する前に結果を予想させて発言を促すなどを検討したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

毎回の授業での課題への取り組み(20%)と定期試験(80%)を総合的に判断した。課題への取り組みについては、毎回の確認問題に対する回答で評価した。確認問題を解いて、次回の授業で添削結果の返却を受けることで、毎回の授業の理解度を各自が把握できるようにしている。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

定期試験の平均点は73点以上であったことから、多くの学生は化学Ⅰの範囲を理解できたと考えている。再試験対象者とは試験前に面談し、定期試験での学習方法を確認し、再試験に向けての学習を一緒に考えた。これにより、最終的には1名のみ不合格となったので、次年度以降も面談は継続したいと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

3名の教員で実施している科目であるが、試験はそれぞれの教員が授業回数に応じた得点の分配で出題している。特に問題はないと考えられるので、次年度以降も同様の得点分配で試験を実施する予定である。また、「一から丁寧に教えてくれるので、とてもわかりやすかったです。」とのコメントも頂いたので、全員が合格できるようにさらに丁寧に授業を心がけたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	化学Ⅱ	第1学年
科目責任者(記載者)	西村 良夫	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標に対して十分に網羅しつつ、講義時間内に消化することができた。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

履修者のうち、出席不足や追再試験の欠席が数名いたが、最終的に 55/57 名が本科目に合格することができたため、到達目標を概ね達成できたものと考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

アンケートの結果からは否定的な意見はなく、特筆すべき問題点はないと思われる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義が 80% 程度で、毎回演習問題を解く時間を設け、解説する時間を含めて 20% 程度割り当てた。「ベーシック薬学教科書シリーズ 4 無機化学」(化学同人) を使い、内容をまとめた資料を配布して進めた。質問について、居室やメールでいつでも受け付けるように伝え、学生が質問しやすい雰囲気づくりを心掛けた。

2) 自己点検・評価

全体として特筆すべき問題はないが、アンケート中の「教員は学生に授業に対する参加を促した。」のところはやや低かった (4.04点) ので、改善を要すると考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生が主体的に授業に参加するため、時間があれば問題演習をグループで行ったり、発表する場面を作りたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

毎回演習問題を解く時間を設け、また解答・解説を書き込んだ資料を作成して配布することで、形成的評価として学生が自身の理解度を確認できるようにした。総括的評価として、定期試験 100% で評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率から見て、特筆すべき問題点はない。昨年度 (2022年度) の定期試験の平均点が78点であり、本年度は 73 点であった。やや低下したが、高得点者 (90点以上) が 25%程度なので難易度としては適切なものと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

アンケートの結果から、特筆すべき問題点はない。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理学 I	第 1 学年
科目責任者(記載者)	小野 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

物体の運動、波動、電磁気学の分野の基礎的な項目を学習し、物理現象の概念をとらえる素養を身につけることが本科目の到達目標である。この目標を達成するため、力学、波、電磁気学などに関する基本的な範囲を中心にした講義を行い、知識が定着するよう適宜演習を取り入れた形式で行った。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

96%の履修者が単位修得し、その中の4割以上が80%以上の得点率を得ていることから、到達目標は概ね達成されていると考えている。適宜演習を取り入れて繰り返し復習することが知識の定着につながっていると考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

現状の講義形式を維持しながら、学生の理解をより深めるために現行の形成的評価の機会を増やし、重要事項の繰り返しの説明を時間の許す限り行うようにして、目標の達成度をより高めるよう努める。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義80%、演習20%程度の割合で授業を行った。資料として、教科書の他に演習用の問題やその解答例などの配布資料も利用した。双方向性方策として、授業中に学生に質問を促し直接受け付ける時間をとった。授業内容が理解できているかを適宜学生に問いかけて状況を確認しながら授業を進行した。

2) 自己点検・評価

適度な演習を取り入れたことにより知識の定着がみられ、問題と解答を含めた配布資料により自主学習が円滑に進行しているようであった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業の方法については好意的な意見が多かったため、基本的な授業方法は変更せず、問題演習や小テストを行う機会を更に設けて学生の理解度を適宜確認し、理解度の低い範囲は次回の講義で再確認するなど、学生の知識の定着をさらに高めるよう努める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価として、授業の途中で問題演習を適宜行うことで授業内容の理解度を学生自身が確認する機会を設けた (1コマあたり1～2回、1回10分程度)。総括的評価は定期試験により行った。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

形成的評価を適宜取り入れた評価方法については、アンケート結果でも好意的な意見が多く、概ね適切であったと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価は概ね良好であるため、基本的な授業内容や方法については特に変更はしない。その上で、学生の理解がより深まるように、繰り返しの説明や形成的評価の機会をより多く設ける。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理学Ⅱ	第1学年
科目責任者(記載者)	志村 紀子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

物質を構成する原子・分子の構造、物質のもつエネルギーや物質の三態に関する基本的知識を習得し、物質の状態について理解すること、また、放射線に関する正しい知識を身につけることが本科目の到達目標である。この目標を達成するため、原子・分子のもつエネルギーや物性、放射線などに関する基本的な範囲を中心とした講義を行い、知識が定着するよう適宜演習を取り入れた形式で行った。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

退学者を除く履修者全員が当該単位を修得できたことから、到達目標は概ね達成されているといえる。適宜演習を取り入れて繰り返し復習することが知識の定着につながったと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

現状の講義形式を維持しながら、学生の理解をより深めるために現行の形成的評価の機会を増やし、重要事項の繰り返しの説明を時間の許す限り行うようにして、目標の達成度をより高めるよう努める。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義80%、演習20%程度の割合で授業を行った。資料として、教科書の他に演習用の問題やその解答例などの配布資料も利用した。双方向性方策として、授業中に学生に質問を促し直接受け付ける時間をとった。授業内容が理解できているかを適宜学生に問いかけて状況を確認しながら授業を進行した。

2) 自己点検・評価

適度な演習を取り入れたことにより知識の定着がみられ、問題と解答を含めた配布資料により自主学習が円滑に進行しているようであった。また、演習問題を多く取り入れたことなどに対して良好な授業評価を得られた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業の方法については好意的な意見が多かったため、基本的な授業方法は変更せず、問題演習や小テストを行う機会を更に設けて学生の理解度を適宜確認し、理解度の低い範囲は次回の講義で再確認するなど、学生の知識の定着をさらに高めるよう努める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価として、授業の途中で問題演習を適宜行うことで授業内容の理解度を学生自身が確認する機会を設けた（1コマあたり1～2回、1回10分程度）。総括的評価は定期試験により行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

形成的評価を適宜取り入れた評価方法については、アンケート結果でも好意的な意見が多く、概ね適切であったと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価は概ね良好であるため、基本的な授業内容や方法については特に変更はしない。その上で、学生の理解がより深まるように、繰り返しの説明や形成的評価の機会をより多く設ける。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生物学I	第1学年
科目責任者(記載者)	櫻井 敏博	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生命の基本単位である細胞とはどのようなものか、また、生命活動の中心となるタンパク質の構造やその様々な機能の理解を通じて、今後履修する薬学の専門科目を涵養していくための基礎的事項を理解することを目標としている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標と講義内容は合致している。定期試験は58名が受験し、38名が再試験となった。再試験受験者のうち3名が不合格となった。その3名に対し、再々試験を実施し、全員合格となり、目標は達成したものと考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

「配布資料がわかりやすい」や「理解を深めることができた」などの評価がある一方で、効果的に学生の参加を促したの評価が全体平均よりも低かった。一方的な講義となってしまっているため、改善をしていく必要がある。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

1年生の講義であり、今後の薬学専門科目の土台となる科目であるということもあり、高校生物の教科書やドリルを抜粋し、課題としているだけでなく、習得した知識が今後どの分野、あるいはどのように発展するのかを踏まえながら、講義を行っている。配布資料の中には、確認問題を付しており、理解を深めている。確認問題に関する質問は常に受け付けており、わからない箇所については、理解ができるまで、改めて解説した。

2) 自己点検・評価

授業評価にもあったが、学生がアクティブラーニングできるような講義ができるように努めたい。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価が高い先生にFDなどで、どのような講義を行っているかを教えていただきたい。そのうえで、採用できることがあれば、取り入れていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

試験の結果のみで評価した。2名の教員による講義なので、講義コマ数に応じて配点した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

1年生前期1の講義であり、今後の専門科目の土台である科目でもあるため、あえて厳しい試験を行っている(ただし、事前に問題内容については周知した)。大学の試験が難しいものだと認識して、勉強に励んでくれればと思い実施している。授業評価もまずまずなので、改善する点は改善しながら、今後も続けていきたい。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

講義ごとに課しているレポートについても成績評価の一部に取り入れるようにし、レポートの重要性を認識してもらうようにしたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学基礎実習	第1学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本実習は『物理系』『化学系』『生物系』の問題解決能力の醸成、専門科目の実習さらに研究室でスムーズに実験できることを狙いとする。『化学系』では、安全かつ基本的な実験操作、例えば分液操作方法を修得する。『物理系』では、予想が可能な実験を通して、例えばpH変化などを測定し知識の定着を図る。一方、『生物系』では、「可視化」をキーワードとして、イムノクロマト法を通し目に見えない物質の検出原理などを学ぶ。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

『化学系』『物理系』『生物系』の3つの科目に関わる基本的な実習であるが、『授業はシラバスに沿って、系統だっで行われた。』という項目でそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生の割合が9割以上であり、総合得点率が80%以上であった学生は、全体の90%以上であったことから実習を通して多くの学生が理解を深めたと考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

「実習を通して、化学や生物、物理とは何かを学ぶことが出来たのが良かったです。」というコメントを頂き、座学だけでなく実習の重要性を強く感じとってくれたと思っている。『授業はよく準備がなされていた。』という項目では、8割以上の学生がそう思うと回答してくれたことから、次年度以降も実習の準備をしっかり整えて実施したいと考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

予め実習書を配付し、授業前には注意事項を伝達して、さらに、実習中も安全面に最も配慮して教員が巡回して指導した。『化学系』『物理系』『生物系』それぞれの基礎となる部分であること、さらに、座学の知識の定着も意識して指導している。

2) 自己点検・評価

『授業は理解しやすいように工夫されていた。』という項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は8割以上、『教員の授業に対する熱意を感じた。』の項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は9割以上であったことから、大きく実習の方法を変える必要はないと考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今後の土台となる実習であるため、基本を理解して実験操作を身につけ、さらに言うとその操作の理由についても理解することを主眼としているが、上記の評価のように『授業は理解しやすいように工夫されていた。』という評価が高く、さらに教員の授業に対する熱意も感じ取ってくれたことから、次年度以降も熱い実習を展開して行きたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

『物理系』 実習態度：30%、実習レポート：70% 『化学系』 実習試験：20%、実習態度、実習レポート：80% 『生物系』 実習試験：30%、実習態度、実習レポート：70%
最終成績は、『物理系』『化学系』『生物系』の合計を100%に換算。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

実習では、試験もあるがレポートの評価の割合が高い。大学に入って初めてレポートを書いた学生も多いと思うが、考察部分は予想に反した結果が出た時にどう考えるかを記載するので、難しい側面もあったと思う。しかし、最終的に全員が合格したことから、レポートの書き方の基礎が養われたと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

3つの系を総合して評価しているが、特に問題はないと考えているので次年度も継続したい。『この授業の関連分野に関心を持つことができた。』という項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は8割以上であったので、『物理系』『化学系』『生物系』に留まらず、関連分野にも関心が高まったと考えている。次年度以降も、学生の興味関心を高める実習を継続したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	フレッシュマンウィーク	第1学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

大学生として安全かつ有意義な生活を送るために必要な知識・技能・態度がどのようなものかを知り、それらを習得しようとする意識を持つことを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標と授業内容は合致している。また、合格率も高いことから、目標は達成できている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。カリキュラム改定に伴い次年度は開講しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義・演習等の割合：講義 20%、演習80%
新型コロナウイルス感染症の流行のため、オリエンテーションキャンプが実施できなかったことを受け、その内容の一部を教室での演習として実施した。グループワークのためのワークシート A4 7ページ。グループワーク時にはスライドを使用した。グループワーク実施中の口頭でのやりとりを通じて、受講者の疑問点の解消を行った。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートの結果は総じて高評価で、「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」との回答はすべての項目で0だった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価、到達度のいずれも高く、改善を要する点はない。カリキュラム改定に伴い次年度は開講しない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

活動への取り組み姿勢(教員の観察による評価)40%、講義の内容に関するレポート 60%で評価した。形成的評価は行わなかった。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

全員が合格しており、評価方法については問題がないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

評価について問題はなく、改善すべき事項はない。カリキュラム改定に伴い次年度は開講しない。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	フレッシュマンセミナー	第1学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

大学の規則や6年間の学習の内容、卒業後の進路の選択肢を知ること、および効果的な学習の進め方、適切な学習計画と生活環境の作り方、教員や友人とのコミュニケーションの取り方について学ぶことを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標と授業内容・方法は合致しており、合格率も高いことから、目標は達成できている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義・演習等の割合：講義 20%、演習 (SGD、グループワークを含む) 80%
用いた資料：教科書無し、自作プリントを配付、一部の授業で映像資料を使用
双方向性確保の方策：グループによる活動を多く取り入れ、学生間の円滑な関係構築を図った。

2) 自己点検・評価

各授業内容にあった教育方法で実施しており、問題はない。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価はすべての項目で高水準であり、また、自由記述でも問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の授業方法を変更する必要はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価の方法：形成的評価は行わなかった。
総括的評価の方法：授業時の活動(リアクションフォームへの記入・ディスカッションでの発言や質問)80%、提出課題 20%

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

受講者全員が合格しており、評価の方法に問題はない。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

評価について問題はなく、改善すべき事項はない。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	情報科学講義	第1学年
科目責任者(記載者)	木田 雄一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

情報システム、特にコンピュータと携帯情報端末を今後の学習や就職後の実務に効率的に利用できるようにするため、電子データの特徴、コンピュータの仕組みとハードウェア関連技術、ソフトウェア関連技術、ネットワーク関連技術、および、情報倫理と情報セキュリティの基礎知識を習得させる授業を行っている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

科目の到達目標の達成に必要な各項目について授業ができており、定期試験の成績もよいので、大きな問題はないと考える。ただ、興味関心の評価（全体平均より0.17ポイント低）が悪いので改善すべきと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

PCを含む情報機器全般に通じる基礎知識を習得させる授業をしているので、スマホに特に強い関心をもつ最近の学生の中には、授業内容にあまり興味関心を持っていない者もいるかもしれない。情報機器は進化が非常に速いので、1年生が卒業する頃にはスマホはもう使われないかもしれない。未知の情報機器が登場しても役に立つ基礎知識の重要性をもっと強調して興味をもってもらえるように改善する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は、黒板とプロジェクタを用いて行った。プロジェクタは、情報機器の内部構造を見せたり、アルゴリズムの動作を説明すること等に使用した。教科書の理解を深めるために、その要点を抽出し補足説明を加えたプリント冊子を作成して配布した。また、授業中に随時Google Formsを使って小問に解答させ、結果を即時に集計して正解の解説を行うと共に、授業の最後に小演習を行い解答を提出させた。

2) 自己点検・評価

自由記述欄に「計算問題を黒板で分かり易く解説してくれてよかった」「具体的な例をもとに説明してくれて分かり易かった」「計算していき答えが合っている時、面白いと感じた」「問題プリントを毎回やるので覚える事ができた」などの意見がある一方、「情報系は難しい分野だと再認識した」「難しかった」という意見もあった。一部の学生には難しく感じる内容になっている点は改善すべきだと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

配布するプリント冊子の内容をブラッシュアップして、より分かり易くする。また、2進数の計算過程や論理回路の動作を画面上で操作しながら確認できる説明用Webアプリを作成しているのだが、それを掲載している自作Webページの利用が学生にあまり広まっていないので、来年度はもっと利用してもらえるよう積極的に宣伝する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形式的評価として、講義中に小演習を行って解答させた。学生が解答している間に教室を巡り、解答の進捗と内容を確認して理解度を判断した。また、小問を随時Google Formsで解答させ、即座に結果を集計して示すと共に正解を解説した。総括的評価は、定期試験の成績(90%)と講義中の小演習の完成度(10%)で行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

合格率も平均点も高いので、総括的評価は問題ないと考えている。形式的評価については、学生参加の評価（全体平均より0.25ポイント低）と質問に対する答えの評価（全体平均より0.12ポイント低）が悪かったので、改善の必要があると考える。学生参加の評価点が低い原因は、Google Formsによる小問の出題回数が少なかったためと思われる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

形式的評価を行う小演習をより充実させる事と、Google Formsによる小問の出題回数を増やす事で授業の双方向性を高めて、学生参加の評価点を上げたい。

また、授業時間の終わりに質疑応答の時間を設けるなどして、学生からの質問にもっと答えられるようにする。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	IT技能演習 I	第1学年
科目責任者(記載者)	木田 雄一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

情報の収集・加工・提供・管理を効率よく行うための技能として、コンピュータの基本的な利用技術を習得させる。具体的には、OSの基本的な操作方法、アカウントとパスワードの管理、電子データの特徴とデータファイルの管理、ワードプロセッサによる文書作成と印刷、PowerPointによるスライド作成の基本技術を習得させる授業を行っている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

科目の到達目標の達成に必要な各項目について授業ができており、最終的な成績もよいので、問題はないと考えている。自由記述欄に「PC技術が上達しているのを実感できて良い」「今まで全然わからなかったWordの基本的な使い方がよく分かった」「毎回新しい技術を身につけることができるとても良い」という意見があり、授業の目標がうまく達成できていると考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

全項目が全体平均を上回っているものの、知的好奇心の項目の評価点が比較的低かった原因は、今の学生にはPCよりもスマホの方が身近で興味をもっているからと思われるので、PCを上達すればスマホをもっと活用できるようになる事が伝わるようにする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

演習開始時に概要説明をしたのち、演習時間中は教室を巡回して課題作成の進捗を適宜チェックした。躓いている学生には何が分からないかを聞き、その原因が全学生に当てはまる場合はプロジェクトとマイクを使って全学生向けに指導し、補足説明資料を追加作成してWebページで公開した。もし原因が個別的なものである場合は、その場で当該学生に個別指導した。

2) 自己点検・評価

全ての評価項目が全体平均を上回っているので、大きな問題はないと考えている。学生の参加の項目が若干低い原因は、この演習が基本的に個人がPCに向かって作業する授業であることに加えて、新型コロナウイルス感染対策のため不要な会話は控えるように注意していたので学生間での相談がしづらかった事が原因だと思われる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生間および教員と学生間でコミュニケーションを高めるには会話の許容度を上げる必要があるが、新型コロナウイルス感染対策との両立が難しい。コロナ前であれば、振り向いて後ろの席の友人に操作方法を聞くなどのことも容易にできていたが、コロナ下の学生には心理的な抵抗があると思われる。そのような抵抗感を軽減できるように配慮しつつ、感染対策も考慮したバランスを考えていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

総括的評価は、演習課題の完成度(80%)、および、演習中の態度と積極性(20%)で行った。形式的評価は、演習中に教室を巡回して課題作成の進捗を適宜チェックして、躓いている学生には解決のヒントを助言した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率も平均点も高いので、総括的評価に問題はないと考えている。形式的評価についても、授業中の巡回をしており、自由記述欄に「パソコン(補足説明資料を掲載したWebページの事だと思われる)に丁寧に説明が書いてあり分かり易い」との意見もあるので、問題ないと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

丁寧な説明が学生に評価されているので、今後もよりきめ細やかな形式的評価とフィードバックを心がける。また、授業用Webページに掲載している補足説明資料を、さらに充実させたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	IT技能演習Ⅱ	第1学年
科目責任者(記載者)	木田 雄一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

情報の収集・加工・提供・管理を効率よく行うための技能として、コンピュータの基本的な利用技術を習得させる。具体的には、表計算ソフトによるデータ処理とグラフ作成、検索サイトやポータルサイトの特徴に応じた医薬品や文献の情報収集の基本技術を習得させる授業を行っている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

科目の到達目標の達成に必要な各項目について授業ができており、最終的な成績もよいので、問題はないと考えている。
全項目が全体平均を上回っているものの、IT技能演習Ⅰと同じく知的好奇心の項目の評価点が比較的低かったので、改善の余地があると考えます。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

データ解析やグラフ作成に使うExcelは、学生実験や卒業研究で非常に役立つ必須のツールなので、その事をもっと強調して、学生の興味関心を高めたい。また、医薬品添付文書や医療文献の検索技術は、レポート作成や卒業研究だけでなく、就職後にも役立つ技能である事を強調して、学生の当事者意識を高める。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

演習開始時に概要説明をしたのち、演習時間中は教室を巡回して課題作成の進捗を適宜チェックした。躓いている学生には何が分からないかを聞き、その原因が全学生に当てはまる場合はプロジェクトとマイクを使って全学生向けに指導し、補足説明資料を追加作成してWebページで公開した。もし原因が個別的なものである場合は、その場で当該学生に個別指導した。

2) 自己点検・評価

全ての評価項目が全体平均以上であり、自由記述欄に「パソコンを前よりも使えるようになったと感じた」「WordやExcelの基礎機能・応用機能の種類や使い方を知って実際にできるようになった」「エクセルの計算は今後も役に立ちそうで、とても面白くてよかった」との意見があり、大きな問題はないと考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生に作成させる課題をブラッシュアップして、学生にさらに興味関心を持ってもらえるように改善する。情報科学分野の昨今の流行を取り入れつつ、卒業研究に役立つ技能を習得させる事も考慮して、データサイエンス関連の課題を増やそうと思っている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

総括的評価は、演習課題の完成度(80%)、および、演習中の態度と積極性(20%)で行った。形式的評価は、演習中に教室を巡回して課題作成の進捗を適宜チェックして、躓いている学生には解決のヒントを助言した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

合格率も平均点も高いので、総括的評価に問題はないと考えている。形式的評価についても、自由記述欄に「分からない所も分かり易く教えて下さった」「課題の抜けている所を教えてくれて、自分の気づけなかったミスを見つけれられた」との意見があり、大きな問題はないと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今後もよりきめ細やかな形式的評価とフィードバックを心がける。また、授業用Webページに掲載している補足説明資料を、さらに充実させたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	ITプレゼンテーション演習	第2学年
科目責任者(記載者)	木田 雄一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本演習ではまず、発表スライドの作り方、口頭発表の仕方、質疑応答の仕方についての講義を行い、分かり易い発表をするための基礎知識を学習させる。次に、学んだ基礎知識を活かして、SGDをしながら発表テーマの決定、資料の整理・要約、発表スライドの作成および口頭発表を実際に行わせて、分かり易いプレゼンテーションに必要な基礎技術を習得させる授業を行っている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

全体平均より大きく悪い評価項目は無く、科目の到達目標の達成に必要な各項目について授業ができており、最終的な成績もよいので大きな問題はないと考えるが、理解しやすい工夫の評価が2番目に悪かった(全体平均より0.05ポイント低)ので改善の必要があると考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

重要項目の強調の評価も悪かった(全体平均より0.11ポイント低)ので、重要項目がより分かり易く伝わるように配布資料を修正して、学生が授業内容をさらに理解し易くなるように工夫する。ただ、ペーパー試験を行う授業ではないため、例えば頻出問題のように分かりやすい重要項目は無いので、それが原因で評価が低くなった可能性も考えられる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

前半3回の講義では、教科書に基づいて作成したスライドを使った。教科書の理解を深めるために、その要点を抽出し補足説明を加えたプリント冊子を作成して配布した。
後半4回の演習では、教科書のスライド作成例を参考にしながら、同時期に行われている学生実習の実験結果を説明する発表スライドをPowerPointで作成させ、最終回で質疑応答を伴う発表会を行った。

2) 自己点検・評価

全体平均より大きく悪い評価項目は無く、自由記述欄に「生徒に優しい」や「1人で楽しそうに喋って楽しかった」とあるので、授業方法に大きな問題はないと考える。ただ、「1人で」と記述されているように前半の講義では私が話し続ける場面が多かったので、講義の中でも学生との双方向性をより高める工夫が必要だと思われる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

講義ごとに提出させている小演習で「分かり易い説明の条件は何だと思うか」など学生の考えを記述させているが、それだけでなく、講義の中でも学生を指名して考えを述べさせて、それについて議論する時間を設けてもよいかもしれない。ただ、そのためには講義内容を削る必要があり、内容の精査が必要である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形式的評価として、学生が発表スライドを作成している間に教室を巡回して、スライド作成の進捗状況を随時確認した。躓いている学生には原因を聞き、それが全学生に当てはまる場合はプロジェクタとマイクを使って全学生向けに指導した。それが個別的な原因である場合は、個別に指導をした。
総括的評価は、発表スライドの内容(80%)、および、スライド作成中の態度と積極性(20%)で行った。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率も平均点も高いので、総括的評価に問題はないと考えている。
形式的評価についても、ネガティブな意見はないので、成績評価について大きな問題ないと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

口頭発表の時間が既定時間より1分以上長かったり短かったりしたグループがあった。時間を合わせられないのは発表練習の不足が原因だと思われるので、今後は、時間を計りながら実際に声を出して行う発表練習とそのブラッシュアップが重要である事をより強調する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	日本語表現 I	第 1 学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬学の学びおよび卒業後の薬剤師実務において必要となる表現能力の基盤を確立するため、基礎的表現技能を習得することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標と授業内容は合致している。また、合格率も高いことから、目標は達成できている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義・演習等の割合：講義 50%、演習 50%。
原則として毎時間課題の提出を求めた。課題は添削して返却した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートの結果は良好であった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価、到達度のいずれも高く、改善を要する点はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

課題は模範解答を付けて返却し、形成的評価とした。
授業内活動での態度20%、提出課題80%で評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

受講者全員が合格しており、評価方法については問題がないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は特に要しない。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	日本語表現Ⅱ	第1学年
科目責任者(記載者)	伊藤 頼位	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬学の学びおよび卒業後の薬剤師実務において必要となる論理的思考・表現能力の基盤を確立するため、コミュニケーション能力を高めるとともに論証の方法を習得することを目標としており、授業内容はこれに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標と授業内容は合致している。また、合格率も高いことから、目標は達成できている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義・演習等の割合：講義 50%、演習 50%。
原則として毎時間課題の提出を求めた。課題は添削して返却した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートの結果は良好であった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価、到達度のいずれも高く、改善を要する点はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

課題は模範解答を付けて返却し、形成的評価とした。
授業内活動での態度20%、提出課題80%で評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

履修放棄者1名を除いて全員が合格しており、評価方法については問題がないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善は要しない。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	統計学	第2学年
科目責任者(記載者)	木田 雄一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

実務統計学を主体に展開して、科学的な根拠に基づいてデータを分析するのに必要な統計処理の基礎知識を習得し、実用的な統計手法の理解を高める授業を行っている。具体的には、卒業研究で必要になる統計的有意差検定の理解に重点を置きながら、相関解析や回帰分析まで講義する。PC演習ではExcelを用いた各種の統計処理を実際に行って、データの統計処理の基礎的技能を身に着ける。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

初めての担当科目だったので全体平均よりも悪い評価項目が多かった。特に、重要項目の強調の評価が最も悪かった。定期試験でここが頻出するというような分かり易い強調をしなかったのが原因の一つだと思われるが、それだけではないだろう。近年話題のAI技術もその構成要素はほとんど統計学である事をもっと強調して、学生の興味関心を高めるべきだったと考える。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

母集団に正規分布を仮定しないノンパラメトリック検定では、データの生の値ではなく、その大小関係に順位をつけて、その順位の値から統計量を計算して検定を行う。このような一見不思議とも思える計算法で薬品や治療法に効果があるのかどうかを数学的に判断できるのが有意差検定の面白さであり、そういった面白さと、AI技術にも通じる重要な知識である事が学生にもっと伝わる授業にしたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義は黒板とプロジェクタを用いて行った。教科書の理解を深めるために、その要点を抽出し補足説明を加えたプリント冊子を作成して配布した。プロジェクタはそれを投影するために使用した。双方向性を確保するため、毎回の講義において小演習をプリントで出題して、学生に解答させて提出させたのち解説を行った。

2) 自己点検・評価

自由記述欄に「先生は学生に優しくかった」と意見があるので学生との接し方に問題はないと考えるが、重要項目の強調の項目と、分かり易い工夫と興味関心の項目の評価が悪かったので、改善の必要があると考える。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

初めての担当科目で授業時間が不足気味になり、講義を急いだのが原因だと思われるので、講義の時間数を増やして、より丁寧に分かり易い授業をするよう改善する。また、プリント冊子とPC演習の内容をブラッシュアップして、学生の理解度がより高まるよう工夫する。さらに、卒業研究では実験データに基づいて研究対象の優位性を判断する場面が多く、そこで統計学の知識が必要になる事を強調して、学生の当事者意識を高める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形式的評価として、毎回の講義において計算問題を小演習として解答させた。学生が解答している間に教室を巡り、解答の進捗と内容を確認して理解度を判断した。PC演習においても各学生のPCを見て回り、質問に対応するなど適宜指導した。総括的評価は、定期試験の成績(80%)とPC演習の課題の完成度(20%)で行った。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格者を踏まえて評価する)

合格率も平均点も高く、自由記述にも成績評価に関する不満の意見がないので、総括的評価は問題ないと考えている。形式的評価については、質問に対する答えの評価が悪かったので、改善が必要だと考える。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

初めての担当科目だったので授業時間が不足気味になり、講義において質疑応答の時間をあまりとれなかった事が評価の低い原因だと考える。そこで、PC演習の時間数を減らし、その分、講義の時間数を増やす事で、質疑応答の時間を十分に確保できるように改善する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学入門	第1学年
科目責任者(記載者)	押尾 茂	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬学を学び始めるために、科学的思考、科学リテラシー、ワクチンの歴史、消毒と滅菌、ビタミン、疫学的考え方、薬と健康食品について初歩的な学習を行う。また、臨床現場の薬局薬剤師から薬剤師としての業務遂行に必要な考え方についての講義を受けた。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

幅広い分野を取り扱ったが、各回のレポート内容から、学生の理解度が高いことが伺えた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価も一定のレベルにあるので、同様に進めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書は使用せず、一部を記入型とした独自の講義資料を毎回講義時に配付した。講義では、パワーポイントを使用した。

2) 自己点検・評価

講義資料は毎年最新のものに変更しており、今後もその態度で進めていきたい。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今後も現状の方針で進める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

毎回、講義に関連したレポートの提出を義務付け、その採点結果を合算して最終評価とした。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

全員合格であり特に問題はないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今後も現状の方針で進める。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医療コミュニケーション論	第2学年
科目責任者(記載者)	竹ヶ原 靖子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医療現場のコミュニケーションで生じる様々な問題について考え、洞察を深め、医療コミュニケーションの素養を習得する。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

関連科目である「臨床コミュニケーション演習」と重複する部分もあり、どこまで「医療コミュニケーション論」で扱うかが難しかった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

知識部分については関連科目との差異化を図りつつ、コミュニケーションの基礎的スキルについては一朝一夕で身につくものではないため、重複しつつも扱っていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

担当教員が作成した講義資料を用い、講義を進めた。最終回は事例を取り上げてグループワークを行った。途中、理解度の確認と、自身の考えたことを言葉にする練習として講義内でレポートを実施した。コミュニケーションのスキルについて紹介するときは、実際のコミュニケーション動画を示したり、良くない例と良い例を提示し、イメージがしやすいように工夫した。

2) 自己点検・評価

コミュニケーションの悪い例や問題となる部分を指摘できても、それをどのように改善すれば良いかを考えることまではたどり着けない学生もいた。また、レポート作成も個人によって要する作業時間に大きな差が見られた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

持ち帰りの課題にしないために、講義内でレポートを作成したが、自身の考えを言葉にすることが不得手な学生にとっては作成時間が短く感じる者もいたようだ。2023年度は手書きでのレポート作成を実施したが、C-learningのレポート機能を用いるなどの学生もレポートを終えられるよう工夫をする。また、評価にかかわらない練習問題なども増やし、自分の考えを適切に表現することに慣れさせていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験80%、講義内の小レポート20%とした。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率から見て大きな問題はないと思われるが、レポートの質は学生によってばらつきが見られた。また、知識に関する問題は正解しても、自身で対応を考える記述の問題は書けないという学生も一部に見られた。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

そもそもコミュニケーションが不得手な学生や自身の意見を言葉にすることが苦手な学生がいることも踏まえ、評価対象となるレポートの前に、より具体例を充実させ「良い例」のイメージを促す。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床コミュニケーション演習	第3学年
科目責任者(記載者)	竹ヶ原 靖子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医療従事者として様々な人に寄り添い対応するために必要なスキルを習得し、自分自身のコミュニケーションの傾向について洞察を深める。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

合格率から最低限の目標は達成できたと考えられるが、対応を自分の言葉で考える分野については得意不得意の個人差が大きく本質的な習得という点では課題が残る。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

ロールプレイやグループワーク、練習問題などを充実させる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

担当教員が作成した講義資料を用い、講義を進めた。最終回は事例を取り上げてグループワークを行った。途中、理解度の確認と、自身の考えたことを言葉にする練習として講義内でレポートを実施した。レポート解説を行ったり、スキルの紹介の際には良い例と悪い例を紹介したりするなどして学生の理解を促した。

2) 自己点検・評価

講義内で紹介するスキル等はそれほど難しくないので、学生のモチベーションに差が見られた。しかしいざやってみようとするとうまく言葉にできない学生が散見された。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

ロールプレイやグループワーク、練習問題などを充実させアウトプットの機会を増やす。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験80%、講義内の小レポート20%とした。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率から見て大きな問題はないと思われるが、レポートの質は学生によってばらつきが見られた。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

薬学とコミュニケーションのつながりが学生により伝わるよう講義内容を充実させていきたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生化学Ⅱ	第2学年
科目責任者(記載者)	古泉 博之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生命活動を支える、食物成分からのエネルギー産生、貯蔵のしくみと、得られたエネルギーを利用して生体構成成分を合成する仕組みを学ぶことにより、医療従事者として、患者の状態や病態を理解するために必要な知識を習得する。この目標に沿って授業を行っている。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

本年は約6割の生徒が定期試験において70点以上であり、例年の7割と比較してできが悪く、目標も到達できなかったと言えない。学生の興味、関心が引き出せておらず、教科書を読まず、試験での成績も非常に良くない学生が3割程度おり、こちらも例年に比べ非常に多く、そのような学生にもさらに要点がわかり易く、興味を持つような教育も必要である。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

例年に比べ理解しづらい、大切どころがわかりにくいという評価が多かった。より要点がわかり易いレジメ、スライドによる図の説明の改善が必要であると感じた。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義100%で行う。資料は教科書の内容に、補足が必要なもののみ準備した。復習をしやすいように授業のポイントをまとめたレジメも配布した。また授業終了後の質問、教員室への質問に来た学生には丁寧に対応した。

2) 自己点検・評価

質問に来るような学生は、授業の復習の際、教科書を読んでおり、よく理解もしているようで、一定の教育はできていると思う。ただし、一部の学生の興味、関心が引き出せておらず、教科書を読まず、試験での成績も非常に良くない学生が多いので、そのような学生にもさらに要点がわかり易く、興味を持つような教育も必要である。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

引き続き、ポイントをまとめたレジメを配布することにより、理解を少しでも深められたらと思う。レジメに沿った授業とし、スライドによる図の説明を模索する。ただしこの方法だと教科書を最後まで全く読まない学生がいると思われるので、それに対し、教科書の文章を読んでいれば解るような確認テストなどができればとも思う(現状、時間が無いので厳しいが)。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験の成績(100%)で評価している。現状、小テストなどのような形成的評価を行っていない。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

成績評価については、特に問題ないと考えている。選択問題だけでなく、記述問題も出すことにより、本当に理解しているかどうかを確かめることもできている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

現状、内容の複雑、難しさとともに、膨大な量を学ばないといけず、実際には小テストなどの形成的評価もあったほうが良いと思われるが現状は時間的に難しい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	機能形態学I	第1学年
科目責任者(記載者)	高野 真澄	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

ヒトの体の成り立ちを個体、器官、細胞レベルで理解するために、その構造と機能に関する基本的な知識を修得することが一般目標である。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

最終的な不合格者は1名のみであり、合格率が高く学生の理解度・習熟度は高かったと考えられる。以上より、目標が達成できたと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、学修の到達度は高く、目標は達成できていると考えられるため、特に改善点はないと考えられるが、引き続き興味を引くような講義を行うよう、努めていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書として「機能形態学改訂第4版」を用い、教員が作成したパワーポイントを配付資料とした。視覚的に理解を深め、興味を持たせるため、動画も交えながらわかりやすく講義を行った。重要事項や理解が難しいと考えられる事項については、理解度を確認しつつ、授業を進めた。また、科目のまとめとして、項目ごとの振り返りによる重要ポイントの再確認を行った。

2) 自己点検・評価

学生が興味を持って学べるように、臨時的な事項と関連付けながら授業を行っており、学生の修学意識を高められる工夫をしている。また、項目ごとの振り返りは学生の知識の整理・理解に役立ったと考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、高評価であった。わかりやすく、振り返りが有用であったとの意見があった。また、特に改善点を指摘した意見もなかった。したがって、現在の授業形式を継続し、必要に応じてアップデートしていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価として、授業毎の小テストにより学習度のチェックを行った。また、総合的評価は、定期試験100%により行った。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

授業で示した重要ポイントを試験問題として出すことにより、復習がきちんとなされ、理解度を確認することができていると考える。最終的に定期試験受験資格があるもののうち不合格者は1名のみであり、問題点はないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

成績評価に関して、特に改善点を指摘した意見もなく、現行で問題ないとする。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	解剖学	第2学年
科目責任者(記載者)	高野 真澄	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

人体の成り立ちを個体、器官、細胞の各レベルで理解できるように、人体の構造、機能、調節に関する基本的事項を習得することを目標とする。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

最終的に全員が合格しており、学生の理解度・習熟度は高かったと考えられる。以上より、目標が達成できたと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、学修の到達度は高く、目標は達成できていると考えられるため、特に改善点はないと考えられる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書として「イラストで学ぶ解剖学」を用い、教員が作成したパワーポイントを配付資料とした。視覚的に理解を深め、興味を持たせるため、動画も交えながらわかりやすく講義を行った。重要事項や理解が難しいと考えられる事項については、理解度を確認しつつ、授業を進めた。また、科目のまとめとして、項目ごとの振り返りによる重要ポイントの再確認を行った。

2) 自己点検・評価

学生が興味を持って学べるように、臨床的な事項と関連付けながら授業を行っており、学生の修学意識を高められる工夫をしている。また、項目ごとの振り返りは学生の知識の整理・理解に役立ったと考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、高評価であった。丁寧で聞きやすく、理解しやすい授業であったという意見がある一方、アウトプットするための問題などがほしいという意見があった。したがって、現在の授業形式を継続しつつ、演習問題に取り組むなどの時間も設定したいと考える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価として、授業毎の小テストにより学習度のチェックを行った。また、総合的評価は、定期試験100%により行った。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

授業で示した重要ポイントを試験問題として出すことにより、復習がきちんとなされ、理解度を確認することができていると考える。最終的に受験資格のあるもの全員が合格しており、問題はないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

成績評価に関して、特に改善点を指摘した意見もなく、現行で問題ないと考えられる。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	微生物学	第2学年
科目責任者(記載者)	三宅 正紀	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

微生物の分類や基本構造を学び、細菌、真菌、原虫、ウイルスの違いや基本的性状、さらには感染症の原因微生物の病原因子・病原性発現機構や感染症の病態について理解することを一般目標として、10項目の到達目標を設定している。全12回の講義において、特に国家試験での出題頻度が高い部分には時間を割いて丁寧な説明を施し、全ての到達目標の内容をカバーしている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験の結果から、およそ達成していると考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

達成されていない到達目標はなく、授業評価の結果からも、特に改善する必要はないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義100%で行った。指定の教科書に沿って毎回の講義範囲を要約したオリジナルのパワーポイントを用いて講義を行った。このパワーポイントは微生物や感染症の病態の貴重な画像を多く用いることにより、視覚的なインパクトからも、学生の本科目への興味を促すよう工夫した。また、本パワーポイントのプリントアウトを講義資料として毎回配布することで、板書の書き写しの負担を減らし、学生の講義の傾聴への集中を促した。

2) 自己点検・評価

これまでの講義方法で特に問題はない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

本来、双方向性の講義が理想と考えているが、これまで設定されている講義時間では困難であったが、新カリキュラムへの変更で時間的に余裕ができる場合は、少しずつ導入したい。講義内容に関連した問題を取り扱ってほしいとの要望については、実質、別科目である薬学演習で実施する問題解説講義で対応しているが、今後本科目内においても小テストあるいは課題を課し、小時間枠で解説講義を実施することを検討している。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的な評価は行っていないが、毎回講義の冒頭に前回講義の内容を要約した。総括的評価は、定期試験（100%）に行なった。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

63名が受講し、定期試験本試験において40名が単位取得基準に到達した。残る23名のうち、13名が再試験により、5名が再々試験により単位を取得した。不合格者となった5名中、2名が再試験にて、2名が再々試験において、無断での試験の不受験によるものであった。その上での上記合格率であり、評価に特に問題はなかったと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

次年度も今年度と同様な方法で評価する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	細胞生物学	第3学年
科目責任者(記載者)	古泉 博之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

細胞を生命の最小単位として捉え、その正常な構造と機能を分子レベルで解明し、その成果をもとに生物（単細胞生物や多細胞生物）の生命現象を理解することにより、医療従事者として、新しい医療につながる科学と技術の進歩に対し適応していくために必要な知識を習得する。この目標に沿って授業を行っている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験は6割程の学生が良い成績で合格していたので、概ね到達目標を到達できたと考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

一方で一部の学生の興味、関心を引き出せていないように感じるので、本科目が薬の作用機序を考える上で、どのように関係してくるのかをうまく話し、学生の興味、関心を引き出したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義100%で行う。資料は教科書の内容に、補足が必要なもののみ準備した。また授業終了後の質問、教員室への質問に来た学生には丁寧に対応した。

2) 自己点検・評価

比較的理解しやすい教科書をベースに授業を行っており、質問に来るような学生は、授業の復習の際、教科書を読んでおり、よく理解もしているため、一定の教育はできていると思う。ただし、一部の学生の興味、関心が引き出せておらず、教科書を読まず、試験での成績も非常に良くない学生が2割程いるので、そのような学生も興味を持つような教育も必要である。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

分子生物学でみられたように授業が理解しづらい、重要な箇所がわかりにくい、関心を持てなかったという評価が10%ほどあったので、スライドによる教科書の図などの説明、授業のレジメにより授業の復習、試験勉強がしやすいようにするといった改善をさらに行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験の成績（100%）で評価している。現状、小テストなどのような形成的評価を行っていない。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

成績評価については、特に問題ないと考えている。選択問題だけでなく、記述問題を出すことにより、理解しているかどうかを確かめることもできている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

どのくらいの学生が教科書を読んでいないのかというのを把握するためにも、教科書の図を用いたような問題を今後も出し続けることが必要である。授業中にも、この図を用いた問題を出しますなどと言うことにより、より教科書に取り組む学生が増えるのではと思っている。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	分子生物学	第3学年
科目責任者(記載者)	古泉 博之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生物が遺伝情報に従って生命維持に必要な遺伝子産物(タンパク質)を産生する仕組みと、それぞれの遺伝子産物が協調的に働くことによって生命維持が行われる仕組みを理解することにより、医療従事者として、新しい医療につながる科学と技術の進歩に適応していくために必要な知識を習得する。この目標に沿って授業を行っている。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

定期試験は半数以上の学生が良い成績で合格していたので、概ね到達目標を到達できたと考えられる。一方で合格点すれすれの学生も25%もいたので、その点はもう少し授業をわかりやすくするべきであったと思う。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

一部の学生の興味、関心を引き出せていないように感じるので、本科目がバイオ医薬品や医療に関わるものにとってどのように関係してくるのかをうまく話し、学生の興味、関心を引き出したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義100%で行う。資料は教科書の内容に、補足が必要なもののみ準備した。また授業終了後の質問、教員室への質問に来た学生には丁寧に対応した。

2) 自己点検・評価

比較的理解しやすい教科書をベースに授業を行っており、質問に来るような学生は、授業の復習の際、教科書を読んでおり、よく理解もしているので、一定の教育はできていると思う。ただし、一部の学生の興味、関心が引き出せておらず、教科書を読まず、試験での成績も非常に良くない学生がいるので、そのような学生も興味を持つような教育も必要である。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

教科書の図などから何を読み取るか教えていて良かったという意見もある一方で、授業が理解しづらい、重要な箇所がわかりにくい、関心を持てなかったという評価が10%ほどあったので、スライドによる教科書の図などの説明、授業のレジメにより授業の復習、試験勉強がしやすいようにするといった改善をさらに行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験の成績(100%)で評価している。現状、小テストなどのような形成的評価を行っていない。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

成績評価については、特に問題ないと考えている。選択問題だけでなく、記述問題を出すことにより、理解しているかどうかを確かめることもできている。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

どのくらいの学生が教科書を読んでいないのかというのを把握するためにも、教科書の図を用いたような問題を今後も出し続けることが必要である。授業中にも、この図を用いた問題を出しますなどと言うことにより、より教科書に取り組む学生が増えるのではと思っている。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有機化学 I	第 1 学年
科目責任者(記載者)	西村 良夫	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標に対して十分に網羅しつつ、講義時間内に消化することができた。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

履修者のうち、出席不足や追再試験の欠席が数名いたが、最終的に 54/57 名が本科目に合格することができたため、到達目標を概ね達成できたものと考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

アンケートの結果からは否定的な意見はなく、特筆すべき問題点はないと思われる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義が 80% 程度で、毎回演習問題を解く時間を設け、解説する時間を含めて 20% 程度割り当てた。「ソロモンの新有機化学 I (第 11 版)」(廣川書店)を使い、内容をまとめた資料を配布して進めた。質問について、居室やメールでいつでも受け付けるように伝え、学生が質問しやすい雰囲気づくりを心掛けた。

2) 自己点検・評価

全体として特筆すべき問題はないが、アンケート中の「教員は学生に授業に対する参加を促した。」のところはやや低かった (4.15 点) ので、改善を要すると考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生が主体的に授業に参加するため、時間があれば問題演習をグループで行ったり、発表する場面を作りたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

毎回演習問題を解く時間を設け、また解答・解説を書き込んだ資料を作成して配布することで、形成的評価として学生が自身の理解度を確認できるようにした。総括的評価として、定期試験 100% で評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率から見て、特筆すべき問題点はないものと思われる。昨年度 (2022年度) の定期試験の平均点が 73点 であり、本年度は 68 点であった。高得点者 (90 点以上) が 20% 程度、再試験対象者が 40% 程度なのでやや難易度が高かった。昨年は再試験対象者が 20% だったので、再試験対象者の増加が平均点の低下につながったようである。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

アンケートの結果から、特筆すべき問題点はない。改善策としては、十分な勉強時間を確保したり、質問するなどより能動的に学習することを促したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有機化学Ⅱ	第2学年
科目責任者(記載者)	金原 淳	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品類の化学的性質を理解する基礎を養うために、有機ハロゲン化合物、アルケン、アルキン、芳香族化合物の物性および反応性（脱離反応、付加反応、芳香族求電子置換反応）を理解することを目的としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験では、多くの受講者は試験に合格しており、その答案の内容から概ね目標は達成できたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生の合格率やアンケートの結果から、教育達成目標についての問題点は無いと判断し、2022年度は2021年度と同様の目標を設定する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業内容は授業が85%、演習が15%程度であった。教科書は「ソロモンの新有機化学Ⅰ」を使い、授業では本書に沿った内容をプロジェクターで映写し説明する形式で行った。映写した内容をc-learning上に.pptx及び.pdf形式のファイルで公開した。2分間に一回程度の割合で、補足内容を視写させた。配布資料には演習問題と解答を付け加えた。到達目標や重要項目を明確にした資料の作成を心掛けた。

2) 自己点検・評価

アンケートの結果から、方法に大きな問題はないと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

2022年度では、授業の終盤で、配布したプリントの演習問題の解答を任意の学生に答えてもらう機会を設けることが殆どできなかった。主な原因はコロナ禍の影響による授業時間の短縮が考えられる。2023年度は、授業終盤に演習の時間を設けて受講者の理解向上を図る。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

詳細な形式的評価は行わなかったが、配布したプリントの演習問題を用いて学生の理解度を確認した。全体的な理解度が低いと判断した時には、次回の授業の序盤で前回の内容を要約して再度説明を加えた。総括的評価は定期試験および出席数により評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

合格率および試験の解答内容を鑑み、評価方法に大きな問題はないと思われる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

2022年度は、授業内容の量と授業時間の兼ね合いから、形式的評価を行えなかった。2023年度は授業終盤に小テストを行い、形式的評価を行う。総括的評価を行う際に、形式的評価から努力度評価を行い、その結果を加味する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有機化学Ⅲ	第 2 学年
科目責任者(記載者)	西村 良夫	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標に対して十分に網羅しつつ、講義時間内に消化することができた。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

履修者のうち、退学者や休学中の学生を除いた、試験を受けた学生については最終的に全員が本科目に合格することができたため、到達目標を概ね達成できたものと考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

アンケートの結果からは否定的な意見はなく、特筆すべき問題点はないと思われる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義が 80% 程度で、毎回演習問題を解く時間を設け、解説する時間を含めて 20% 程度割り当てた。「ソロモンの新有機化学 I・II (第 11 版)」(廣川書店)を使い、内容をまとめた資料を配布して進めた。質問について、居室やメールでいつでも受け付けるように伝え、学生が質問しやすい雰囲気づくりを心掛けた。

2) 自己点検・評価

全体として特筆すべき問題はないが、アンケート中の「教員は学生に授業に対する参加を促した。」のところはやや低かった (4.22 点) ので、改善を要すると考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生が主体的に授業に参加するため、時間があれば問題演習をグループで行ったり、発表する場面を作りたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

毎回演習問題を解く時間を設け、また解答・解説を書き込んだ資料を作成して配布することで、形成的評価として学生が自身の理解度を確認できるようにした。総括的評価として、定期試験 100% で評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率から見て、特筆すべき問題点はないものと思われる。定期試験の平均点が 50点程度 であり、合格者は 3 割程度と低かった。再試験では改善が見られたので、最終的には全員が合格した。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

アンケートの結果から、特筆すべき問題点はない。再試験では改善が見られたので、定期試験の平均点が低いことや再試験対象者が多いことへの改善策としては、十分な勉強時間を確保したり、質問するなどより能動的に学習することを促したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有機化学IV	第3学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

これまで学習してきた有機化学の知識に加え、複数の官能基をもつ有機化合物の命名法、基本的な有機反応、官能基の性質や反応性についても修得する。また、生薬・天然物化学での生合成に関わる反応。さらに、医薬品の定性分析や薬物代謝反応を有機化学的視点から捉えることを目的とする。これらの有機化学的な見方は、医薬品分析の理解に留まらず、薬物の生体内反応の理解に深く関わる。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

定期試験の平均得点率は75%以上であったことから、上記目標を概ね目標は達成できたと考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

2名の教員での授業であったが、『授業はシラバスにそって、系統だっで行われた。』という項目に約8割の学生がそう思うと回答し、『知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた』という項目では8割以上の学生がそう思うあるいはどちらかと言えばそう思うと回答したことから、有機化学的な見方は概ね伝えられたと思う。次年度以降も分担して、有機化学反応について丁寧に説明していきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書「ソロモンの新有機化学 I (第11版)」の他に、教科書のページを記載した補助プリントを作成し、大事な反応は反応機構を板書して説明した。授業の最後の10分は確認課題を解く時間とした。また、全12回のうち6回目の授業では演習を実施し、授業時間に正解できなかった問題をレポートにまとめ、提出されたレポートは添削して返却し、試験前の学習の一助としている。

2) 自己点検・評価

有機化学IVでは、単に反応機構を説明するだけでなく、医薬品合成の基礎や定性分析を有機化学的視点からの解説もしている。『授業は理解しやすいように工夫されていた。』および『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』という項目に7割以上の学生がそう思うと回答しており、概ね理解できていると判断している。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

『知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた。』および『この授業の関連分野に関心を持つことができた。』という項目にそう思うと答えた学生は5割を超えた程度であった。有機反応の分かりやすい説明に留まらず、関連分野についてもさらに説明を加え興味を高められるように、特に医薬品との関連を強調していこうと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

毎回の授業での演習課題への取り組みおよび中間演習レポート(20%)と定期試験(80%)を総合的に判断して評価した。授業での演習課題は毎回添削して返却して解説し、中間演習のレポートについては添削して最後の授業までに返却しており、各自が理解度を把握できるようにしている。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

有機化学IVは、有機化学I~III まで積み重ねた知識の上に、新たな項目が加わるため決して易しい内容の科目ではない。『教員は質問に対して的確に分かりやすく答えてくれた。』の項目では約3分の2の学生がそう思うと回答している。7名の再試験対象者の内、不合格となった学生は半数以下であった。もしかすると、質問をしやすい環境づくりも必要なのかと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

2名の教員で授業回数に応じた得点の割合で出題しているが、問題はないと思われるので次年度も同様に実施したい。再試験対象者とは面談し、難しいと感じている部分を明確にして、個人学習の指針について共に考えたこともあったか、不合格となった学生は少数であった。これらの取り組みは次年度以降も継続したいと考えている。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有機化学演習	第2学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

化学 I, II、有機化学 I, II, III で学習した有機反応について、カーブした矢印での反応機構の表記、有機化合物の基本骨格となる脂肪族および芳香族化合物の基本的な反応性、さらに立体化学を理解するための様々な投影法での有機化合物の表示の修得を目標とする。これらの修得により、医薬品を含む有機化合物の反応性についての基礎を身につけ、有機化学 IV さらに医薬品化学 I, II を理解するための基礎を養う。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

『授業は理解しやすいように工夫されていた。』という項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は7割以上であった。さらに、定期試験において平均得点率が70%以上であり、再試験対象者の約8割が合格したことから、目標は概ね達成できたものと考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

多くの有機化学の反応は電子の動きで説明できることから、反応機構の理解が深まると医薬品分子内の反応しやすい部分、つまり代謝を受けやすい官能基などを見極められるようになると期待される。『この授業の関連分野に関心を持つことができた。』という項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は7割以上であったので、さらに興味関心を高める説明を心がけたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書は「有機化学『ワークブック』」を指定し、教科書のページを記載した補助プリントを作成し、反応機構を板書しながら説明した。補助プリントには練習問題と正解および解説もつけて、各自が復習できるように工夫した。また、授業の最後の10分間で確認問題に取組ませ、翌回の授業で添削したものを返却し、正答率が低かった問題については詳しく解説した。

2) 自己点検・評価

本演習では、これまで学習した有機の反応について、カーブした矢印で電子を動かす反応機構が描けるようになることを主眼としており、演習問題を解きつつ授業を進めた。『教員の授業に対する熱意を感じた。』という項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は8割以上であったので、反応機構の考え方の重要性は伝わったと判断している。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

演習授業であるため、毎回確認問題を解く時間を確保すること、反応機構を板書して解説する方法は継続したい。また、有機化学I~IIIの授業では、毎回少しずつ反応をインプットして行くが、演習授業ではまとめて説明する機会が多いので、類似した反応との違いを明確にした説明を意識して授業を進めたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

毎回の授業中の演習問題(20%)と定期試験(80%)を総合的に判断して評価した。演習課題については、次回の授業で添削したものを返却した上で解説し、各自が毎回の授業の理解度をチェックできるようにしている。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

定期試験において平均得点率が70%以上であり、75%以上の得点率の学生は全体の約4割であった。再試験の前に、再試験対象者と面談し、定期試験での学習を振り返り、再試験に向けての学習方法を一緒に考えた。その甲斐あってか、再試験対象者の約8割が合格したので、面談は継続したいと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

2名の教員で授業回数に応じて試験問題を作成し得点を分配している。特に問題はないと思われるので次年度以降も同様の得点分配を考えている。一方、『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』という項目では、どちらかというともう思わないと回答した学生が約3%いたことから、特に複雑で難しい内容の時には、学生の反応も見ながら説明することを意識したいと考えている。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	機器分析学	第2学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

動植物が産生する生理活性物質や医薬品の多くは有機化合物であり、その分子構造は、作用や性状を理解する上で重要な要素の一つである。本科目では、IR, NMR, MS の測定原理・測定方法についての理解を深め、これらの分析法で得られるスペクトルデータを活用し、簡単な有機化合物の構造解析ができるようになることを目標としている。これらの技能は研究室に配属されてからの研究でも役立つものである。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

定期試験の平均点が80点であったこと、さらに9割以上得点できた学生は全体の約40%であり、再試験対象者も最終的には全員合格したことから、目標は達成できたものと考え。IR, NMR, MS スペクトルの解析は研究室に配属されてからも重要であることから、学生の理解度の高い学生が多いことは良い傾向であると考え。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

2名の教員による授業であるが、『授業はシラバスに沿って、系統だっで行われた。』および『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』という項目では、70%以上の学生がそう思うと答えていることから、次年度以降も分担して、IR, MS, NMR のポイントを強調して授業を継続したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

指定の教科書「有機スペクトル解析入門」(裳華房)の他に、授業資料を作成し、基本的な測定原理を丁寧に説明した。また、スペクトルの解析では、実際に問題を解いて理解を深めることが重要であると考え、毎回、確認問題を提出させることで自己学習の一助とした。

2) 自己点検・評価

本科目では、学生が実際に使用したことがない、IR, NMR, MS の測定機器に関する授業であるため、授業資料には写真などを添付したり、測定機器の価格を話すことで理解の一助としている。また、実際にはヒトの目に見えない波長の利用や、天秤では測れない微量サンプルの測定もあるため、例え話を使ってイメージしやすい説明を心がけた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

質問項目の中で『知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた。』の評価が一番が低く、そう思うと回答した学生が64%であった。スペクトルデータの解析は研究でも重要な部分なので、基礎から応用の部分の説明を次年度以降は工夫していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

毎回の授業の最後に確認問題を解いて提出し、添削結果を返却することで形成的評価を実施し、総括的評価については定期試験(100%)で評価した。配付した演習問題(解答付き)については、各自で学習を進め、最終回の授業で重点項目を再度確認することで理解を深めている。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

定期試験の平均点は約80点であり、80点以上得点できた学生が全体の約6割であった。再試験対象者とは再試験前に面談し、学習方法について指導した。その甲斐あってか、再試験を受験した学生も最終的には全員合格した。従って、機器分析学の履修者は、有機化合物の構造解析の基本的な部分は修得できているものと考えられる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

評価方法は定期試験100%ということで、学生が定期試験に向けてしっかり準備してきている印象を受けたので、次年度以降も同様の評価方法を考えている。また、「毎回の確認問題で理解度を把握できるので毎回復習しながら自分で勉強できる点良かった」とのコメントを頂いたので、次年度以降も全員が合格できるように毎回の確認問題についても継続したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬用植物学	第2学年
科目責任者(記載者)	村田 清志	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

初歩的な薬用植物、歴史的に有名な薬用植物、および毒草について、形態、学名、植物名、薬用部位、主成分、効能などを説明できるようになることを目標に学修する。教科書およびレジュメをもとに、これらの学習内容を毎回の授業の最後に記述式の知識確認シートを完成することで確認する。さらに、薬用植物園で実際の薬草を確認し、スケッチすることで薬草の実態を学ぶ。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

予定した薬用植物について紹介できた。知識確認シートによるまとめ作業を行った。授業ごとに教科書から選んだ薬用植物の画像問題を作成し、形態、学名、植物名、薬用部位、主成分、効能を選択形式で記載した小テストを回収した。薬草園での薬用植物の観察とスケッチを実施できた。コラムを中心に薬用植物情報について紹介できた。薬用植物が使われている生薬見本を回覧し、実際の素材を確認できた。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

生薬の見本を回覧し、選択形式の画像問題を作成し、小テストとして実施して回収した。小テストと引き換えに、解答を配布するようにしたが、小テスト中に化学構造式を転記・記載しきれていない場合もあり、繰り返しの説明の機会を得るようにしたいと思う。実際に、実物を見て、触って、味わう機会をもうけたい。実際の使用例についても紹介していきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

初歩的な薬用植物、歴史的な薬用植物、および毒草についての講義を行う(80%)。これら植物から調製される生薬(画像問題などを利用)を紹介する。コラムを中心に薬用植物情報(蒸留、染色、ハーブ、毒草と類似した植物、薬用作物産地確立支援事業、薬用植物をめぐる情勢)を幅広く接する機会を得て、薬用植物に興味をもつ機会をつくる(10%)。薬用植物園にて薬草を観察しスケッチする(10%)。

2) 自己点検・評価

予定した薬用植物すべてを解説できた。本年度は生薬見本を回覧し、且つ、選択した画像問題による小テストを実施した。生薬学・漢方医学につながる主要成分について紹介することができた。薬草園での薬草観察と薬草スケッチを実施して、スケッチ対象として選択した薬用植物の説明を行うことができた。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

薬用植物に興味のない学生もおり、教科書レベルでの授業だけではなく、薬用植物情報(蒸留、染色、ハーブ、毒草と類似した植物、薬用作物産地確立支援事業、薬用植物をめぐる情勢)を幅広く接する機会を持ちたいと考える。薬学部の専門教育授業として薬用植物学は、生薬学、漢方医学につながる大変重要な授業であるため、歴史的側面の解説・実際の利用方法、身近な利用方法の解説を増やすなど実践の場を組み立てていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

毎回実施する記述式知識確認シート(小テスト)による、薬用植物の画像問題、植物名、有効成分名、それらの化学構造式を紙に書いて覚える作業(7回)、植物園で描く薬用植物の写生(1回)により評価を行い、授業態度や意欲などを含めて総括的評価を行った。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

薬用植物学では、薬草の形態、ラテン名の書き方、和名・生薬名、効能、成分、その分布など幅広い知識が必要であることを学んでもらうことが大切であり、周辺情報も併せて、実際の薬草の使われ方を把握してもらいたいと考えている。薬用植物の数はたいへん多く、試験前には選択した画像問題の復習を行い、対象を絞って勉強するように指導している。したがって、学生は十分に勉強でき知識を習得できていると思われる。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

実際の植物に触れたとき、生薬見本の回覧をしたとき、薬草の使われ方の情報・書籍を紹介した時が興味をもつ機会となるため、植物と触れる機会を増やしていきたいと考えている。薬用植物学、生薬学、健康食品学、漢方医学、セルフメディケーション、天然物化学はすべて連続した内容であり、関連付けていくための方策と種になることを提供したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生薬学	第2学年
科目責任者(記載者)	村田 清志	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬用植物、漢方薬に配合される生薬について、その基原、性状、薬用部位、有効成分、生合成経路、副作用、薬理効果、用途、生薬の同定と品質評価法の基本的知識を学修する。基原植物の植物学的特性・生薬中の主要成分の物理化学的特性・生薬の品質保証・効能・副作用を学習することで、これら情報を評価および発信できる能力を身に付けることを目標としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

生薬を生合成経路による分類、化合物による分類、効能効果による分類をし、生薬の副作用、呈色反応を含めた品質評価を自ら発信できるようにする授業が出来た。小テスト（知識確認シート）により知識のとりまとめを行うとともに、生薬の画像と各種特性の知識が結びつくように学習した。授業では生薬見本を回覧し、各種生薬をめぐる情勢などの資料の紹介ができた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

生薬の見本を回覧し、選択形式の画像問題を含む小テスト（知識確認シート）を実施して回収した。小テストでは、生薬情報を自ら紙面に記載することで知識を整理し、各情報の結びつきを重視したが、学生により到達度にばらつきがあった。生薬の実物を見て、触って、味わって、資料などの知識がイメージとして結びつくように、種々の角度からの繰り返しの説明の機会を得たい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

生薬の基原、性状、薬用部位、有効成分、生合成経路、副作用、薬理効果、用途、生薬の同定と品質評価法の基本的知識、その歴史、経緯についての講義を行う（80%）。生薬の回覧を行い、薬用植物、漢方薬との結びつき、それらの実際の使用例について、薬用植物による分類、効能効果による分類、漢方薬による分類などの資料を活用して生薬に興味を持つ機会を作る（20%）。

2) 自己点検・評価

予定した生薬すべておよび周辺情報について説明ができた。生薬見本、生薬参考書、古典、漢方薬の添付文書を有効活用できた。種々の角度からの問題、選択した画像問題による小テスト（知識確認シート）を活用して、解答例を紹介しながら、学生自ら化学構造式を転記・記載する授業が出来た。回収した知識確認シートには疑問点、感じた点を記入して次回講義で回答するなど、学生個々の意見についても回答することができた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

最初から生薬が苦手と感じる学生がいるが、生薬の見本を回覧し、自ら生薬情報を知識確認シートに書き込み、化学構造式についても何度も繰り返し記入する機会を持ちたいと考える。生薬はその素材は薬用植物、漢方薬、健康食品につながるものなので、実際の使用例や歴史・経緯についても紹介して興味をもってもらおうように工夫をしたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

毎回実施する生薬に関する小テスト（知識確認シート）の問題を解き、自ら生薬情報を記載する作業（全12回）、生薬の回覧、資料の閲覧、学生からのコメントなどにより評価を行い、授業態度や意欲などを含めて総括的評価を行った。これらを中心として最終試験を実施した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

生薬学では、生薬の基原、性状、薬用部位、有効成分、生合成経路、副作用、薬理効果、用途、生薬の同定と品質評価法の基本的知識など幅広く覚えることが必要なため、生薬の見本と各情報が結びつくように工夫できたと考える。各授業、試験前には復習の時間を確保し、対象を絞って学習するように指導している。したがって、学生は十分に勉強でき知識を習得できていると思われる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

実際の生薬見本に触れ、その起源植物に触れ、生薬に関する各種資料など、より具体的な授業をしたときに、学生は興味を持つように感じるため、生薬とその使われ方について、より具体的に紹介する機会を持ちたい。薬用植物学、生薬学、健康食品学、漢方医学、セルフメディケーション、天然物化学はすべて連続した内容であり、関連付けていくための方策と種になることを提供したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医薬品化学I	第3学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品の多くは合成小分子であり、作用を発現するには生体内の高分子との相互作用が必須である。そこで、医薬品の生体内での作用について化学的に捉えるために、標的となる生体高分子と医薬品の構造と性質、さらに、生体内での医薬品の反応に関する基本事項を修得する。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』という項目に約8割の学生がそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答しており、さらに定期試験の平均正答率が9割以上であったことから、大部分の学生が代表的な医薬品と生体分子の相互作用についても理解したと考えられる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

医薬品化学は薬理学など他教科と重複する部分もある科目であるが、これまでと異なる順番で主に化学構造の分類による授業となっている。『授業はシラバスにそって、系統だっで行われた。』という項目に約8割の学生がそう思うと回答したことから、次年度以降も同様に授業を進行したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書「化学系薬学II(生体分子・医薬品の化学による理解)」の他、教科書のページを記載した補助プリントを作成し、重要な医薬品の構造を板書して説明し、授業の最後の10分は確認課題を解く時間とした。確認問題は添削して次回の授業で返却し、特に正答率の低かった問題は再度説明した。

2) 自己点検・評価

医薬品化学Iでは、薬物代謝について代謝に関わる生体高分子と医薬品が具体的にどのように反応するかについても解説している。『この関連分野に関心を持つことができた。』という項目では約1割の学生がどちらかといえばそう思わないと回答していることから、構造と作用の関係について、他の科目と関連づけて分かりやすく説明する必要があると感じている。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業資料はPDFファイルとしてアップロードしているが、印刷すると不鮮明な部分があったというコメントを頂いたので、次年度以降は一度印刷して確かめたものをアップロードしたい。また、『教員の授業に対する熱意を感じた。』という項目では7割以上の学生がそう思うと回答してくれたので、次年度以降も代表的な医薬品を板書して作用機序を説明していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価としては、確認問題を毎回添削して返却し、各自が理解度を把握できるようにしている。総括的評価については、定期試験(100%)で判断した。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

医薬品化学Iは有機化学I～IVまで積み重ねた知識の上に、生体内高分子との相互作用する内容を含む総合的な知識が必要な科目である。定期試験の平均点が9割を超えており、再試験対象者も少なく最終的には全員合格した。応用問題を2割程度出題しているが、次年度以降も応用問題は出題したいと考えている。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

評価方法については定期試験が100%としており、学生が定期試験に向けて全力で準備しているようなので、変更する予定はない。学生からは「国試や試験に向けて重要である内容を教科書やコアカリをまとめたプリントを配布して下さるので、理解がしやすかったです。」というコメントを頂いたので、次年度以降もしっかりと授業資料を作成していきたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医薬品化学Ⅱ	第4学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品の多くは合成小分子であり、作用を発現するには生体内の高分子との相互作用が必須である。医薬品化学Ⅱでは、主に、酵素、受容体、DNA、イオンチャネルに作用する医薬品の構造と性質について修得する。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

『授業は理解しやすいように工夫されていた。』という項目に約8割の学生がそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答しており、さらに定期試験の平均正答率が9割以上であったことから、多くの学生が酵素や受容体に作用する医薬品の構造と性質について理解できたと考えている。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

医薬品化学は薬理学など他教科と重複する部分もある科目であるが、これまでとは異なり化学構造の分類による授業となっている。『授業はよく準備がなされていた。』と『授業はシラバスにそって、系統だっで行われた。』という項目に約7割の学生がそう思うと回答していることから、次年度以降も同様に授業を進行したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書「化学系薬学Ⅱ(生体分子・医薬品の化学による理解)」の他、教科書のページを記載した補助プリントを作成し、重要な医薬品の構造を板書して説明し、授業の最後の10分は確認課題を解く時間とした。確認問題は添削して次回の授業で返却し、特に正答率の低かった問題は再度説明した。

2) 自己点検・評価

医薬品化学Ⅱでは、医薬品の化学構造の骨格の違いと作用についても解説しているが、『知的好奇心が刺激され、興味を高めてくれた。』という項目では約4%の学生がどちらかといえばそう思わないと回答している。医薬品の化学構造と作用の関係をもっと分かりやすく伝える必要があると感じている。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

『この授業の関連分野に関心を持つことができた。』という項目では約4%の学生がどちらかといえばそう思わないと回答している。医療従事者の中で、医薬品の構造から性質や作用を理解できるのは薬剤師だけと言って良いので、次年度以降は、薬理作用との関係などについて、より具体的な説明を加えることを考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価としては、確認問題を毎回添削して返却し、各自が理解度を把握できるようにしている。総括的評価については、定期試験(100%)で判断した。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

医薬品化学Ⅱは有機化学Ⅰ～Ⅳまで積み重ねた知識の上に、医薬品と生体内高分子との反応や相互作用に関する総合的な知識が必要な科目である。定期試験で満点の学生が約4割であり、再試験対象者も少なく最終的には全員合格した。また、授業資料には応用問題も記載しているが、各自が取り組んだことで高成績であったと考えられる。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

評価方法については定期試験が100%としており、学生が定期試験に向けてしっかり準備してきているので、変更する予定はない。学生から「資料を配付して下さるので、分かりやすかったです。」というコメントも頂いたので、次年度以降も授業資料をしっかり準備して、学生が理解しやすく、そして自己学習しやすい毎回資料を作成して授業を進めて行きたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	化学系実習	第2学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

問題解決能力の醸成を狙いとし、有機化学で学んだ知識を基に、化学物質の安全な取り扱い操作、生薬の鑑別及び評価試験法、代表的医薬品の配座解析、有機化合物の物性、反応性、代表的医薬品合成について、実験を通して理解を深める。これらは研究室に配属後の特別実習でも必要な知識と技術でもある。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

多岐にわたる実習であるが、『授業はシラバスに沿って、系統だてて行われた。』という項目でそう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生の割合が8割以上であり、レポートの評価については、得点率が80%以上であった学生は全体の85%以上であったことから、実習を通して多くの学生が理解を深めたと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

予め実習書を配付し、実習前に要点を説明して実習を進めたこともあり、『授業はよく準備がなされていた。』という項目で、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生が95%以上であった。教員は分担してそれぞれの実習を担当したが、特に問題はなかったようなので、次年度以降も同様に実施したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

化学物質の安全な取り扱い操作、生薬の鑑別及び評価試験法、有機化合物の物性、反応性、代表的医薬品合成については実習がメインで、代表的医薬品の配座解析では分子模型を使つての演習も実施した。

2) 自己点検・評価

実習書は予め配付し予習を促し、最初にその日の実験の要点を説明してから実習を開始した。『授業は理解しやすいように工夫されていた。』という項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は85%以上であったことから、次年度以降も同様に実習を進めたいと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

多岐にわたる実習は教員がそれぞれ分担して担当したが、問題はなかったようなので継続する予定である。一方、『教員の話し方は聞き取りやすかった。』の項目では約6%の学生がどちらかといえばそう思わないと回答したことから、実習室で説明するタイミング、また、講義室とは異なる音響設備を使つての話し方に注意したいと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

化学物質の安全な取り扱い操作では実習書の予習が必要であり、代表的医薬品の配座解析では演習も含まれ、それ以外の実習はレポートにまとめる必要がある。代表的医薬品の配座解析では授業時間内に解いた確認問題を添削して、実習試験前に返却している。実習態度（20%）、実習レポート（50%）、実習試験（30%）により評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

総合評価では得点率が90%以上であった学生は全体の40%以上であり、さらに全員が合格していることから、多くの学生が実習を通し理解を深めたと考えている。従って、レポートの書き方についても身についたと考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

レポートの添削はそれぞれの教員が実施しているが、実習書に記載されているレポートの書き方から従っているかを基準としており、得点にも大きな差は見られないので、次年度以降も同様にレポートの評価をしていく予定である。『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』という項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は85%以上であったので、これまで通りの説明を継続したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎分析化学	第1学年
科目責任者(記載者)	鈴木 康裕	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

日本薬局方に定められた各種医薬品を含む化学物質の品質管理における定量法を習得するため、基礎となる各種化学平衡の原理、化学物質の分析に用いる器具の使用法、測定値の取り扱いを学び、国家試験レベルの問題が解答できるようになることを目標とする。多くの学生は、本科目を学ぶ上でこれまで習得した知識が浅い状況にある。特に暗記に頼るのではなく、理解し応用することで知識を深めるように修正する必要がある。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標の達成状況は十分達成された。配付資料により授業のポイントが明確となり理解度が進んでいると考えられた。しかしながら、配付資料以外からの出題、特に教科書や参考書から出題となると正答率が下がり、計算問題を苦手としていることが伺えた。定期試験において、国家試験レベルの問題が解けるようになったため目標は達成されたと考えた。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

高校生で学んだことの理解度の低下が認められる。新コアカリ対応の授業編成が次年度より開始となり、リメディアル授業が行われるので、大学で学ぶ専門知識について講義を進めるペースをゆっくりとし、授業での説明を丁寧に行う。1年次の他の科目の理解度が進んでおらず本科目に対応できていない領域については基礎的な知識の説明を多くしていく。小テストペースで勉強するのではなく、教科書ペースで勉強するように促す。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

科目内における講義は75%を占め、演習の割合は残り25%である。教科書にパートナー分析化学Iを指定した。パートナーは第18改正に準拠している。参考書にはスタンダード薬学シリーズIIを指定した。配布資料は、重要ポイントをまとめたものである。双方向性方策として演習を行い、学生からの質問などを促した。

2) 自己点検・評価

演習にはe-learningを活用した。解答者の結果が集計されるために、多くの誤解答があった箇所について解説・修正を加え、その後に学生の理解度を確認した。しかし、演習中にスマホを使用するため、演習目的以外のスマホ利用も見受けられた。適宜巡回し、目的外使用の防止と解答時間の調節を行った。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

e-learning活用により、予習および授業中での講義ノートあるいは学習ノートがほとんどの学生で作成されていないが、授業評価のコメントから復習に利用されていることは伺える。リアルタイムに理解度が集計されるので、目的外使用に注意して解説などに今後も活かしていく予定である。知的好奇心の評価が低いので、将来、知識をどのような利用していくのか含めて説明していきたいと思う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

成績評価は、定期試験により行った。形成的評価は、授業中に行う演習にて行った。演習は事前に予習的に出題し、講義終了後に解答させた。正答率が低かった問題に関しては、解説を加えた。統括的評価方法は、学期末の定期試験により行った。定期試験は、演習より多く出題し、選択問題、適語選択、適語補充、および記述式問題により行った。定期試験不合格者には、自筆ノート持ち込み可の再試験を行った。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

本試験、再試験未受験者を除けば、合格率は100%であった。形成的評価から統括的評価のつながりに対して相関が認められる。毎回の形成的評価で自己学習(予習、復習)を行わないものは、統括的評価においても成績が低い。したがって、形成的評価の結果は、統括的評価を投影しており機能している。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

形成的評価は、薬剤師国家試験を見据えて1年生では難易な点については、解説を丁寧に行う。統括的評価は、教育達成目標を設定しているが、暗記対応で克服している学生が多い。自己学習の重要性を説明し、より読解力、理解力を深めるような統括的評価に変えていく。特に本科目受講時において高校生理科の授業が重要であることを認識し、薬剤師に必要な知識につながるように促していく。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬品分析化学	第2学年
科目責任者(記載者)	鈴木 康裕	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

日本薬局方に定められた各種医薬品を含む化学物質の品質管理における高度な定性・定量法を習得するため、各種機器を用いた物理科学的分析法の原理、操作法および応用例を学び、国家試験レベルの問題が解答できるようになることを目標とする。多くの学生は、本科目を学ぶ上でこれまで習得した知識が浅い状況にある。特に暗記に頼るのではなく、理解し応用することで知識を深めるように修正する必要がある。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標の達成状況は十分達成された。配付資料により授業のポイントが明確となり理解度が進んでいると考えられた。しかしながら、配付資料以外からの出題、特に教科書から出題となると正答率が下がり、論理的な説明や図や長文からの読解力は低いままと考えられた。定期試験において、国家試験レベルの問題が解けるようになったため目標は達成されたと考えた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

1年生で学んだことでの理解度の低下が認められる。機器そのものの写真などを増やし、講義を進めるペースをゆっくりとし、授業での説明を丁寧に行う。1, 2年次の他の科目の理解度が進んでおらず、本科目に対応できていないと思われるので、基礎的な知識の説明も多くしていく。小テストベースで勉強するのではなく、教科書ベースで勉強するように促す。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

科目内における講義は75%を占め、演習の割合は残り25%である。教科書にパートナー分析化学IIおよびベーシック薬学教科書シリーズ2を指定した。パートナーは第18改正に準拠しており、ほぼ2冊で要点が記載してあるためである。参考書にはスタンダード薬学シリーズIIを指定した。配布資料は、重要ポイントをまとめたものである。双方向性方策として演習を行い、学生からの質問などを促した。

2) 自己点検・評価

演習にはe-learningを活用した。解答者の結果が集計されるために、多くの誤解答があった箇所について解説・修正を加え、その後に学生の理解度を確認した。しかし、演習中にスマホを使用するため、演習目的以外のスマホ利用も見受けられた。適宜巡回し、目的外使用の防止と解答時間の調節を行った。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

資料に記載されていない授業中に話したことや板書したことが学習ノートにほとんどの学生で記載されておらず、復習時に活用できていない。e-learningは、リアルタイムに理解度が集計されるので、目的外使用に注意して解説などに今後も活かしていく予定である。知的好奇心の評価が低いので、将来、知識をどのような利用していくのか含めて説明していきたいと思う。質問しやすいように工夫をしたいと思う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

成績評価は、定期試験により行った。形成的評価は、授業中に行う演習にて行った。演習は事前に予習的に出題し、講義終了後に解答させた。正答率が低かった問題に関しては、解説を加えた。統括的評価方法は、学期末の定期試験により行った。定期試験は、演習より多く出題し、選択問題、適語選択、適語補充、および記述式問題により行った。定期試験不合格者には、自筆ノート持ち込み可の再試験を行った。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%) 97%

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

本試験未受験者を除けば、合格率は100%であった。形成的評価から統括的評価のつながりに対して相関が認められる。毎回の形成的評価で自己学習(予習、復習)を行わないものは、統括的評価においても成績が低い。したがって、形成的評価の結果は、統括的評価を投影しており機能している。一夜漬けの学習が見受けられ基礎学力の低下が進んでいると考えられるので基礎力向上を促す。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

形成的評価に対して解説を丁寧に行う。統括的評価は、教育達成目標を設定しているが、暗記対応で克服している学生が多い。授業中に聞き取ったこと書き写したことをまとめる自己学習の重要性を説明し、より読解力、理解力を深めるような統括的評価に変えていく。特に本科目受講時において学生自身が基礎学力不足であることを認識し、うまくこれまでの学習の復習につながるように促していく。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床分析化学	第2学年
科目責任者(記載者)	鈴木 康裕	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床検体に行う分離分析を含め臨床現場で用いる各種分析技術を修得するため、物理化学的分析法の原理、操作法および応用例を学び、国家試験レベルの問題が解答できるようになることを目標とする。多くの学生は、本科目を学ぶ上でこれまで習得した知識が浅い状況にある。特に暗記に頼るのではなく、理解し応用することで知識を深めるように修正する必要がある。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標の達成状況は十分達成された。予習となる小テストを授業前に提示し、講義終了後に小テストを施行した。その解説を行うことで理解を深められたと考えられた。しかしながら、小テスト以外からの出題、特に過去の国試問題や教科書から出題となると正答率が下がり、論理的な説明力や図・長文からの読解力は低かった。定期試験において、国家試験レベルの問題が解けるようになったため目標は達成されたと考えた。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

小テストは予習として大事な位置づけであるが、学生の二極化が進んでおり、予習の有無で授業での理解力の差が大きくなっていると考えられる。スライドからの書き写しや教科書の線引きなどの作業確認、質問を受け付ける回数を増やし、授業に参加しやすくする。理解しやすいように授業での説明を丁寧に行う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

科目内における講義は75%、演習の割合は25%である。教科書にパートナー分析化学IIを指定した。第18改正に準拠しており、多くの大学で採用されている。参考書にはスタンダード薬学シリーズIIを指定した。視聴覚教材は、毎回スライドを用いて行い、重要スライドの虫食いプリントを作成し配布した。ノートを書かせるために重要な点はさらに板書も行った。双方向性方策として演習を行い、学生からの質問などを促した。

2) 自己点検・評価

スライド説明時に照度を低くなりすぎないように注意した。演習にはc-learningを活用した。小テストのすべての解答が終わった後に、誤解答があった箇所について解説・修正を加え、その後に解答者の理解を確認した。また、内容の区切りのよいところで、生徒に対して質問を促した。適宜巡回し、演習目的以外のスマホ使用の防止と解答時間の調節を行った。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

スライド使用時の室内の照度に注意し学生からのクレームはなくなった。遅刻による授業妨害があるとのことなので、これまで通りc-learningと目視による併用にて出席確認を行う。c-learningによる既読数や解答者の結果集計機能により、リアルタイムに理解度が集計されるので、授業目的外使用に注意して解説などに今後も活かしていく予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

成績評価は、定期試験により行った。小テストにより形成的評価を行い、毎授業で行った。小テストは、予習的に出題し、c-learningにて解答させた。低正答率の問題に対して解説講義を加えた。統括的評価方法は、学期末の定期試験により行った。定期試験は、小テストから3割以上出題し、選択問題、適語選択、適語補充、および記述式問題により行った。定期試験不合格者には、自筆ノート持ち込み可の再試験を行った。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

形成的評価から統括的評価のつながりに対してある程度の相関が認められる。毎回の形成的評価で自己学習を行わない者は、統括的評価においても成績が低い。したがって、形成的評価の結果は、統括的評価を投影しており機能している。学力の二極化が進んでいると考えられ、低成績者への学習ノートの作成を促す。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

形成的評価は、学生からの好意的な意見があり継続していく。統括的評価は、教育達成目標を設定しているが、暗記対応で克服している学生も少なくない。自己学習の重要性を説き、学生自身が考え、教科書などの資料から自分なりのノートを作成させ、より読解力、理解力を深めるような統括的評価に変えていく。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理化学 I	第 1 学年
科目責任者(記載者)	小野 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

物質を構成する原子・分子の構造や分子間相互作用に関する基本的知識を習得することが本科目の到達目標である。この目標を達成するため、それらの分野に関する範囲を中心にした講義を行い、知識が定着するよう適宜演習を取り入れた形式で行った。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

定期試験の受験を放棄した履修者を除くすべての履修者が当該単位を修得しており、到達目標は概ね達成されているといえる。適宜演習を取り入れて繰り返し復習することが知識の定着につながっていると考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

到達目標の設定とそのための授業構成についての意見は特になかったため、現状の講義形式を維持しながら学生の理解をより深めるために現行の形成的評価の機会を増やし、重要事項の繰り返しの説明を時間の許す限り行うようにして、目標の達成度をより高めるよう努める。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義80%、演習20%程度の割合で授業を行った。資料として、教科書の他に演習用の問題やその解答例などの配布資料も利用した。双方向性方策として、授業中に学生に質問を促し直接受け付ける時間をとった。授業内容が理解できているかを適宜学生に問いかけて状況を確認しながら授業を進行した。

2) 自己点検・評価

適度な演習を取り入れたことにより知識の定着がみられ、問題と解答を含めた配布資料により自主学習が円滑に進行しているようであった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業の形態には好意的な意見が多かったため、基本的な授業方法は変更せず、問題演習や小テストを行う機会を更に設けて学生の理解度を適宜確認し、理解度の低い範囲は次回の講義で再確認するなど、学生の知識の定着をさらに高めるよう努める。スライド資料の一部に見にくい色があったとの意見があったので、見やすい色への修正を行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価として、授業の途中で問題演習を適宜行うことで授業内容の理解度を学生自身が確認する機会を設けた (1コマあたり1～2回、1回10分程度)。総括的評価は定期試験により行った。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

形成的評価を適宜取り入れるなどの評価方法は、総括的評価結果からも概ね適切であったと考えている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価は概ね良好であるため、基本的な授業内容や方法については特に変更はしない。その上で、学生の理解がより深まるように、繰り返しの説明や形成的評価の機会をより多く設ける。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理化学Ⅱ	第1学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

物質の状態を理解するために、熱力学に関する基本的知識を習得する。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

物理化学Ⅱでは主に化学熱力学を取り扱い、エネルギーと物質に関する自然現象を理解する上で重要な学問であり、薬学領域で学ぶあらゆる教科の基礎となっているが、理想的思考力を身につけ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことができていない学生が多くみられた。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生の授業評価から物理化学Ⅱの授業に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が授業をまじめに受け知識の向上に繋がるように、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下にならないように、教官側も注意を払うが、学生側も特に復習を心がけるよう徹底したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義80%、演習20%の割合で授業を進めた。教科書として「レファレンス物理化学」を用いながら、補助プリントをさらに分かりやすく板書を行いながら授業を行なった。授業の最後に当日の授業内容に関する演習問題を解きながら知識の定着を図った。授業中に質問を行うことで、教官側の一方的な授業にならないように注意を払った。また、質問に対して回答がない場合には、内容をより分かりやすく理解できるように説明した。

2) 自己点検・評価

化学、物理学および物理化学Ⅰとの講義と連携しながら、物質に関する自然現象を理解させ、薬学領域で学ぶあらゆる教科の基本的事項を修得させる。そのために教官側は分かりやすい授業を進めると共に、学生には予習と復習を徹底させる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、教科書に沿って補助プリントと板書を併用させ授業を進める。当然のことではあるが授業には必ず毎回出席してもらい、その場で大まかに理解し、その日のうちに復習をさせる。また、各単元ごとに身近な話題や薬学との関連性について話し、学生の興味を惹きつけるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

授業の最後に当日の授業内容に関する演習問題を解くことにより評価した。また、演習問題の解答が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正答できるように誘導した。また、正答した場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。定期試験の成績に加え、当日の授業に対する理解度を問う小テストを加味して総合的に評価する。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格者を踏まえて評価する)

単に○×だけの解答ではなく、計算問題、記述問題を多く取り入れて、学生のどの程度理解力しているかを重点にして試験問題を作成した。最終的な合格率が90%であったことから、学生は概ね授業内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

定期試験の成績に加え、当日の授業に対する理解度を問う小テストを加味して総合的に評価する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	放射薬品学	第3学年
科目責任者(記載者)	志村 紀子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

物質を構成する基本単位である原子の構造、放射壊変についての基本的知識を修得し、電離放射線の種類、放射線と物質との相互作用、代表的な放射性核種の性質、放射平衡、放射線測定原理について学ぶ。また、薬学領域における放射性物質の利用、放射性医薬品について学ぶ。さらに、放射線の生体影響、放射線関係の法令等について学び、放射線のリスクとベネフィットについて理解を深めることを目標とし、講義を行った。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

授業の全てのシラバスの項目において、準備を万全に行った結果、学生による授業評価が3.65～4.31の高得点であったため、到達目標は達成されたと考えられる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による授業評価によれば、評価項目は3.65～4.31であり、授業評価としては良かったと考えられる。特に「授業はよく準備がなされていた」、「シラバスに沿って系統だてで行われた」の評価は4.1以上と高かったため、授業の準備が適切に行われたと考える。特に改善点はなく、このままのやり方で授業を進める。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

授業の各章が終了したところで、復習としてパワーポイントを使用し、放射線に関する理論の図や、放射線利用の写真等を提示し、学生に視覚的に訴え、興味を沸かせ、復習を促した。また、教科書の章末問題を授業の中で解かせて、その解説を行った。配布プリントとして、放射性医薬品の表を配布した。また実際に放射線測定機器やポケット線量計などの小型の放射線管理用機器を持参して測定原理や使用方法を説明し、授業中に回した。

2) 自己点検・評価

パワーポイントは、放射線に関する理論の図や、放射線利用の写真等を主体としたもので、学生に視覚的に訴え、興味を沸かせ、復習を促すという意味で、一定の効果をあげたと考えられる。また、教科書の章末問題を授業の中で解かせて、その解説を行うことにより、復習・暗記に役立ったと考えられ、試験結果にも反映されていた。そのため大体達成できたと考えられる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生の授業評価は3.65～4.31であり、特に「授業はよく準備がなされていた」、「授業はシラバスに沿って、系統だてで行われた。」については、それぞれ4.11、4.31と高評価であった。そのため、今後も同様の授業の進め方を行うこととする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

成績評価は、定期試験100%とした。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

最終的な合格率は、84%とやや低かった。毎年同様の授業を行っているのにも拘わらず例年より低い(例年93～100%)ため、学生側にも原因があると考えられる。しかしながら、このような理解度の低い学生を授業の始まった早い時期に把握して、質問を促したり、興味を持たせるなどの工夫が必要と考えられる。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

基本的には従来通りの授業を行う。教科書の説明や板書での説明の時間を増やして、学生が授業に集中できるように工夫をする。また、授業が一方方向にならないよう、発言を促し、意見交換するよう努める。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理系実習	第2学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品の品質管理に不可欠な化学平衡反応を活用する定量法について体験し、その原理を理解すると共に定量分析の基礎理論と技術を習得する。また、実験結果から法則を導き出し個々の経験法則をまとめ、一般性のある理論の確立へと展開させる。さらに、実験データを効率よく整理し統計的に解析することが重要であるため、薬学に必要な物理化学的現象を解析し、理論的に考察することで明快なレポートを書けることを目標とする。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

物理系実習はエネルギーと物質に関する自然現象を理解する上で重要な実習であるが、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことができていない学生が散見された。また、学生の能動的活動を基盤としており実習中に班員で話し合い実験回数の変更など「目的に合った方法にて結果を得ること」を習得することができていない学生が多く見受けられた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生の授業評価から物理系実習に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が実習をまじめに受け知識の向上に繋がるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下にならないように、教官側も注意を払うが、学生側も実習前の予習ならびに実習後の復習を心がけるよう徹底したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

実習書(奥羽大学薬学部物理系分野 編)を用い、さらに分かりやすく板書を行いながら実験操作の説明を行なった。また、実習の最後に当日の実習内容に関する口頭試問を行いながら知識の定着を図った。

2) 自己点検・評価

物理化学および分析化学との講義と連携しながら、物質に関する自然現象を理解させ、薬学領域で学ぶあらゆる実習の基本的操作を習得させる。そのために教官側は分かりやすい実験操作の説明を行うと共に、学生には予習と復習を徹底させる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、実習書に沿って板書を併用させ実験操作の説明を行う。当然のことではあるが実習には必ず毎回出席してもらい、事前に実習書を熟読してもらい当日の実習内容を大まかに理解し、その日のうちに実習内容に関して復習をさせる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

実習終了時に得たデータを教官と考察しながらディスカッションを行うことにより評価した。また、質問内容の解答が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正答できるように誘導した。また、正答した場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。実習態度、実習レポート、実習試験の結果を総合的に評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

レポート内容を精査し、単に実習書を書き写しただけでなく、しっかりと実験結果から考察が行えているか確認した。また、実習最終日には実習内容を理解したかどうか、単に○×だけの解答ではなく、計算問題、記述問題を取り入れて、学生のどの程度理解力しているかを重点にして試験問題を作成した。最終的な合格率が98%であったことから、学生は概ね実習内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

実習態度、実習レポート、実習試験の結果に加え、当日の実習に対する理解度を問う口頭試問を加味して総合的に評価する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理化学Ⅲ	第2学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

複雑な系における物質の状態および相互変換過程を熱力学に基づき解析できるようになるために、溶液および電気化学に関する基本的知識を習得する。また、物質の変換過程を理解するために、化学反応速度論、および反応速度に影響を与える諸因子に関する基本的知識を習得する。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

医薬品の安定性に深く関わる物理現象の基礎となる電解質溶液論と反応速度論を理解する上で重要な学問であり、薬学生として必要な物理化学的諸現象を把握する素養を習得する教科の基礎となっているが、理想的思考力を身につけ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことができていない学生が見受けられた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生の授業評価から物理化学Ⅲの授業に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が授業をまじめに受けるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下にならないように、教官側も注意を払うが、学生側も予習ならびに復習を心がけるよう徹底したい。さらに、学生から指摘があったように授業の終盤に例題を数多く取り入れながら試験に向けて余裕を持たせたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義80%、演習20%の割合で授業を進めた。教科書として「レファレンス物理化学」を用いながら、プリントや分かりやすく板書を行いながら授業を行なった。また、授業の最後に当日の授業内容に関する演習問題を解きながら知識の定着を図った。授業中に質問を行うことで、教官側の一方的な授業にならないように注意を払った。また、質問に対して回答がない場合には、内容をより分かりやすく理解できるように説明を行った。

2) 自己点検・評価

物理学、物理化学Ⅰ、物理化学Ⅱとの講義と連携しながら、医薬品の安定性に深く関わる現象を理解させ、薬学領域で学ぶあらゆる教科の基本的事項を習得させる。そのために教官側は分かりやすい授業を進めると共に、学生には予習と復習を徹底させる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、教科書に沿ってスライドと板書を併用させ授業を進める。当然のことではあるが授業には必ず毎回出席してもらい、その場で大まかに理解し、その日のうちに復習をさせる。また、各單元ごとに身近な話題や薬学との関連性について話し、学生の興味を惹きつけるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

授業の最後に当日の授業内容に関する演習問題を解くことにより評価した。また、演習問題の解答が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正答できるように誘導した。また、正答した場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。定期試験の成績に加え、当日の授業に対する理解度を問う小テストを加味して総合的に評価する。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

単に○×だけの解答ではなく、計算問題、記述問題を多く取り入れて、学生のどの程度理解力しているかを重点にして試験問題を作成した。最終的な合格率が90%であったことから、学生は概ね授業内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

定期試験の成績に加え、当日の授業に対する理解度を問う小テストを加味して総合的に評価する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	環境衛生学 I	第 2 学年
科目責任者(記載者)	熊本 隆之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

地球生態系や生活環境を保全・維持できるようになるため環境汚染物質や環境要因の成因、測定法、生体への影響、汚染防止などに関する事項を修得する。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

シラバス通りに進め、すべての到達目標およびSB0sを網羅した。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

到達目標とSB0sに対するコマ数が不足しており、タイトなスケジュールで進行している。2024年度は講義時間が増え、ややゆとりをもって進行が可能となる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書(今井浩孝・小椋康光編「衛生薬学—基礎・予防・臨床—」第4版(南江堂)を基本に、これに合わせて作成したオリジナルの補足プリントとともに進めている。
オリジナルプリントは教科書の文章のみの記述に対する図示、内容の補足に加え、タイトなスケジュールでは話しきれない発展的な内容を多く加えている。

2) 自己点検・評価

おおむね評点4以上かつ全体平均と同程度であり、特に問題はなかった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生から改善に繋がる意見は特に無かった。2024年度は講義時間延長に伴い、問題から重要事項を反復する、衛生薬学の他領域の重要事項を先取りする、知的好奇心を刺激できるような発展的事項を加えることに充てたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

シラバスで提示した通り、定期試験(100%)とした。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

選択問題と筆記問題(考える系)を課しており、再試験対象者がやや多かったが、最終的に全員が合格していた。範囲が膨大かつほとんどが所見の内容であるが、学生個々の努力を評価したい。また考える系の問題に素晴らしい解答が散見されたことを強調したい。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生からの意見は特になく、今後も継続したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	環境衛生学Ⅱ	第3学年
科目責任者(記載者)	佐久間 勉	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

有害な化学物質の生体影響を回避できるようになるために、化学物質の毒性などに関する基本的知識を習得し、それに関連する基本的技能と態度を身につけることを一般目標とし15の到達目標を設定している。2022年度まで12回1単位の科目としていたが講義時間が不足ぎみであった。2023年度より14回2単位の科目に変更した。これにより全ての到達目標を余裕をもって解説できるようになった。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

定期試験において61名の受講者中56名(92%)の学生が単位を取得できた。しかし優以上の評価を得た学生は21名38%であり前年度の59%より減少した。再試験対象学生も前年度より増え、2023年度は到達目標の達成度が前年度より低下した可能性がある。薬剤師に必須な知識であることから、到達目標達成度回復をめざした改善が必要である。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

2)に記したように到達目標達成度は低下したように見える。しかし、2023年度の学生による授業評価は非常に高い。科目平均と全体平均を比較すると全10項目全て科目平均が高い。また、その値は2022年度より全項目で差が拡大し、学生の授業に対する満足度も高まっている。学生の授業評価と到達目標達成度が相関しない理由は不明だが、評価項目4、5が他項目に比べ低いことからまずはその点について改善を試みる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義100%で実施。佐久間はプリントを中心に教科書と板書を使って講義した。プリントには教科書にない図表や当日のまとめ、練習問題なども加えた。熊本も教科書を中心にプリントで補足した。プリントは教科書の不十分な記述の補充、文章では解りにくい内容の図示、時間内に話きれない発展的内容の解説とした。授業の前後は余裕をもって滞りし質問に応じた。積極的な双方向ディスカッションは衛生薬学演習で行う。

2) 自己点検・評価

2名の教員それぞれ工夫をこらしたプリントを作成し熱意をもって授業しているため、全ての評価項目で科目平均が全体平均より高い評価となった。また、その差は全ての項目において2022年度より拡大している。自由記述欄でも4つの記述のうち3つは好意的な記述であり、教育方法に関し学生の評価は高まっていると判断できる。しかしIで記したように到達目標達成度は低下しており、教育方法の改善は必要である。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

自由記述欄に項目4「教員の話し方、聞き取りやすさ」に関する問題点が指摘されており、科目平均も他の項目より低い。まずはその点の改善を目指す。自由記述欄に、教員が資料のどこを説明しているか分からなくなる時がある旨の指摘がある。その点についても配慮を心がける。評価の高かった項目は2024年度も継続する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価は実施していないが、佐久間は講義開始時に前回内容を確認し、練習問題の解説を各回で実施することで理解の向上につとめた。熊本は講義開始時は必ず前回までの内容について、講義中や講義終了後も適宜、問題形式で問いかけを行った。総括的評価ではコマ数に応じて期末試験の点数を配分し、期末試験を100%として評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

履修者61名中5名が単位を取得できなかったが、内2名は再試験前に退学を決めたため再試験を受けなかった学生である。再試験まで受験した学生のみを総括的評価における合格率は95%である。総括的評価において可の評価を受けた学生が23名(38%)おり、形成的評価を導入することでその割合が低下する可能性がある。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による授業評価は高く教育方法についても大きな問題はないと考える。しかし形成的評価を導入すること総括的評価における合格率が高まる可能性があるため、形成的評価の導入を検討する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	栄養化学	第2学年
科目責任者(記載者)	櫻井 敏博	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

栄養素の機能やその過不足が健康に与える影響を正確に理解する、また、食事による健康維持のための摂取基準についても理解することが達成目標である。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

定期試験は56名が受験し、25名が再試験となった。再試験の結果、3名が不合格となった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

多くの学生が合格となり、概ね目標は達成したと思われる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

指定教科書のみならず、配布資料としていろいろな教科書からわかりやすい図や表を引用し、独自の資料とした。その資料を用いながらコアカリキュラムのSB0を達成できるようにした。

2) 自己点検・評価

授業評価にもあったが、学生がアクティブラーニングできるような講義ができるように努めたい。自身の思惑と学生の理解度に乖離があるようなので、もう少し工夫が必要である。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価が高い先生にFDなどで、どのような講義を行っているかを教えていただきたい。そのうえで、採用できることがあれば、取り入れていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

試験の結果のみで評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

疾病を未然に防ぐというこれからの薬剤師のために素養しなければならない項目であるため、講義で得られた知識を応用して回答するような試験問題を出題している。そのため、再試験対象者は当然増えるが、講義内容に満足してくれる学生が多くいるのも事実である。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

講義ごとに課しているレポートについても成績評価の一部に取り入れるようにし、レポートの重要性を認識してもらおうようにしたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	食品衛生学	第3学年
科目責任者(記載者)	佐久間 勉	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目では、食生活が健康に与える影響を科学的に理解するため、栄養と食品機能、食品衛生に関する基本的事項の習得を一般目標とし、11の到達目標を掲げている。目標に掲げた事項の多くは習得できていると考えられるが期末試験の正答率より判断すると、その中で1「炭水化物、タンパク質の変質」6「代表的な食品添加物」8「遺伝子組換え食品の現状」など他に比べ習得度が低かった。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

期末試験において大半の到達目標の問題が正答率70%以上であった。1) で挙げた習得度の低い到達目標を含め本科目は覚えなくてはならない事項が多く、単に暗記しようとする学生には難しい科目である。しかし受講者61名中56名が単位を取得できたことより、科目の到達目標は概ね達成されたと考える。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

到達目標1、6で扱う事項は、重要度が非常に高く薬剤師国家試験でも頻出の内容である。タンパク質の変性物質や食品添加物の特徴について細かな事項を覚えなくてはならず、難しい到達目標である。次年度もポイントを強調したり到達目標外の事項と関連付けるなどして理解し覚え易い授業を目指す。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

学習方法は対面での講義が100%である。板書を中心とし学習範囲の要点や練習問題を記した補助資料も配付した。食品という身近な物に関連する授業であることから、学生が経験しているような事や最近のトピックなどを取り上げ、そこから学生自身で考え授業に参加することを促した(佐久間)。図表や写真を中心とした補助プリントを扱いながら、化学物質分野や生活環境分野との関連性を明示し概説した。(熊本)

2) 自己点検・評価

要点や練習問題を記した補助資料を授業で使用し効果的な学習を目指している。それらが項目1、3、8が全体平均と同等かそれ以上の評価につながったと考える。前年度改善を要する項目として挙げた項目9が全体平均より高くなり改善が見られた。重要項目はこれ以上ないほど強調しており、定期試験でも過半数が正答率80%以上であった(熊本)。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

項目4「教員の話し方」は改善の努力を続けているが2023年度も全体平均より低かった。2023年度より授業を録画しているので、それを視聴し学生の視点から改めて問題点を探り改善に繋げたい。熱意をもって授業しているが項目6認に繋がっていない。この点も授業ビデオ視聴から糸口を見つけない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価は実施していないが、講義開始時に前回内容の振り返りをした。詳細な評価は行わなかったが、補助資料に含めた練習問題の解説を行い講義の理解度を確かめた(佐久間、熊本)。本科目は2名の教員で分担しており、コマ数に応じて期末試験の点数を配分し、期末試験を100%として総括的評価を実施した。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

総括的評価において5名不合格となったが、内2名は退学を決め再試験を受験しなかった学生である。その2名を除くと総括的評価での合格率は95%となる。授業の度毎に前回の復習から始まり、終わりに練習問題を解いて知識の確認をしている。それもあって総括的評価では90%を超える高い合格率となっていると考えている。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

形成的評価の導入を検討する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	公衆衛生学 I	第 3 学年
科目責任者(記載者)	押尾 茂	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本講義では健康を集団レベルで捉える考え方とその応用について学ぶことが目標である。具体的には、社会における集団の健康と疾病の状況およびその影響要因を把握するために、保健統計、予防薬学及び疫学に関する基本的知識と考える態度を養成する。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

達成出来ている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価も一定のレベルにあるので、同様に進めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書の図表の説明を丁寧に行った上に必要に応じて追加として独自の講義資料を毎回講義時に配付した。これは、一部を記入式にしてあり、講義中に記入することで知識の定着を図るものである。講義では、パワーポイントを使用した。

2) 自己点検・評価

講義の内容がどうしても現状の統計数字の説明や疫学の計算問題になりがちで、そのことが授業評価において、「知的好奇心の刺激」の低評価に結びついていると考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

さらに講義内容の精選を行い、単なる統計の解説に留まらず、その結果の背景にまで踏み込むように工夫したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験の結果を100%として評価している。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

最終成績は56名中55名合格であり特に問題はないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今後も現状の方針で進める。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	公衆衛生学Ⅱ	第3学年
科目責任者(記載者)	押尾 茂	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本講義では、感染症、生活習慣病についてその動向と予防方法について学び、母子保健については現状と今後の課題について学ぶ。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

達成出来ている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価も一定のレベルにあるので、同様に進めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書の図表の説明を丁寧に行った上に必要に応じて追加として独自の講義資料を毎回講義時に配付した。これは、一部を記入式にしてあり、講義中に記入することで知識の定着を図るものである。講義では、パワーポイントを使用した。

2) 自己点検・評価

今年度、反している内容が聞き取りづらいという記述があり、該当する評価も低かった。聞き取りやすさというのは、受講者にとって大変重要な点であるので、気をつけていきたい。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

さらに講義内容の精選を行うとともに、発声法についても気をつけたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験の結果を100%として評価している。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

最終成績は56名中55名合格であり特に問題はない考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今後も現状の方針で進める。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	衛生薬学実習	第3学年
科目責任者(記載者)	押尾 茂	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本実習は、衛生薬学分野教科目の講義と一体をなすものである。環境衛生、食品衛生、公衆衛生の各分野で必須の実技を体験し学ぶ機会である。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

コアカリキュラムに基づいて、必須の項目は全て網羅されており、目標は達成されている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生の評価からみると、半分の項目で「そうは思わない」が20%程度あるという評価があることから、これらへの対応を考えたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

実習テーマに合わせて、4グループに分けて各2日ずつの実習を4テーマ、計8日間で行っている。教員作成による実習書を配付し、それに基づいての予習を励行している。また、実習書内には実習全般の注意が記載されている。4テーマの実習項目毎に、実験のポイント等も記載しており、学習の助けとしている。

2) 自己点検・評価

実習書は毎年改訂を行っているものの、校正ミスがあることも事実としてある。学生からの評価に対しては、半分の項目で「そうは思わない」が20%程度あるという評価を真摯に受け止めたい。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

実習書の改訂を正確に行う。また、学生評価の結果を踏まえて、実習内容の見直しを含む対応を衛生薬学分野教員間で話し合うこととする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

実習態度、レポート、知識確認試験の点数を合計して判断している。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

全62名の受講者中、不合格者は2名で、この2名は共に再三の連絡にもかかわらずレポートを未提出であった者である。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今後も現状の方針で進める。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	衛生薬学演習	第4学年
科目責任者(記載者)	押尾 茂	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本演習は、3年次までに学んだ衛生薬学分野教科目・実習を踏まえて、現代の衛生薬学分野の諸課題について、「調査」・「討議」・「発表」を行うことで、将来、薬剤師として国民の負託に応えられる能力の涵養を目指す。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

達成出来ている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価も一定のレベルにあるので、同様に進めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

学生を4グループに分けて2コマを1セットとして、4テーマ、計8コマで行っている。1コマ目はテーマ選定、担当割り振り、調査を行い、2コマ目に発表をおこなう。これを4回、別テーマで繰り返す。

2) 自己点検・評価

学生評価でも特に問題点は認められない。また、調査課題については、随時見直しを行っている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今後も現状の方針で進める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

参加態度・発表・提出プロダクト（パワーポイント）について合計して判断している。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

特に問題はないと判断する。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今後も現状の方針で進める。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬の効き方と作用点(薬理系1)	第2学年
科目責任者(記載者)	佐藤 栄作	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

4年生まで学ぶ薬理学の最初の授業として、「薬物受容体の概念を理解し、多くの医薬品の作用点となっている代表的な薬物受容体の性質、機能、および生理的役割に関する基本的事項を修得する。」ことを到達目標にしている。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

授業は計画通り実施し、学生の授業評価のアンケート結果は、ほぼ全ての項目で平均以上の評価となっていた(ただし、回答率が27%だった)。定期試験の平均点も、前回と同様に80点程度であるが、再試験対象者は、増えており、授業中での理解が不十分であるかもしれない。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

到達目標は達成できているので、現状を継続する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

授業は、講義を100%で実施した。講義内容に関して、教科書中の記載事項の要点と教科書のみでは理解不足になる点、関連する国家試験問題をまとめた資料を作成し配布し、イメージしやすいようにパワーポイントを活用している。また、授業開始時に前回の復習を簡単に行っている。理解度確認の目的で、C-Learningの小テストを実施し、また、繰り返し問題演習ができるようにドリルにしている。

2) 自己点検・評価

授業内容に関して平均点以上の評価であり、要点をまとめて説明していること、復習、講義資料について、学生から好評なため、教育方法については目的に合ったものとなっている。ただし、スライドがメインなのか配付資料がメインなのかわからなかったとの意見もあったため、講義の進め方に工夫が必要となっている。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

プレゼンテーション資料の改良を行う。また、授業中で扱う国家試験等の問題、小テストの問題については、時間があるかぎり解説を行い、学生からの質問も受け付けるようにする。授業の復習を行わせる時間を増やしたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的な評価は行わず、定期試験(100%)で総括的評価を行った。出題形式として、記述式問題、選択肢問題、正誤問題を組み込み、単に覚えているだけではなく、薬物の作用機序等について説明ができるなど理解度の深い学生の成績が高くなるようにしている。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

試験問題の難易度は例年通りであり、この学習範囲の必須のことを全て網羅しているため、ほぼ全ての学生が単位取得できていることから、該当領域の内容を十分に理解できたものと考えられる。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業中で扱う問題や、C-Learningの小テスト問題をアップデートし、最新の知識が習得できるように配慮する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	末梢神経に作用する薬と生体反応(薬理系2)	第2学年
科目責任者(記載者)	西屋 禎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

末梢神経系は、各種臓器および器官の機能を自律的に制御して生体の恒常性維持を担う自律神経と、骨格筋の運動を調節する運動神経、ならびに感覚器からの情報を中枢に伝達する知覚神経などから構成されており、多くの薬物の作用点が存在するため、末梢神経系の理解は極めて重要である。そこで、末梢神経系の役割、受容体、薬物の薬理、および、疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を習得することが本授業の目標となる。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

授業はシラバスに沿って適切に進行し、定期試験において学生全体の21%が正答率90%以上、また30%が正答率80%以上であったが、最終的な不合格者も10名いた。これらの不合格者のうち、5名は学業不振により退学しているため、本授業のみ成績不良であったわけではないことがわかる。したがって、概ね目標は達成できたと考える。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特になし。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

本講義は講義100%である。「NEW薬理学改訂第7版」(南江堂)を教科書として使用し、シラバスに沿って授業を進行した。また、主要臓器別の自律神経機能解説表や作用点別薬物リストを適宜配布して、学生の復習に役立てた。また、授業ポイントを確認するために小テストを実施した。わからないところは質問に来るように指示した。

2) 自己点検・評価

授業は、パワーポイントを用いた板書形式で行い、教科書の重要部分もパワーポイントで写し、それに書き込む形でわかりやすく説明を行った。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価は、概ね平均を上回っていた。回答率が25.4%と低かったが、未回答者は特に不満がなかったと解釈し、来年度も今年度のやり方を踏襲する。自由記述では、「薬理自体は好きだが答えではなくヒントのみを教えるのはどうかと思う。考えてもわからないのに質問してるのだから。」という意見があった。こういう学生は答えを丸暗記してわかったつもりになっている可能性が高く、注意が必要である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価は特に行わなかった。総括的評価は、定期試験の成績を100%として評価した。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

授業の内容がそれなりのレベルであったにもかかわらず、定期試験において正答率80%以上で合格した学生が全体の30%いたことから、試験問題の内容及び難易度は適切であったと考える。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

成績評価の方法については、定期試験の成績を100%として評価するやり方を変更するつもりはないが、成績の悪い学生の多くは試験勉強のスタートが遅いことが主な原因と考えられるため、早期に勉強を開始するように強く指導したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生体内で生み出される生理活性物質(薬理系3)	第2学年
科目責任者(記載者)	西屋 禎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生理活性アミンや生理活性ペプチドといった生体内で生み出される生理活性物質の受容体は、多くの薬物の作用点となっており、その総合的理解は薬物の効果発現を理解する上で不可欠である。本科目は、生体内で生み出される生理活性物質の作用発現機構に関する基本的事項を修得し、本科目終了後に始まる「薬と病態」シリーズ講義を学ぶための基礎を作る。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

授業はシラバスに沿って適切に進行し、定期試験において学生全体の21%が正答率80%以上であったが、最終的な不合格者も11名いた。これらの不合格者のうち、6名は学業不振を理由に退学もしくは休学となっており、本授業のみ成績不良であったわけではないことがわかる。したがって、目標は概ね達成できたと考ええる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特に変更する必要はないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

「NEW薬理学改訂第7版」参考書として使用し、シラバスに沿って授業を進行した。また、適宜、プリントを配布した。わからないところはメールによる問い合わせまたは直接質問に来るように指示した。

2) 自己点検・評価

授業評価は、どの項目も概ね高評価であった。自由記述でも、「先生一人一人がとてもわかりやすい授業で、わかりやすかった」というコメントがあった。一方、「話すスピードが少し早く理解するのが追いつけない、過去問の答えを教えるべき、他の先生の授業方法を真似るべきだ」というコメントもあった。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学部の取り決めで、過去問は公開するが正答は教えないことになっている。できない学生に限って、正答を丸暗記する傾向があるため、今後もヒントは与えるが正答は教えない。他の面(話すスピード、授業方法など)で改善できるところは改善していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価は特に行わなかった。総括的評価は定期試験の成績を100%で評価した。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格者を踏まえて評価する)

授業の内容がそれなりのレベルであったにもかかわらず、定期試験において正答率80%以上で合格した学生が全体の21%いたことから、試験問題の内容及び難易度は適切であったと考える。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

成績評価の方法については、定期試験の成績を100%として評価するやり方を変更するつもりはないが、成績の悪い学生の多くは試験勉強のスタートが遅いことが主な原因と考えられるため、早期に勉強を開始するように強く指導したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（精神疾患）薬理系 6	第 3 学年
科目責任者（記載者）	関 健二郎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

精神疾患治療の中心となる薬物療法において、薬の作用、副作用、相互作用などに精通して臨床現場でその能力を十分に発揮するため、本科目は、様々な精神疾患の症状や病態生理について学び、それらの疾患に用いられる治療薬の作用機序、副作用、多剤併用による相互作用ならびに臨床適用についての知識を身に付けることを目標としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

51人全員が受験資格を有し、1人欠席による追試験、再試験は16人と例年よりも多めだった。一方、90点以上の成績の学生も12人いたことから、難易度は例年より若干易しめであったと思われる。成績の格差が激しい印象で、本試験で十分勉強していない学生の割合が例年よりも非常に高いと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

科目別の回答率が60%以上と高かった。一方、毎年書かれている様な改善の要望やネガティブな記述は一つも無かった。全ての項目で全体平均を超えていることから、次年度も今年と同様に進める予定でいる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

「授業の資料を作らず、スライドも使わず、教科書と板書だけで授業するのは教員として怠慢である」という意見をを受けた。しかし、NEW薬理学と薬物治療学の教科書2冊を使い、教科書のどこに何が書いてあり、どれが大事でどれは覚える必要が無いかを全て授業中に確認してもらいたいと思って講義しており、試験の難易度が高いにも関わらず上位が例年よりも多かったので今後もこのスタイルを継続したい。

2) 自己点検・評価

定期試験の結果を90%、宿題提出を10%として形成的評価も取り入れている。今後も同様の方針で行う。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

科目別の回答率が60%以上と高かった割に、改善を要望するようなネガティブな記述は一つも無かった。全ての項目で全体平均を超えていることから、次年度も今年と同様に進める予定でいる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験の結果を100%とする総括的評価を実施する。試験問題数は各教員の授業時間数に従って配分を決定して評価する。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

51人中5人が最終的に不合格となった。5人のいずれの学生も再試験科目を10科目近く持っていたため、再試験の勉強時間の確保が十分でなかったと思われる。なお、再試験の難易度は、例年と全く同じと評価している。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

欠単位になった学生が5人いたことから、本試験から勉強時間の確保の重要性について学生に伝わるよう努めたい。また、学生が勉強しやすいように覚えるべき内容や理解すべき内容について徹底していきたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（神経・筋疾患）薬理系7	第3学年
科目責任者（記載者）	関 健二郎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

脳・神経・筋疾患の薬物療法において、薬の作用、副作用、相互作用などに精通して臨床現場で能力を発揮するため、脳神経変性による運動障害や記憶・認知機能障害、けいれん発作などを引き起こす脳神経系の病態生理及び治療薬に関する基本的な知識を修得する。また中枢神経系に作用して効果を発揮する癌性疼痛薬や全身麻酔薬の適切な使用法、種類、作用機序などを修得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

51人全員が受験資格を有し、再試験は20人と例年よりもかなり多めでだった。一方、90点以上の成績の学生も14人おり、例年よりも90点以上の割合は多かった。したがって、難易度は例年より若干易しめであったと思われる。成績の格差が激しい印象で、本試験で十分勉強していない学生の割合が例年よりも非常に高いと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業のスピードが速いと指摘があった。これは講義している自分でも実感している。授業時間に比べて覚えるべき、理解すべき内容が多いため、教科書の解説を中心とした授業だけでなく、要点をまとめた資料の配布などで授業時間の確保に努めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

毎回記述式問題を40問ほど宿題で課し、C-Learningで提出した学生には1人ずつフィードバックした。これにより、学生の理解度と自分の授業の欠点も見つかった。土日もメールで質問を受け付けているが、毎週多くの学生が平日土日問わずこれを利用するので、今後も継続する。

2) 自己点検・評価

NEW薬理学と薬物治療学の教科書2冊を使い、教科書のどこに何が書いてあり、どれが大事でどれは覚える必要が無いかを全て授業中に確認してもらいたいと思って講義しており、今後もこれを継続したい。また薬理系7では、パーキンソン病やてんかん、全身麻酔の様子など、ビデオで症状や方法を見せると学生の理解度が高まるので今後も継続する。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業時間に比べて覚えるべき、理解すべき内容が多いため、教科書の解説を中心とした授業だけでなく、要点をまとめた資料の配布などで授業時間の確保に努めたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験の結果を100%とする総括的評価を実施する。試験問題数は各教員の授業時間数に従って配分を決定して評価する。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

51人中5人が最終的に不合格となった。5人のいずれの学生も再試験科目を10科目近く持っていたため、再試験の勉強時間の確保が十分でなかったと思われる。なお、再試験の難易度は、例年と全く同じと評価している。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

欠単位になった学生が5人いたことから、本試験から勉強時間の確保の重要性について学生に伝えるよう努めたい。また、学生が勉強しやすいように覚えるべき内容や理解すべき内容について徹底していきたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（感染症）薬理系 8	第 3 学年
科目責任者(記載者)	三宅 正紀	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

病原微生物が引き起こす各種感染症の病態並びに感染症に対する化学療法薬の分類や作用機序，主な特徴，副作用，薬剤耐性の獲得機構について修得すること、および微生物の滅菌・消毒方法，現行ワクチンの種類や特徴，作用機序について修得することを目的とし、8の到達目標を設定した。講義は2名の教員で分担して行った。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

定期試験の結果から、およそ達成していると考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

2024年度より、本科目担当が科目責任者単独に変更され、使用教科書、スライドも一新されている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書を中心にスライド、および板書を用いた講義を行った。スライドは、教科書を補足する内容のものなどを使用した。復習用の問題を配布した。双方向性の確保は現状行えていないが、講義後の質問やメールによる問い合わせには丁寧に対応した。

2) 自己点検・評価

c-learning等を使用し、講義を行った箇所に関連した問題等を適宜解答させる機会を作り、学生の理解度を都度確認しながら、必要に応じて学生の苦手な部分を再度説明したり、個別に質問に対応するなどを行うことで、双方向性を担保しながら進めていくようにすれば、より学生のニーズに合った合理的な講義ができると考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

抗生物質・化学療法薬や感染症などの専門的な内容を講義するため、多くの薬品名、用語などを含め学生にとっては難しいと感じる部分もあると考える。そのため、講義はゆっくりと行い、科学的根拠や臨床現場での事例などの補足情報も入れつつ講義を行うことで、医薬品名を暗記するだけにならないよう引き続き努力する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験の成績を100%とし総括的評価を実施した。講義を2名の教員で分担したことから、担当コマ数に応じて定期試験の配点を設定した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

61名が受講し、定期試験本試験において42名が単位取得基準に到達した。残る19名のうち、14名が追再試験により、1名が再々試験により単位を修得した。4名の不合格者は全員、再試験もしくは再々試験の受験対象者であったにもかかわらず、無断欠席により受験を辞退している学生であり、それ以外の学生は全員が合格していることから、目的は達成されたと判断した。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

次年度も本年度と同様に評価する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（心・血管・呼吸器疾患）薬理系9	第3学年
科目責任者(記載者)	佐藤 栄作	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「循環器系・呼吸器系に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を身につける」ことを到達目標としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

授業は授業計画通り進めることができた。学生アンケート結果では、全ての項目で平均点以上の評価であり、92%の学生が授業の関連分野に関心を持ったと回答していること、また定期試験の平均点が76.3であったことから到達目標を達成できている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

到達目標に関しては現状通りとする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は、自作の資料を使用し、100%講義形式で実施し、視覚的に理解しやすいようにパワーポイントを活用している。関連する国家試験問題を講義プリント中で紹介し、またC-Learning上で確認問題を自ら解くことで重要なポイントの復習と整理ができるようにしている。授業中に不明な点があるかどうかを確認し、理解できない点を直接あるいは電子メール等を使用し質問するように促している。

2) 自己点検・評価

今年度も、講義資料を更新し、最新の情報をとり入れた授業を行うことができた。教育方法に関する評価も平均点以上であった。到達目標達成のための教育方法として適切であったと思われる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

定期試験の得点分布から判断すると、3割程度の学生は定期試験本試験の段階では十分に理解できていない。復習が十分に行われていないことから、例えば授業終了後にC-Learningで小テストを実施し、成績に反映できないかと考えている。C-Learningによる問題演習は、学生の理解度を深めるのに役立っていると思われるため、内容を充実させたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は行わず、総括的評価を定期試験（100%：佐藤栄担当分60%、佐藤研担当分40%）で行った。出題形式として、記述式問題、選択肢問題、正誤問題を組み込み、単に覚えているだけではなく、薬物の作用機序等について説明ができるなど理解度の深い学生の成績が高くなるようにしている。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

試験問題の難易度は例年通りであり、この学習範囲の必須のことを全て網羅しているので、ほぼ全ての学生が単位取得できていることから、該当領域の内容を十分に理解できたものと考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

次年度も定期試験で統括的な評価を行う予定であるが、復習に関して成績に反映できないかと考えている。理解度を確認するためにC-Learningでの小テストを実施し、知識の習得のために問題演習を繰り返し実施する習慣をつけさせる。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（腎・泌尿器・生殖器疾患）薬理系10	第3学年
科目責任者（記載者）	佐藤 栄作	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「泌尿器系・生殖器系に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を身につける。」を到達目標としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

授業は授業計画通り進めることができた。学生アンケートについては、回答率が11.1%と極めて低く参考にはできないが、概ね平均点であり、定期試験（本試験）の平均点は80.2点であることから目標を達成できている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

到達目標に関しては現状通りで問題ない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は、自作の資料を使用し、100%講義形式で実施した。
(佐藤) 関連国家試験問題を紹介し、C-Learning上で確認問題を解かせて重要なポイントの復習と整理を行わせている。
(中川) C-Learningを活用し、事前に講義動画を視聴後、確認テストを受けさせ、講義中にはIn Class Quizを実施して理解不足の解説を行い、授業後にドリルを活用して復習させている。

2) 自己点検・評価

C-Learningを積極的に利用している。学生アンケートの中に「事前に予習用動画を公開してくれるため、次に習う講義をスムーズに理解でき、講義内でも演習問題を多く解くため、理解が深まりやすいと感じた。」とあり、適切な教育方法であった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

定期試験の得点分布から判断すると、2割の学生は学習の要点を把握できておらず、復習も行っていないようである。以下の点に注意する。
(佐藤) 作用機序などをイメージとしても理解できるようにパワーポイントをさらに活用する。C-Learningを利用した問題演習を充実させる。
(中川) 双方向性の授業を継続する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は行わず、総括的評価を定期試験（100%：佐藤担当分50%、中川担当分50%）で行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

試験問題の難易度は例年通りであり、この学習範囲の必須のことを全て網羅している。ほぼ全ての学生が単位取得できていることから、該当領域の内容を十分に理解できたものと考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

次年度も定期試験で統括的な評価を行う。将来的には定期試験以外の評価項目を取り入れていきたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態（消化器疾患）薬理系12	第4学年
科目責任者(記載者)	西屋 禎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

第一に、消化器系疾患の病態（発症機序、症状など）を理解する。第二に、消化器系疾患治療薬の作用機序、薬理作用および主な副作用を習得する。最後に、最新の薬物治療ガイドラインを基に、実際の医療現場で用いる薬物を把握し、適正に使用できる能力を身に着ける。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

授業はシラバスに沿って適切に進行し、定期試験において学生全体の8%が正答率90%以上、また32%が正答率80%以上であり、最終的な合格率が99%であったことから、教育目標は概ね達成できたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業の内容がわかりずらかったといった自由記述は見られなかったことから、試験の成績も加味すると学生は授業内容をきちんと理解できており、到達目標を変える必要はないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

本科目は講義の割合が100%である。「NEW薬理学改訂第7版」（南江堂）と「薬物治療学改訂第8版」（南山堂）を教科書として使用し、シラバスに沿って授業を進行した。また、適宜、わかりやすい図を配布した。また、わからないところは質問に来るように指示し、質問に来た学生に対しては、授業ノートや教科書のどこをみれば正解にたどり着けるのかを丁寧に説明した。

2) 自己点検・評価

授業はシラバス通りに進行し、定期試験の成績も良好であり、本授業は問題なく実施されたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価では、ほとんどすべての項目で平均点を上回った。アンケートの回収率が22.2%とかなり低かったが、授業に対する不満のような自由記述もなく、未回答者は特に不満がなかったと解釈でき、来年度も今年度のやり方を踏襲する予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は行わなかった。総括的評価は定期試験の成績を100%で評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

定期試験において正答率80%以上で合格した学生が全体の32%いたこと、最終的な合格率が99%であったことから、成績評価は適切になされたと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価の方法については、定期試験の成績を100%として評価するやり方を変更するつもりはないが、CBTや国家試験を意識し、記述式問題とマークシート方式の問題をうまく織り交ぜた出題にすることで、学生の学力を適切に測り、かつCBTや国家試験の対策も同時に行いたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態チュートリアル1（神経疾患）	第3学年
科目責任者(記載者)	小池 勇一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

神経疾患の薬物治療に貢献できることを目的とし、各種臨床データを含む患者情報から疾患の病態を理解し、最適な薬物治療の立案に必要な代表的治療薬の作用機序、使用法ならびに副作用とその対処方法について習得する。そのためPBLチュートリアル形式にて授業を行う。また、代表的な症例について小グループによる討議（SGD）を行い、知識、態度、技能の習得を目指す。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

当該科目の講義内容に対する理解度の評価に関しては、SGD、症例についてのグループによる発表、定期試験の成績（レポート）を主として評価に用いた。その結果、定期試験の合格率は100%であったため、おおむね達成できていると考えられた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

現状では時間的な制約のため、扱える疾患が限定されているが、出来るだけ、基本となる疾患の症例を多く学習できるように、検討していきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教育方法として、講義30%とし、残りは課題に対してのSGD（小グループ討論）、課題の発表などの演習とした。指定教科書として、「薬物治療学」改訂第8版、吉尾隆編 南山堂、「今日の治療薬 2019」南江堂を用いた。さらに、毎回の講義には、重要な点はパワーポイントファイルで説明し、そのファイルをプリントして配布した。また、毎回の講義時およびSGD時に、学生からの質問について教員がその都度行った。

2) 自己点検・評価

本授業は双方向性授業を目的としたチュートリアル形式であるため、アンケート評価も授業はよく準備がなされていた、教員は効果的に学生の参加（発言、作業）を促したとの双方向性についての評価がより高く、本来の目的が十分達成できていると思われた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

教育方法については現状の方向性を維持して行きたいが、ルーブリック評価基準を学生にあらかじめ提示することも検討していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

SGDおよびレポートの評価にはルーブリック評価をおこない、学生の理解度についてSGDにおける貢献度、コミュニケーション能力、レポート内容の構成力、設問に対する情報収集能力、理解度、レポートの構成能力について形成的評価をおこなった。また、小グループ討議（SGD）や発表会における参加態度50%、レポート試験の結果（50%）により総括評価を行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

成績評価については、試験結果の合格率が100%であることを考えると、当初の目的は達成されていると考えられた。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価の結果からは、特に問題は無いと考えられるが、今後は症例を増やすことなどを考えていきたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態チュートリアル2 (循環器疾患・代謝性疾患)	第3学年
科目責任者(記載者)	小池 勇一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

心疾患や高血圧症などの循環器疾患、糖尿病や脂質異常症といった代謝性疾患は、薬物治療における重要領域である。これらの治療に貢献するため、患者情報や臨床データから病態を理解し、治療薬の作用機序、副作用対策を学ぶ。本授業はPBL形式で実施し、小グループで提示症例をもとに自主学習と討論を行い、最適な治療法を立案・発表する。また、他グループとの比較を含めた考察内容をレポートにまとめる。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

回収率が55%と高いなかで、全体的に評価が良いと理解している。
項目5の評価が高いのは、スモールグループディスカッションを組み入れているからだと思われるが、他者の意見を聞いて議論する過程は理解を深めやすいので、テーマとして取り上げた慢性心不全および高尿酸血症について理解が深まったと考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

チュートリアルの教育目的を一番に理解してもらうための説明にもうすこし力をいれる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

慢性心不全および高尿酸血症に関する総合的な説明(病態、診断、薬物治療)したうえで、各グループにわかれて、各症例をあてがい、約8つの質問を課題としてグループディスカッションする。不明な点は、各自持参の教科書や参考書、自分で調べてきた資料などをもとに討論し、理解を深める。

2) 自己点検・評価

小グループの時間は、担当教員によってはほかの業務との兼ね合いで参加できないこともあった。そのため、小グループの話し合いの方向がうまくいかないこともあるようである。なるべく小グループのタスク役として機能するようにする必要があると思われる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

小グループのタスク役として機能するように各教員に周知する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

- ・小グループ討議や発表会における参加態度および発表内容50%、レポート50%とし、ルーブリック評価表により評価する。
- ・授業の最終回に、課題に対する模範解答を提示して、フィードバックを行う。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

レポートの内容が、各学生の理解度を測ることに有用である。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

各病態の説明の講義資料の適切なアップデートをしていく。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬と病態チュートリアル3（消化器疾患）	第4学年
科目責任者(記載者)	小池 勇一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

消化器疾患の薬物治療に貢献できることを目的とし、各種臨床データを含む患者情報から疾患の病態を理解し、最適な薬物治療の立案に必要な代表的治療薬の作用機序、使用法ならびに副作用とその対処方法について習得する。そのためPBLチュートリアル形式にて授業を行う。また、代表的な症例について小グループによる討議（SGD）を行い、知識、態度、技能の習得を目指す。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

当該科目の講義内容に対する理解度の評価に関しては、SGD、症例についてのグループによる発表、定期試験の成績（レポート）を主として評価に用いた。その結果、定期試験の合格率は100%であったため、おおむね達成できていると考えられた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

現状では時間的な制約のため、扱える疾患が限定されているが、出来るだけ、基本となる疾患の症例を多く学習できるように、検討していきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教育方法として、講義30%とし、残りは課題に対してのSGD（小グループ討論）、課題の発表などの演習とした。指定教科書として、「薬物治療学」改訂第10版、吉尾隆編 南山堂、「今日の治療薬 2023」南江堂を用いた。さらに、毎回の講義には、重要な点はパワーポイントファイルで説明し、そのファイルをプリントして配布した。また、毎回の講義時およびSGD時に、学生からの質問について教員がその都度行った。

2) 自己点検・評価

本授業は双方向性授業を目的としたチュートリアル形式であるため、アンケート評価も授業はよく準備がなされていた、教員は効果的に学生の参加（発言、作業）を促したとの双方向性についての評価がより高く、本来の目的が十分達成できていると思われた。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

教育方法については現状の方向性を維持して行きたいが、授業が理解しやすいように工夫されていたとの項目の評価がやや低かったため、ルーブリック評価基準を学生にあらかじめ提示することも検討していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

SGDおよびレポートの評価にはルーブリック評価をおこない、学生の理解度についてSGDにおける貢献度、コミュニケーション能力、レポート内容の構成力、設問に対する情報収集能力、理解度、レポートの構成能力について形成的評価をおこなった。また、小グループ討議（SGD）や発表会における参加態度50%、レポート試験の結果（50%）により総括評価を行った。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

成績評価については、試験結果の合格率が100%であることを考えると、当初の目的は達成されていると考えられた。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

授業評価の結果からは、特に問題は無いと考えられるが、今後は症例を増やすことなどを考えていきたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床検査学	第3学年
科目責任者(記載者)	高野 真澄	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

身体の病的変化から疾患を推測できるようになるために代表的な症候、病態、臨床検査に関する基本的な事項を修得することが、一般目標である。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

最終的に全員が合格しており、学生の理解度・習熟度は高かったと考えられる。以上より、目標が達成できたと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による全ての評価項目が全体平均を上回っており、学修の到達度は高く、目標は達成できていると考えられるため、特に改善点はないと考えられる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書として「薬学生のための病態検査学」を用い、教員が作成したパワーポイントを配付資料とした。既学修事項については理解度を確認しつつ、授業を進めた。さらに、実際の臨床データをもとに、検査値をどのように解釈していくかについてわかりやすく講義・演習を行った。

2) 自己点検・評価

学生が興味を持って学べるように、臨床的な事項と関連付けながら授業を行っており、学生の修学意識を高められる工夫をしている。また、実際の臨床データを用いた演習は、学生の興味を引き、検査値がどのように臨床で用いられているのかの理解に役立ったと考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による授業評価は高かった。丁寧に聞きやすく、理解しやすい授業であったという意見や、講義のスピードが良くテンポの良い授業であったとの感想があった。したがって、現在の授業形式を継続し、必要に応じてアップデートしていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価として、授業毎の小テストにより学習度のチェックを行った。また、総合的評価は、定期試験100%により行った。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

授業で示した重要ポイントを試験問題として出すことにより、復習がきちんとなされ、理解度を確認することができていると考える。最終的に定期試験受験資格がある全員が合格しており、問題は無いと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

成績評価に関して、特に改善点を指摘した意見もなく、現行で問題ないと考えられる。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬理学実習	第3学年
科目責任者(記載者)	西屋 禎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬物の作用を理解するためには、薬物を実験動物に投与して、その薬理作用を実際に観察することが重要である。本実習では、薬物の作用点、作用機序、薬理作用について、小動物およびその摘出臓器を用いて代表的な中枢神経作用薬、自律神経作用薬等の効果を観察する。また、薬理学研究における最低限の手技手法を経験し、会得する。これにより、生体についての生物学的“ものの考え方”を修得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

今年度から従来の実習形態に戻り、動物を使った実習（Section AとB）とコンピューターシミュレーションを用いた実習（Section C）を行った。態度・レポート・実習試験の総合点で90点以上が全体の13%、80点以上が全体の61%おり、全員合格であったことから、目標は達成されたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に改善する箇所は見当たらない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

実習時間の半分以上は実験が占めるが、その他の時間ではデータ解析の方法や実験結果の分析・考察のやり方、レポートの書き方等について詳しく説明している。

2) 自己点検・評価

アンケートの回答者が3名しかおらず、アンケート結果については何とも言えない（全て満点であった）。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績の結果からみれば、今年度のやり方を踏襲して問題ないと考える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

実習態度30点、レポート40点、筆記試験30点の合計100点満点で評価する総括的評価を行っている。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

不合格者はおらず、実習態度、レポート、及び筆記試験の間で大きな得点の偏りもなく、評価方法については特に問題はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

アンケート結果から特に学生からの不満はなく、現状のままで問題ないと考える。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医薬品毒性学	第4学年
科目責任者(記載者)	佐藤 栄作	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品は有効性と安全性(副作用)のバランスの上に成り立っている。医薬品の副作用に関する知識は、薬剤師が服薬指導を行う際に必要となるだけでなく、薬害を未然に防止するという意味でも非常に重要である。医薬品毒性学では、薬物の過剰摂取や特殊な化合物によって引き起こされる中毒症状とその解毒法など重大な副作用や発生頻度の高い副作用を引き起こす薬物とその副作用の発生機序や予防・治療法を修得する。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

63人が受験し、再試験対象者が2人だけであったので最低限の授業はできていると考えている。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

本年度は3人の教員によるオムニバス講義を実施した。内容的には3年生まで科目の復習が多いが難易度が高く勉強しにくいことを配慮し、練習問題などを各担当教員が配布したり、C-Learningを十分活用し、質問もメール等で随時受け付けた。本年度は、アンケート回答率が20.7%と低かったためか、自由記述欄の書き込みは一つも無かった。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

指定教科書の解説を中心に、一部は資料や練習問題を追加することで当該内容の理解を深めることを目指した。

2) 自己点検・評価

学生による評価は概ね4以上であり、全ての項目で全体平均を上回った。昨年度評価の低かった双方向の学生参加型授業に関する評価は大幅に改善されたと思われる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今年度は学生コメントは一つも無かったが、昨年まで何度か指摘されていた板書の字が小さいことや双方向型の授業の行い方などの問題はこれからも気を付けていきたい。現在は3人で担当しており、全員が同じように向上していけたらと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験の結果を100%とする総括的評価を実施する。試験問題数は各教員の授業時間数に従って配分を決定して評価する。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

最終的に全員が合格点に達したため、成績評価は適切であったと考えている。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

欠単位になった学生が1人もいなかったこと、4年生の科目であることと座学中心の科目であるため、今後も定期試験100%で評価を行っていく。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医薬品情報評価学	第4学年
科目責任者(記載者)	中川 直人	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品には物理化学的性質から適応症、用法・用量、副作用など多くの情報が含まれ、薬物療法にはこれらの情報と医療知識が不可欠である。医薬品の効果を最大化し副作用を最小化するには、患者情報とともに開発から使用までの情報を収集・整理・評価し、必要に応じて提供する能力が求められる。本講義では、薬剤師として必要な医薬品情報活動の基本を学ぶ。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

例年と比べ、学生の評価が芳しくないようである。この年度も反転授業の形式で行った。一講義のトピックについて、学生1名あたり作問1問を毎回の課題とした。作問内容に応じでルーブリックを用いて評価した。新しい試みをしたが、それがあまり学生に理解してもらえなかったようである。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

課題作成の学習効果は、客観的にあがらなかったため、次年度以降はこの対応は実施しないこととする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

予習：講義当日の数日前に講義関連動画を担当教員よりICTを介して配信する。それを視聴したうえで事前に確認テストを解答しておく。
講義中：ICT上でIn Class Quizを実施し、理解が浅い問題について解説を加える。
復習：ICT上のドリルを活用して必ず復習をすること。

2) 自己点検・評価

課題を作問することにより学習効果の向上は、外部模試の結果からは見出すことはできなかった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

課題作成のタスクは実施しないこととする。従来の反転授業がシンプルで理解度もよいことがよくわかった。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験100%。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率(%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

「勉強のためにも過去問の解答を開示して頂きたいです。」とのコメントがあるが、これは学部長の指示であり、私個人の判断ではない。学生にはその旨を伝えているが理解されていないようである。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

反転授業はすこしシンプルにして今後も続けていく。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医療統計学	第6学年
科目責任者(記載者)	熊本 隆之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床研究を行う上でデータ解析を適切な統計処理で解析出来る能力を身に着ける。また、臨床論文などの研究内容について、正しい方法論で正しく統計処理されているか、科学的根拠に基づいた批判的吟味を身に着ける。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

シラバス通りに授業を進め、予定通り到達目標をすべて達成した。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生から特に意見・要望等はなく、特段の問題はないと考えられる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

オリジナルテキスト (全76頁・穴埋め式) を中心に授業を進め、章ごとに問題 (別冊) と解説を扱った。

2) 自己点検・評価

オリジナルテキストはブラッシュアップを重ね、難解な内容を系統立て、できるだけシンプルに伝えられるよう工夫した。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

おおむね評点4以上かつ全体平均と同程度であり、特に問題ないと言える。自記式の記入箇所が分かりづらい所があったとの意見があったため、教室のどの位置からでもわかるよう工夫したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

シラバスで提示した通り、定期試験 (100%) とした。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

理解し覚えるべきことが膨大であるにも関わらず、全員が本試験1回で合格し、また半数近くの学生が90点以上を獲得していた。筆記問題に関しても大変よくできていた。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特記事項なし。卒業研究および国家試験対策等の忙しい最中によく学んでおり、学生を高く評価したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬剤学 I	第 2 学年
科目責任者(記載者)	渡邊 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬物と製剤材料の性質を理解し、応用するために、それらの物性に関する基本的知識、および物理化学的な評価法に関する知識を習得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

本科目の合格率は83.3%であり、授業中の学生の理解力および宿題の解答から判断すると国家試験に対する知識は持ち合わせていると考えられるが、昨年度に比べ不合格者が増えたことは懸念事項である。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生から特に不満がないことから、大きな変更は考えていない。前年度と同様とする。しかし、もう少し実務につながる例を入れながら講義を行う。自作の資料は、予習ができるように開始講義の1コマ前に配布するようにする。学生の理解力を把握するために、宿題を課す（成績には反映させない）。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書の内容を簡易的にした資料を作成し、毎回授業開始前に配布した。CBT や国家試験に問われる部分は赤字とし、重要部分を分かりやすいように工夫した。

講義:80%、演習:20%

2) 自己点検・評価

宿題を課し、解答方法を確認することで習熟度を確認しながら講義を行う方法は学生にとっても自分の理解度を確認するうえでとても重要であると考えられた。宿題をすることで、分からない部分を自分で解決し、解決できない場合は、教員に聞きに来ることもでき学生からも好評であった。本試験の平均点が67.0であり、特に問題がある講義等ではないと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。演習問題に関しては少し問題を入れ替える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験及び追・再試験の成績に基づき評価した。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

本試験の平均点が67.0点であり、本科目の合格率が 83.3% と昨年から比べ低くなった。成績の分布が二極化傾向にあり、勉強をやらない学生が多くなってきた感がある。この学生達をどのように勉強させていくかが今後の課題だと思っている。

学生からの講義への不満はないことから本科目の講義に関しては特段の問題はないと考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。

3人の教員で本科目を担当していることから、教員間での情報交換をもっと密に行う。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	製剤学	第3学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医薬品の用途に応じた適切な剤形を調製するために、製剤の種類、有効性、安全性、品質などに関する基本的知識と調製を行う際の基本的知識を習得する。また、医薬品開発と生産の実際を理解するために、医薬品創製と製造の各プロセスに関する基本的知識を習得し、社会的重要性に目を向ける態度を身につける。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

製剤学では、物理化学的性質と生物化学的性質を調べたうえで、製剤の特徴を理解し、さらには、製剤が一定の品質を有していることを保証するためには何が必要であるかを理解する上で重要な学問であり、製剤の種類、有効性、安全性、品質などに関する基本的知識、医薬品創製と製造の各プロセスを製剤化の方法と意義を客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことができていない学生が散見された。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生の授業評価から製剤学の授業に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が授業をまじめに受けるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下にならないように、教官側も注意を払うが、学生側もしっかりと復習を心がけるよう徹底したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義70%、演習30%の割合で授業を進めた。補助プリントとスライドを用いさらに分かりやすく板書を行いながら授業を行なった。また、授業の最後に当日の授業内容に関する演習問題を解きながら知識の定着を図ると共に、苦手な計算問題に多くの時間を割いた。

2) 自己点検・評価

物理化学および物理製剤学との講義と連携しながら、製剤の種類、有効性、安全性、品質などに関する基本的知識、医薬品創製と製造の各プロセスに関する基本的知識を習得させる。そのために教官側は分かりやすい授業を進めると共に、学生には予習と復習を徹底させる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、プリント、スライドと板書を併用させ授業を進める。当然のことではあるが授業には必ず毎回出席してもらい、その場で大まかに理解し、その日のうちに復習をさせる。また、各单元ごとに身近な話題や薬学との関連性について話し、学生の興味を惹きつけるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

授業の最後に当日の授業内容に関する演習問題を解くことにより評価した。また、演習問題の解答が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正答できるように誘導した。また、正答した場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。定期試験と追・再試験の結果を総合的に評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

単に○×だけの解答ではなく、計算問題、記述問題を多く取り入れて、学生のどの程度理解力しているかを重点にして試験問題を作成した。最終的な合格率が95%であったことから、学生は概ね授業内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

定期試験の成績に加え、当日の授業に対する理解度を問う小テストを加味して総合的に評価する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬剤学Ⅱ	第3学年
科目責任者(記載者)	杉野 雅浩	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬物の体内動態を予測するのに必要なADMEの知識を修得し、薬物の生体内運命を理解することを目標にした。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

定期試験、課題、アンケート結果から目標は概ね達成できたと考えられる。しかし、依然として学生間で学習意欲や知識習得の差が大きい。特に応用問題に対する正答率に顕著な差が見られた。昨年と比べ演習問題と課題を増やし知識の定着を狙ったが、応用面では不十分だったと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

ADMEに関する最低限の知識は修得できたと判断しているが、応用力に関してはまだ目標に到達していない。今後は演習問題の量と質のバランスを意識して課題として与え、適時個々へのフィードバックを行うことで、応用力の涵養を目指す。さらに、本科目の知識をどのように用いたら良いのか、簡単な具体例を示し、能動的な学修をしてもらえるようにする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義は主にプレゼンテーションと教科書を用いて進めた。講義資料には演習問題や国家試験の過去問題を内容毎に分けて載せ、直前で教えた内容の確認に用いさせ、学生自身が学習進捗状況を把握できるようにした。双方向性講義とはならないが、課題レポートは即日チェックを行い必要であれば再提出を促した。また、課題は成績に反映するため返却は行なわなかった。この課題を通して、学生の進捗状況の把握に努めた。

2) 自己点検・評価

復習としての教材提供は十分行っていると考えているが、個々の学生シラバスを読まないと予習・復習すべき箇所がはっきりしなかったと考えられる。これらを含め、やや学生とのコミュニケーションが不足したように感じた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

予習しやすいよう、講義資料をなるべく早めに配布できるように準備する。講義資料のタイトルページには、シラバスの内容を含め、シラバス活用を促す。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価として、課題レポートの提出状況から10%分の成績評価を行った。
総括的評価として、定期試験結果から90%分の成績評価を行った。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

課題は、学生自身の学習の進捗を把握するのに役立つ、また多くの学生にも復習を行うきっかけを与え良い影響をもたらしたと考えられた。さらに学生の理解度や説明不足の箇所の把握に大いに役立った。定期試験は知識をどのように用いたら良いか考えさせる問題を多く出題した。過去問と聞き方を変えると正答率が顕著に低下するため、応用力を付けさせるようにしたい。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

講義時間中に過去の定期試験の問題に触れられる機会を少し設けるようにしようと思う。正答率は低かった問題があることから、応用力が身につくには至らなかったのだと考える。今後は例題の量と質のバランスを考慮し、知識の定着と応用力の涵養をはかる工夫をしていこうと考えている。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬剤学実習	第3学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

製剤化の方法と意義を理解するために、薬物と製剤材料の物性、医薬品への加工に関する基本的技能を習得する。また、薬物の生物内運命を理解し、個々の患者の投与設計ができるようになるために、薬物の体内動態およびその解析に関する基本的知識を習得し、それらを応用する基本的技能を身につける。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

薬剤学実習は、製剤化の方法と意義ならび薬物の体内動態およびその解析に関する基本的知識を理解する上で重要な実習であるが、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことができていない学生が見受けられた。また、学生の能動的活動を基盤としており実習中に班員で話し合い実験回数の変更など「目的に合った方法にて結果を得ること」を習得することができていない学生も見受けられた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生の授業評価から薬剤学実習に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が実習をまじめに受け知識の向上に繋がるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下にならないように、教官側も注意を払うが、学生側も実習前の予習ならびに実習後の復習を心がけるよう徹底したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

実習70%、講義30%の割合で授業を進めた。実習書(奥羽大学薬学部物理系分野 編)を用い、さらに分かりやすく板書を行いながら実験操作の説明を行なった。また、実習の最後に当日の実習内容に関する口頭試問を行いながら知識の定着を図った。

2) 自己点検・評価

製剤学、物理薬剤学、生物薬剤学、薬物動態学との講義と連携しながら、製剤化の方法と意義ならび薬物の体内動態およびその解析に関する基本的知識を理解する上で実習の基本的操作を習得させる。そのために教官側は分かりやすい実験操作の説明を行うと共に、学生には予習と復習を徹底させる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、実習書に沿って板書を併用させ実験操作の説明を行う。当然のことではあるが実習には必ず毎回出席してもらい、事前に実習書を熟読してもらい当日の実習内容を大まかに理解し、その日のうちに実習内容に関して復習を徹底させる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

実習終了時に得たデータを教官と考察しながらディスカッションを行うことにより評価した。また、質問内容の解答が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正答できるように誘導した。また、正答した場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。実習態度、実習レポート、実習試験の結果を総合的に評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

レポート内容を精査し、単に実習書を書き写しただけでなく、しっかりと実験結果から考察が行えているか確認した。また、実習最終日には実習内容を理解したかどうか、単に○×だけの解答ではなく、計算問題、記述問題を取り入れて、学生のどの程度理解力しているかを重点にして試験問題を作成した。最終的な合格率が100%であったことから、学生は概ね実習内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

実習態度、実習レポート、実習試験の結果に加え、当日の実習に対する理解度を問う口頭試問を加味して総合的に評価する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬剤学Ⅲ	第3学年
科目責任者(記載者)	渡邊 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬物の体内動態解析能力を身につけ、それを基に薬物の投与設計への参加などの薬剤師業務を実施できる。医薬品開発業務特に、非臨床・臨床研究に参画できる能力を身につける。国家試験の問題に対応できる能力を身につける。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

本科目の合格率は95.4%であり、授業中の学生の理解力および宿題の解答から判断すると国家試験に対する知識は持ち合わせていると考えられ、概ね目標を達成したと考える。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生からの講義に対する不満は特になく、今年度も引き続き同様に行うものとする。薬物動態学に興味を持てるように、臨床薬物動態学の内容も増やす。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書の内容を簡易的にした資料を作成し、毎回授業開始前に配布した。CBT や国家試験に問われる部分は赤字とし、重要部分を分かりやすいように工夫した。
講義:80%、演習:20%

2) 自己点検・評価

宿題を課し、解答方法を確認することで習熟度を確認しながら講義を行う方法は学生にとっても自分の理解度を確認するうえでとても重要であると考えられた。宿題をすることで、分からない部分を自分で解決し、解決できない場合は、教員に聞きに来ることもでき学生からも好評であった。本試験の平均点が64.0であり、昨年より6点ほど下がったが、特に問題がある講義ではないと考える。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。演習問題に関しては少し問題を入れ替える。臨床的な内容も入れることにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験及び追・再試験の成績に基づき評価した。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

本試験の平均点が64.0点であり、本科目の合格率は95.4%であることから概ね科目の到達目標を達成した。しかし、成績の分布が二極化傾向であり、不得意の学生に対する対応が必要と考える。学生からの講義への不満はないことから本科目の講義に関しては特段の問題はないと考える。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

講義の復習としては宿題の解説を重点的に行うことで着実に学生の知識として植え付けていきたい。宿題に関しては、今後も続けていく。実例や実際に体内動態解析をする機会(見せるだけでも)を設け、興味を持てる授業にしたいと思う。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬物相互作用学	第3学年
科目責任者(記載者)	渡邊 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬物の生体内運命を理解し、個々の患者の投与設計ができるようになるために、薬物の体内動態およびその解析に関する基本的知識を習得し、それらを応用する基本的技能を身につける。
特に、TDM の意義、治療薬物投与設計および薬物動態学的相互作用に関する基本的事項を修得する。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

本科目の合格率は93.4%であり、授業中の学生の理解力および宿題の解答から判断すると国家試験に対する知識は持ち合わせていると考えられ、概ね目標を達成したと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生から特に不満がないことから、大きな変更は考えていない。前年度と同様とする。
もう少し実務につながる例を入れながら講義を行う。
学生の理解力を把握するために、宿題を行う (成績には反映させない)。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書の内容を簡易的にした資料を作成し、毎回授業開始前に配布した。CBT や国家試験に問われる部分は赤字とし、重要部分を分かりやすいように工夫した。また、投与設計に必要な重要な公式等はその解法や使用方法を教科書より丁寧な内容とし配布した。
講義30%、演習70%

2) 自己点検・評価

宿題を課し、解答方法を確認することで習熟度を確認しながら講義を行う方法は学生にとっても自分の理解度を確認するうえでとても重要であると考えられた。宿題をすることで、わからないところを自分で解決し、解決できない場合は、教員に聞きに来ることもでき学生からも好評であった。その結果、平均点が69であり、昨年とほぼ同じであり、特に問題がある講義等ではないと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。
演習問題に関しては少し問題を入れ替える。
実務の内容を取り入れる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験及び追・再試験の成績に基づき評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

本試験の平均点が69点であり、本科目の合格率は93.4%であるため、概ね科目の到達目標を達成した。
学生からの講義への不満はないことから本科目の講義に関しては特段の問題はないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。
2人の教員で本科目を担当していることから、教員間での情報交換をもっと密に行う。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬物送達システム	第3学年
科目責任者(記載者)	渡邊 哲也	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

DDS製剤の使用において、その目的と製剤学的特徴を理解したうえで使用する医師、看護師そして患者などに対して適切な情報を提供できる知識を身につける。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

本科目の合格率は 93.4% であり、授業中の学生の理解力および宿題の解答から判断すると国家試験に対する知識は持ち合わせていると考えられ、概ね目標を達成したと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生からの講義に対する不満は特にないことから、今年度も引き続き同様に行うものとする。
薬物送達システムに興味を持てるように、上市されている製剤の内容も増やしていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

小テストまでは行っていないが、学生の講義内容の理解力を計るために薬剤師国家試験問題形式の問題を講義の合間に入れていく。
毎回講義に沿った宿題を課した。宿題を課すことで学生はその課題を解くために居室に来ることが多くなった。
講義80%、演習20%

2) 自己点検・評価

宿題を課し、解答方法を確認することで習熟度を確認しながら講義を行う方法は、学生にとって理解度を確認するうえでとても重要であると考えられた。宿題をすることで、わからないところを自分で解決し、解決できない場合は、教員に聞きに来ることもでき学生からも好評であった。その結果、本試験の平均点が 73 であり、特に問題がある講義等ではないと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特に学生からの不満はないことから、例年通りとする。演習問題に関しては少し問題を入れ替える。
臨床的な内容も入れることにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験及び追・再試験の成績に基づき評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

本試験の平均点が 73 点であり、本科目の合格率は 93.4%であったことから概ね科目の到達目標を達成した。
学生からの講義への不満はないことから本科目の講義に関しては特段の問題はないと考える。
国家試験問題に DDS 実例が多くなってきたことから、DDS 製剤の臨床の実例を講義に入れるようにする。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

薬物送達システムは薬剤学全般を理解していないといけないため、物理薬剤学、生物薬剤学、薬物動態学の講義から薬物送達システムを意識し、科目間の連携をうまくやっていけるようにすることが必要。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬物代謝学	第3学年
科目責任者(記載者)	小池 勇一	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

有機化学を基礎として、薬物代謝の観点から薬物代謝酵素の性質および酵素反応機構を理解し、臨床における薬物治療が薬物代謝に関係していることを、ヒトと薬物の相互作用の観点から学ぶ。また、薬物代謝と薬効・毒性の発現、変化について理解を深める。さらに、薬物動態学、生物薬剤学、薬物治療学との関連性について、理解を深めることを目標とする。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

当該科目の講義内容に対する理解度の評価に関しては、定期試験の成績を主として評価に用いた。その結果、定期試験の合格率は100%であったため、おおむね達成できていると考えられた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

毎回の講義時に、基礎知識の理解度を確認するために特に必須と思われる点について、学生に質問を行い、双方向性について積極的に検討していきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

授業は全て講義であり、指定教科書として、「薬物代謝学」第3版、加藤隆一、山添康、横井毅編 東京化学同人を、また、参考書として「医療薬物代謝学」鎌滝哲也、高橋和彦、山崎浩史編 医学評論社を用いた。さらに、毎回の講義には、重要な点はパワーポイントファイルで説明し、補足講義を板書で説明した。また、毎回1～2問の復習問題を提示し、次回講義時に解答を提示することにより、理解度をチェックした。

2) 自己点検・評価

授業はよく準備がなされていたや、シラバスに沿って、系統だてで行われていたの項目が評価が高かったが、効果的に学生の参加を促す双方向性についてはやや評価が低かった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

講義内容は薬学教育モデル・コアカリキュラム(新カリキュラム)に準拠しているため、教育達成目標は今年度と変化はないが、講義終了後の復習問題をより吟味して提示ならびに解説をおこなうことと、双方向性についてより推進していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

講義時間に制約があることから、形成的評価は実施せず、定期試験の結果(100%)により総括的評価をおこなった。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

当該科目の講義内容に対する理解度の評価に関しては、定期試験の成績を主として評価に用いた。その結果、定期試験の合格率は100%であったため、おおむね達成できていると考えられた。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

「授業は理解しやすいように工夫されていた」の項目が全体よりやや低めに評価されているので、来年度はパワーポイントファイルを中心として、よりわかりやすく講義を行うこととしたい。また、要点に関しては、重要な項目は教科書の対応するページ数を示し、理解しやすくするようにしたい。また、できるだけ、聞き取りやすいよう、話し方も工夫したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	セルフメディケーション学	第3学年
科目責任者(記載者)	伊藤 鍛	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

要指導医薬品・一般用医薬品及びセルフメディケーションに関する基本的知識を修得する。併せて、セルフメディケーションでの薬物療法実施に必要な情報を収集するための基本について学習する。以上が本科目の到達目標です。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

おおよそ達成できていると考えています。理由は、コアカリに準拠していることと定期試験結果から上記の目標がおおよそ達成できていると判断したからです。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による評価に関しては、4. 教員の話し方は聴き取りやすかった 以外は全体平均程度もしくはそれを上回っており、上記自己点検・評価と併せて考え、大きな改善は必要ないと考えています。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義・演習等の割合は講義が100%である。授業は教科書として「OTC医薬品学」(南江堂)を用いました。双方向性方策については、授業時に机間巡回を行い、質問をなげかけ発言等を促すなどの工夫をしました。また、講義終了後に質問を受付対応しました。

2) 自己点検・評価

授業時間数の制約もあり、概ね問題点はないと思います。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による評価に関しては、4. 教員の話し方は聴き取りやすかった 以外は全体平均程度もしくはそれを上回っていた。また、コメントも要点が分かったなど、ポジティブなものが散見された。上記自己点検・評価と併せて考え、聞き取りやすい発音を日常から心掛ける以外は大きな改善は必要ないと考えています。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価は時間的な問題もあり実施していません。総括的評価については授業への取り組み状況10%、小テスト結果30%、定期試験結果60%の割合で100点満点にて評価し、65点以上を合格としました。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

全員合格の結果が得られ問題はないと考えます。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による評価に関しては、4. 教員の話し方は聴き取りやすかった 以外は全体平均程度もしくはそれを上回っていた。また、コメントも要点が分かったなど、ポジティブなものが散見された。上記自己点検・評価と併せて考え、聞き取りやすい発音を日常から心掛ける以外は大きな改善は必要ないと考えています。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	健康食品学	第3学年
科目責任者(記載者)	佐久間 勉	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

人々の健康増進、公衆衛生の向上に貢献できるようになるために、現代社会における疾病とその予防、栄養と健康に関する基本的知識、技能、態度を習得する。併せて適切な薬物治療および地域の保健・医療に貢献できるようになるために、要指導医薬品・一般医薬品およびセルフメディケーションに関する基本的な知識の習得を目標とする。以上を一般目標とし8つの到達目標を設定した。7回の講義を3名の教員で分担した。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

受講生57名の内56名が単位を取得でき、43名(77%)の受講生が優以上の成績であることから目的が十分達成されたと判断する。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

2023年度は科目名が「サプリメント概論」から「健康食品学」に変わり、必修科目から選択科目に変更となった。履修可能な3年生58名中57名(98%)が選択した上、授業評価項目7「知的好奇心が刺激され興味を高めてくれた」、項目10「この授業の関連分野に関心を持つことができた。」が全体平均より高く、科目の到達目標に対する学生の理解が高いと判断できる。故に2024年度も同じ到達目標とする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義が100%である。指定教科書・参考書以外にプリントも配布した。内容は保健機能食品に関する資料、教科書のまとめ、練習問題など(佐久間)、内閣府食品安全委員会の健康食品に関する報告書(熊本)など。健康食品素材の調査方法・最近の食品素材研究の動向、健康食品の製造から販売まで(村田)など。授業中や終了前に学生に問いかけをし、学生の発言・参加を求め双方向性の確保に努めた。

2) 自己点検・評価

担当3教員がそれぞれ工夫を凝らしたプリントを準備し熱心に講義している。授業評価項目10項目中9項目は全体平均より科目平均が高く、唯一低い項目(項目1 授業はよく準備されていた。)も差は0.01である。また、科目平均と全体平均の差は全項目において2022年度よりも拡大しており、教育方法に関し学生の満足度は高いと判断できる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

2)に記した通り現状でも学生による評価は非常に高い。しかし、自由記述欄には一部の教員の話し方について問題点が指摘されており、2024年度はその点の改善に努める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価は実施していないが、毎回の講義の終わりにプリントに記した練習問題を解かせ理解度向上につとめた(佐久間)。期末試験成績を100%とした総括的評価を実施した。3名の教員で分担しており、コマ数に応じて期末試験の点数を配分した。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

受講者57名中1名が試験を欠席したため不合格となった。試験を受験した学生は全員合格した。形成的評価は実施していないが、総括的評価で受験者全員合格できており、成績評価に特段問題はないと判断する。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

形成的評価の実施を検討する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医療薬学総論	第4学年
科目責任者(記載者)	中川 直人	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

これからの薬学教育では、科学技術の進歩や医薬分業の進展に対応し、薬剤師を目指す学生が基礎知識・技術に加え、倫理観、課題解決能力、実践力を身につけることが求められる。そのため、大学は教養教育の充実とモデル・コアカリキュラムに基づく教育を進め、臨床現場での長期実務実習を実施する必要がある。さらに、医療機関や行政の協力を得て指導体制や教育施設を整備し、医療薬学教育を充実させることが重要である。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

回収率が18.4%と低いため、学生から適切に評価されているかどうかは確実には言えないと思われる。しかし、評価項目5は平均よりも上回っていることは、スモールグループディスカッションを評価していると考えられる。よって、課題解決能力や実践力についてはある程度達成されていると考えられる。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

今後も「医療人の心構え」についてもフォーカスしてソフト面を改善していきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

本学の理念・目的「高度な専門知識と技術を備えた人間性豊かな人材を育成する」を目標として、モデル・コアカリキュラムを基本とし授業、SGD、PBLを展開する。本科目は実務系教員によるオムニバス形式をとっている。

2) 自己点検・評価

SGDやPBLは実践的な内容で実施している。特にPBLでは、医薬品の副作用を事前に調べてくる必要があるが、医薬品情報を調べる方法を十分に教えていない時期でもあるため、さらなる学習効果を得るためには、より早い時期に医薬品情報検索方法の教授が必要である。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

医薬品情報検索を早めに行い、PBLの時期をすこし遅めにすると良いと考えられる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期テスト（40%）、授業に関するレポート（40%）の成績（80%）および授業に対する取り組み態度（20%）から総合的に評価する。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

この科目は、レポートの比重を大きくとっている。ルーブリックを学生にも提示し、締め切りまでに提出すると1点加点する方法を取った。締め切りを超えて提出する学生がほとんどいなくなり、ルーブリックの効果を実感している。また、レポートを構成的に書くことを指導しているが、レポートの書き方について十分に理解されていない学生も散見された。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

レポートの比重が大きいことの周知および構成的にレポートを書く考え方の教授が必要である。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬事関係法規	第4学年
科目責任者(記載者)	佐藤 亜希子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

社会において薬剤師が果たすべき責任、義務等を正しく理解できるようになるために、薬学を取り巻く法律、制度、経済及び薬局業務に関する基本的知識を修得する。患者の権利を考え、責任をもって医療に参画できるようになるために、薬剤師法などの医療及び薬事関係法規、制度の精神とその施行に関する基本的知識を修得し、それらを遵守する大切さを知る。以上の目標は達成できたと思う。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

授業終了後に質問に来る受講生が結構いた。その質問内容や定期試験の結果から、薬剤師に関連する法の構成を説明でき、創薬から育薬までに関わる主な薬事関係法規を列挙し、薬剤師法の重要な項目を列挙し、医療法や薬剤師関連部分について内容を説明できるという目標は達成できたと思う。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業終了後に質問に来る受講生が結構おり、興味をもって受講してもらえたことが伺えた。薬事関係法規の試験問題は用語を丸暗記すれば解けるように思えるが、「なぜその答えなのか」という根拠はすべて法令の条文にあるので、条文を読みこなせる読解力が必要である。条文(教科書)を読みこなすことが大変そうな意見もあったが、条文(教科書)は読まざるを得ないので頑張ってほしい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

与えられた授業時間が90分×7コマの授業では、時間が足りない。休み時間中に板書を始めて授業時間を有効に使えるよう努めた。板書だけでなく、補足資料の配布や教科書に文言を書き込ませる方法等も交えてポイントを教えた。また、欠席を重ねる受講生への対策としては、出席を促すメールを送り出席するよう呼びかけた。

2) 自己点検・評価

内容が盛りだくさんだったが、受講生はよく取り組んでいたため、良かったと思う。教育者側の自己研鑽も重要と考え、法律の専門家などのセミナーを積極的に受講するなど知識のアップデートを欠かさず行っている成果が教育法に現れていると思われる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

条文を読む作業を通して要点を掴むことが重要なので、教科書中心の授業を変える必要はないと思う。教科書の内容を補足する資料を配布したり、重要なポイントを板書したりと、授業毎に強調して教えていたので、特に改善方策はないと思う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験 100%

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

全員が本試験を受験し、尚且つ合格率 100% だったので、特に問題ないと思う。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

自由記述に「個人的な確認事項を全員の前で名指して言うのをやめてほしい」とあったが、全く心当たりがないので、他の教員へ向けての意見と捉え、この報告書に載せておく。ポイントを押さえて教えたことが好評であり、授業中の話しかたも聞き取りやすかったという評価が成績評価にもつながっていると思うので、特に改善策はないと思う。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	漢方医学	第4学年
科目責任者(記載者)	村田 清志	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

漢方医学、漢方薬の特徴、および漢方医学の基本概念について用語を含めて解説した。漢方処方分類を配合生薬との関係から説明した。日本薬局方に収載されている漢方薬の適応する証、疾患について説明できるように、代表処方と類似処方をまとめ、キーワード化して説明し、また漢方薬の副作用について解説を行った。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

毎回、ピックアップした漢方薬処方を、記述式の知識確認シートにおいて、生薬名、効能効果、生薬の特徴となる有効成分、化学構造式などを学生が記載し、小テストとして回収した。漢方医学、漢方薬の特徴および漢方薬の副作用について解説できた。日本薬局方に収載されている漢方薬の適応する証、疾患、漢方薬の副作用についても説明できた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

毎回の小テスト(知識確認シート)は学習方法として適切であった。解答配布後に未記載の問題を希望する学生がいた。漢方薬をキーワード化して説明するようにしたい。一つの問題の質問方法を変えたり、選択肢を変えたり、いろいろな角度から繰り返し学習できるようにしたい。イメージがつきやすいように、写真、画像、配合生薬の見本、漢方薬資料を多く使っていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

毎回の授業で復習を行い、重要な漢方処方を分類して説明し、毎回ピックアップした漢方処方を記述式の知識確認シート(小テスト)で、生薬名、効能効果、特徴となる生薬の有効成分、化学構造式などを確認している。また、同時に覚えるべき類似の漢方薬をキーワードとして理解できるようにして知識の定着をはかっている(7回)。

2) 自己点検・評価

診断体系分類により30種類前後の漢方処方を構成生薬とともに解説できた。漢方の用語、適応、副作用を項目ごとにまとめ、知識確認シート(小テスト)により学習知識のまとめを実施できた。漢方医学をキーワードでまとめて覚えることができるように説明した。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業資料による講義に加えて、よく使われる漢方薬の添付文書による、効能効果、副作用を、説明した方が良いと感じ実践するようにしている。類似処方について、構成生薬による比較を行うと記憶に残るので、繰り返し講義と併せて考えていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

毎回行う記述式の知識確認シートによって理解度を評価した(7回)。知識確認シートの記載方法・取り組みを把握することで総括的に評価を行った。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

毎回の資料による復習で繰り返し学習したあと、資料を使いながら知識確認シートでさらに復習することができたと考える。学生は、キーワードでの分類、効能効果での分類資料があった方が良く考え、随時資料のアップデートを継続している。漢方薬と構成生薬とのつながりについて、学生が資料がなくても把握できるように繰り返し学習を行いたい。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

知識確認シートから判断すると、漢方薬と構成生薬・薬用植物の関連性は、習熟度に個人差があるため、小テストを活用しながら、繰り返し学習ができること、また、イメージがつきやすいように、写真、画像、配合生薬の見本、漢方薬資料を多く使っていきたい。薬用植物学、生薬学、健康食品学、漢方医学、セルフメディケーション、天然物化学はすべて連続した内容であり、関連付けていくための方策と種になることを提供したい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬局管理学	第4学年
科目責任者(記載者)	伊藤 鍛	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

地域薬局における施設・設備、書類、スタッフ、商品の管理について学習し、それに係わる法規・制度を理解する。地域薬局における保険調剤・一般用医薬品、その他の商品販売について学習し、それに係わる法規・制度を理解する。地域薬局業務に係わる調剤報酬・健康保険制度および介護保険制度の仕組みを理解する。以上を到達目標としています。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

おおよそ達成できていると考えています。理由は、コアカリに準拠していることと定期試験結果から上記の目標がおおよそ達成できていると判断したからです。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生による授業評価は4.教員の話し方は聴き取りやすかった の項を除き、ほぼ平均程度だった。またフリーコメントも要点が明確などポジティブな言葉もあり、大きな改善は必要ないと考えました。しかしながら、聞き取りやすい発音を心掛ける等改善が必要と思っています。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

演習・講義等の割合は講義100%です。授業資料としては教科書は指定せず、教員が独自に作成した資料をプリントして学生に配布し授業に用いています。特に統計資料を読み解く力を養う観点から、厚生労働省等から配信されている医療統計データもダウンロード・印刷して授業資料としています。また、双方向性方策の項に関しては机間巡回を行い、質問をなげかけ発言を促す等の工夫をした。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価は4.教員の話し方は聴き取りやすかった の項を除き、ほぼ平均程度だったことから、概ね学生さん視点での平均的な質の授業提供ができたと考えています。一方、聞き取りやすい発音を心掛ける等改善が必要と考えています。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

日常的に、聴き取りやすい話し方を心がけ、随時、訓練を行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的評価は時間的な問題もあり実施していません。総括的評価については授業への取り組み状況10%、小テスト結果20%、定期試験結果70%の割合で100点満点にて評価し、65点以上を合格としました。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

全員合格できたので問題ないと考えています。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生からの授業評価に関しては前述の通りです。成績評価については全員合格ですので現行から変更なしで臨みたいと考えています。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	社会薬学総論	第6学年
科目責任者(記載者)	志村 紀子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、憲法と薬事関係法規との関係、医薬品医療機器等法における医薬品等の定義、規制対象、薬局開設、医薬品等の製造販売業等、医薬品の承認審査システムや市販後調査制度、医薬品副作用被害救済制度について学び、薬事行政の仕組みについて学ぶ。また、麻薬及び向精神薬取締法、覚醒剤取締法等管理薬についての法令や薬剤師法、医療法の中での薬剤師の任務について学ぶための講義を行った。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

「授業はシラバスに沿って、系統だっで行われた」については3.96の評価が得られていたが、「効果的に学生の参加を促した」が評価は低く、2.68であった。そのため、学生に何か課題を与え発言させるなどの工夫が必要である。その他の評価については3以上4未満であり、評価は「普通」であったため、授業の工夫を考える必要がある。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

「授業はシラバスに沿って、系統だっで行われた」については4以上の評価が得られていたが、「効果的に学生の参加を促した」が評価は低く、2.66であった。そのため、学生に何か課題を与え発言させるなどの工夫が必要である。その他の評価については3以上4未満であり、評価は「普通」であったため、授業の工夫を考える必要がある。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書で行ったため、追加の資料は作成していない。講義が100%であり、双方向方策は行っていない。

2) 自己点検・評価

法律に関する授業は、あまり工夫ができない。また、授業の内容自体あまり学生にとって興味のない科目であるという本質的な問題がある。教員の努力だけでは理解させるのは難しい。そのため、話し方などを工夫して強調するなどメリハリのきいた授業が必要である。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

法律は社会で仕事をする上で、科学的知識以上に重要であることがある。しかしながら、学生にとっては、興味のない分野であるため、重要事項については、話し方など工夫して強調するなどする以外に方法はないと考えられる。頭に残る話し方、国家試験出題事項との関連、法律の事例などについて説明を交えながら、授業を進めることが必要である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

成績評価は、定期試験100%とした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

過去の国家試験問題から出題したこともあり、合格率は100%と高かった。本来であれば国試対策の授業とは異なるため、例えば、その法律が作られた背景や法律の条文に関する問題、どのような仕事に必要なかなど、もっと基本的な問題を出すべきであると考えられる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

「授業はシラバスに沿って系統だっで行われた」以外の評価については、3点台で「普通」とされ、低かった。これは、やはり科目の本質的な問題であると考えられる。しかしながら、過去の国家試験問題から出題した定期試験については、合格率高く、学生が単に過去問題を暗記しているだけの状態が示唆される。今後は授業内容に沿ったオリジナルな問題も解けるように授業をすすめる必要がある。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	処方解析学	第4学年
科目責任者(記載者)	中川 直人	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬物療法には医師の処方が必要で、薬剤師は処方箋から患者の状態や医師の意図を推測し、適切な薬物治療を実践する役割を担う。本講義では、これまで学んだ薬学の知識を活用し、様々な処方箋を解析するスキルを修得することを目的とする。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

本科目は、「難しい」と感想を述べる学生が多い。それは、罹患患者の多い疾患（高血圧、糖尿病、脂質異常症、心不全など）の治療ガイドラインを理解する科目が事前にないためであると考えられる。そのため、本講義内で治療ガイドラインの資料を入れて教授しているが、コマ数が不足していると実感する。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

教科書の変更も必要かもしれない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

予習：教科書の該当単元をよく読み、ICT内の「事前確認テスト」を受けてから講義に臨むこと（60分）。理解できない記述は調べておくこと。

講義中：ICT上でIn Class Quizを実施し、理解が浅い問題について解説を加える。

復習：講義で用いた処方例を基に、解析内容を資料や教科書を見ずに口頭で説明できるように努めること。（30分）

2) 自己点検・評価

学生の準備状況はICT上で確認でき、おおむね良好であった。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

教育方法はこのままで進めていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験の成績100%。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

治療ガイドラインに基づいて処方解析することの難しさが合格率に反映していると考えられる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

定期試験は、正解を「1つ選べ」の問題に統一することにしたい。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学演習Ⅱ	第2学年
科目責任者(記載者)	志村 紀子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

上級学年で受講する薬学専門領域を修得するためには、各学年で学習する薬学基礎科目や薬学専門科目に関する知識を整理し、かつ確実なものとして理解しておく必要がある。本演習では、2年次で学んだ薬学基礎科目及び薬学専門科目について、演習中心の講義を実施し、練習問題を通して解答を導くまでの客観的かつ論理的思考能力を養うとともに、2年次以降で行われる薬学専門科目の受講に備える。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

2年次で学ぶ薬学基礎科目及び薬学専門科目について、演習を通して基本事項に関する問題を解くための論理的思考能力の向上を目標とし、2年次科目担当教員が各1コマずつ演習授業を行った結果、学生の評価が3.33～4.00となった。そのため目標の達成状況は概ね良好であったと考えられる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

全ての評価項目において学生の評価が3.33～4.00と普通以上の評価であったため、特に改善方策はなく、例年通りの演習授業を行う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

当日の講義範囲については、予め担当教員名と共に掲示し、その範囲の予習を必ず行うよう指導した。講義・演習では、教員による重要事項の説明と一定時間での問題の解答及びその解説が行われる。学力養成のため、講義でわからなかったところを教科書や参考書、ノートなどで理解するよう努めさせる。理解できなかったところについては、教員に質問するなどし、その日のうちに理解することに努めさせる。

2) 自己点検・評価

各教員がわかりやすく演習講義を行ったためか、すべての評価項目について学生の評価は3.33～4.00となり普通以上の評価であったため、この教育方法が概ね効果的であると思われる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生によるすべての評価項目が3.33～4.00と普通以上であったため、特に改善方策はない。例年通りの方法で授業を行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

成績評価は定期試験100%とした。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率は1次試験で38%、2次試験で13%となった。本年度は試みとして、1年次からの薬学基礎科目も試験の範囲としたため、かなり成績が悪かった。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

1年次からの科目の内容を学生が忘れていたため、成績が悪かったと思われるため、日常的に復習させる必要があると考えられる。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学演習Ⅲ	第3学年
科目責任者(記載者)	佐久間 勉	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

3年次で学ぶ専門科目について演習を通じて基本事項に関する問題を解くための論理的思考能力の向上を一般目標とし、3年次に履修する薬学専門科目の総復習なので、学習者は演習を通じて自分の弱点をみつけ、速やかにそれを克服するよう自己研鑽に励むことを到達目標とした。総括的評価において、履修者66名中合格者は32名(49%)であり、約半数の学生においては到達目標が十分に達成できているとは言えない現状にある。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

2023年度より薬学演習Ⅲの試験範囲に、薬学演習Ⅰ、Ⅱの試験範囲が含まれることになった。その結果学習すべき範囲が大幅に拡大された。それに対し学生の姿勢は当該学年科目のみであった昨年度までと大きく変わらなかったと推測される。講義は期間が1週間の集中講義となったが、内容は前年度と変更はなかったと推測され、学生側の要因が前年度合格率76%から低下した理由と考えられる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

試験では1～3年次の全58科目から出題されるのに対し、集中講義は3年次前期に開講される12科目に限定された。授業評価の自由記述欄でも、薬学演習Ⅰ、Ⅱの講義も受講したかったとの希望が複数人より記されており、この点への対処が急務である。集中講義は薬学演習Ⅰ～Ⅲが同時期に開講されるため他学年の講義を受講することは難しい。そこで2024年度は3年生に1、2年次科目の講義資料を閲覧できるようにした。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

100%演習である。集中講義では12人の教員が分担している。教科書はコアカリ重点ポイント集とコアカリマスターを指定しているが、教員によってはそれら以外の配付資料や独自の練習問題などを利用している。授業の中での教員による解説の時間と学生が問題を解答する時間の割合は教員ごとに異なる。

2) 自己点検・評価

授業評価では全10項目全てにおいて科目平均が全体平均より低い値となった。中でも項目1(授業準備)と2(系統立った講義)が他の項目より低い。項目2に関しては本科目が12人の教員によるオムニバス形式であり、シラバスには具体的な講義内容を記載していないことが一因と推測する。項目1に関しては、教員間の演習のやり方の違いのため、学生がそのような印象を抱いた可能性がある。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

本演習では15科目の3年次開講専門科目を集中講義の形で実施している。科目それぞれに最も効果的な教授方法があると考えられるため、教授方法の共通化は到達目標の達成率向上に直接つながらない可能性がある。故に、やり方の共通化は求めず、各教員に科目の特性に合わせた教授方法の改善を検討するよう指示する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

本演習では12回の演習を実施しているが各担当教員は1回ずつ担当しているのみである。そのため形成的評価は実施していない。試験を100%とした総括的評価を実施している。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格者を踏まえて評価する)

本演習の総括的評価における合格率は49%であり、到達目標が十分達成できているとは言いきれない現状にある。しかし、多数の教員によるオムニバス形式で実施しているという科目の特性上成績評価において形成的評価は実施しにくく総括的評価のみとなっている。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業の中で C-learning を利用するなどしてなるべく形成的評価に近い評価を実施し、学生の授業理解と問題を解く力の向上を目指す。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学演習Ⅳ	第4学年
科目責任者(記載者)	鈴木 康裕	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

4年開始時における3年生までの知識は、約20%の学生しか定着していない。特に留年生においては低い。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

病院薬局実務実習で必要とされる薬学専門科目全般に関する基本事項の要点を説明できる学生が、85%程度であった。しかしながら、共用試験において合格になった学生は8割程度であった。留年生を除いた学生のほとんどは目標達成できていると考えられるが、留年生においてはできていない状況である。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

国家試験合格を見据えた目的であったが、学生より教員によって統一されていないとの指摘があった。目標の共有を教員間で図っていききたいと思う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

4年生までの専門知識を網羅するように学部教員でそれぞれの専門科目で分担して行った。演習 (10%)、教員による演習・講義 (90%)で実施した。教員により様々な資料を用いており、特に統一はしていない。週1回程度実施した演習や授業に対する質問は、各担当教員により対応した。特に留年生に対しては、他の科目の授業がない前期に補講を行った。

2) 自己点検・評価

おおむねうまく機能していると思われる。しかしながら、共用試験を意識した授業になりがちのため、共用試験において高得点で合格できるように学生および教員で周知する必要があると思われる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

今年度より講義を後期のみとして回数を減らしたため、教員と直接会う機会が減ったことが考えられる。解説講義等を増やして年間を通して学生が質問しやすい環境作りを行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

前期においては、週1回程度の各科目における形成的評価を行った。後期においては、月1回程度の全科目を範囲とする形成的評価を行った。総括的評価は、共用試験と類似した出題数で実施し、最終的な評価を行った。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

年間を通しての科目であるが、後期授業開始時～共用試験直前から本格的に勉強する学生が多かった。特に形成的評価では、どの評価においてもある程度の水準に達していない学生は、総括的評価においても基準に達していなかった。4年次留年が決定した学生や留年生が不合格者であった。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

実務実習に十分に対応できる学生を目標とし、年度始めの形成的評価においても合格基準に達するように学生に意識づける。到達できていない学生には積極的に教員に質問するように促していく。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学演習V	第5学年
科目責任者(記載者)	中川 直人	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

第5学年では、4年次までに大学で学んだ知識・技能・態度と、5年次の「病院・薬局実務実習（合計22週間）」での実務実習を関連させ総合的に理解し、修得する学年である。薬学演習Vは、代表的8疾患について薬理作用の観点および薬物治療・実務の観点からより深い理解を達成することを目標とする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

回収率が9%とかなり低く、適切な学生による評価とはなっていないと考えられる。よって、自己点検・評価はこの年度は記載しないこととする。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

テストの範囲はしっかり伝達するようにする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

代表的8疾患について、薬理作用の観点および薬物治療・実務の観点から、薬学生として必要な知識について説明できる。

2) 自己点検・評価

回収率が9%とかなり低く、適切な学生による評価とはなっていないと考えられる。よって、自己点検・評価はこの年度は記載しないこととする。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

C-learningのドリルの出題形式について、次年度は全問題を学生が触れることができるように工夫する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

試験を2回（一次、二次試験）行い、原則として得点率65%以上を合格とする。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率（%）

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

6年生進級に向けた準備は整えることができたと思う。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

C-learningの活用方法の向上を図る。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	薬学演習Ⅵ	第6学年
科目責任者(記載者)	佐藤 栄作	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

薬剤師として必要な自発的かつ継続的な自己研鑽力を身につけるためには、6年次までに学習したすべての薬学専門科目に関する知識を再確認し、統合的に体系化付ける必要がある。本演習は、「6年次までの薬学専門科目および薬学応用科目全般にわたって総復習し、薬剤師として身につけておくべき知識を確実に習得すること」を目標としている。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

授業はスケジュール通りに実施できた。本科目の単位認定基準は、薬剤師国家試験の合格率とも関連するものであるが、合格率が43.2%であったことから、十分な目標を達成できていない。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

学生アンケートの回答率が8%であるため参考にはできないが、授業と並行して実施した科目別試験（全21回）は、学生の理解度を上げる手段とはなっていない。ただし、必要な知識について、深さと範囲をきちんと理解できていない学生がまだ多いので、なぜこのような演習が必要なのかも含めて周知徹底が必要であると考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

授業は、オムニバス形式により8教科を講義100%で実施した。6～9月前半まで知識の総復習の時間とし、9月中旬以降は、問題演習と解説を中心に実施した。1週間分の授業内容は、前週の金曜日に学生に掲示し、講義内容に関する資料は、担当教員各自でC-Learningで公開し、また、教員によっては授業後の補足資料や動画を公開したり、小テストやドリルを実施するなどして、復習を促した。

2) 自己点検・評価

本学学生は、国家試験において比較的簡単な問題を解けない場合があるため、今年度は各科目において基本的かつ重要な問題について知識不足とならないように心がけ、ある程度の手ごたえは感じられた。ただし、学生個々の授業への取り組み方がそろっておらず、学生によっては教員の作成した資料が消化不良となっていた可能性があった。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

4月のガイダンス時に教育方法について学生にわかりやすく伝える。復習が不十分である学生に対してのサポート体制が必要であると思われる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

形成的な評価は実施せず、シラバスの記載通り中間試験、一次試験、二次試験の結果を総合的に判断し合否を決定した。今年度は、不合格者に対してさらに最終試験を実施し、正答率65%以上の学生を追加合格者とした。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格者を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格者を踏まえて評価する）

中間・一次・二次試験の難易度は例年通りであった。最終的に、97%の学生を合格としたが、薬剤師国家試験の合格率が43.2%と大きく乖離したため、最終試験の難易度の設定が不十分であったと思われる。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

中間・一次・二次試験の内容・範囲・難易度については、現状のままで問題ないと思うが、本科目の合格率を上げるためには、学生の学習意欲を高める工夫が必要である。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	放射化学実習	第3学年
科目責任者(記載者)	志村 紀子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標は、1. β 線、 γ 線の検出原理と測定法について説明できる。2. GM測定装置を用いて β 線を測定できる。3. γ 線スペクトルの解析を行い未知核種の同定ができる。4. 自然計数率について説明できる。5. 非密封放射性同位元素の取扱いについて説明できる。6. 放射線管理区域の入退出の規則を説明できる。7. 放射性廃棄物の処理方法について説明できる。としており、この目標に沿って実習を行った。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

目標の1と2に関しては、密封放射線源を用い、GM測定装置で β 線の測定を実際に行うことにより学生に習得させたため、達成できた。3については、密封放射線源を用い γ 線スペクトルの概要を実際に見せた後、スペクトルの解析を行わせた。5, 6, 7については、教育訓練用DVD鑑賞後、実際に管理区域に立ち入り、見学を行わせた。目標は達成できた。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生による授業評価は、すべての評価項目において4.2以上の高評価であった。そのため、特に改善すべき点はない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義とDVDでの教育訓練が全体の17%、実習が67%、演習並びに試験が17%であった。資料は全て教員が作成したものをを用い、双方向性方策は実習項目ごとに班単位でディスカッションすることにより進めた。そのため、学生の理解が深まったと思われる。

2) 自己点検・評価

各教員が実習項目ごとに担当し、学生の実験の指導、実験の進め方の確認、質問に対して答えるなどを行った。そのため、学生の実習に対する理解が深まり、学生の評価がすべてにおいて4.2以上の高評価が得られたと考えられる。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生により評価が高かったため、特に改善する必要はない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

レポート80%、実習試験20%とした。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率が87%であったが、4名の学生が実習を放棄したためであり、レポートの内容や実習試験が不合格であったためではない。そのため、実際にレポートを提出した学生については、合格率は100%であった。以上のことから、指導の内容については問題ないと考えられる。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

改善点は特にないため、例年通りの実習指導を行う。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	からだと生命の基礎原理	第3学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

化学、物理学、物理化学および分析化学の基本的な原理を理解し、それを生体内で引き起こされる様々な現象について説明できる知識を習得する。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

人体における物理学、物理化学、分析化学、臨床分析化学との関わりを通して、人体に関わる現象への事実の基本的知識を理解する上で重要な教科であるが、理想的思考力を身につけ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことが出来ずに、ただ板書を書き写しているだけの学生が少なからず見受けられた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生の授業評価からからだと生命の基礎原理の授業に対して、一定の評価をしてくれているものと判断できる。今後の改善として、学生が授業をしっかり受け知識の向上に繋がるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下にならないように、教官側も注意を払うが、学生側も当日の授業内容を踏まえ復習を心がけるよう徹底したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義出席60%、レポート作成40%の割合で授業を進めた。基本的に最低限必要な事項のみ板書を行いながら授業を行った。また、授業の後半に当日の授業内容をレポート形式でまとめさせ知識の定着を図った。授業中に質問を行うことで、教官側の一方的な授業にならないように注意を払った。また、質問に対して回答がない場合には、内容をより分かりやすく理解できるように説明を行った。

2) 自己点検・評価

物理学、物理化学、分析化学、臨床分析化学との講義と連携しながら、人体に関わる現象への事実の基本的知識を理解させ、薬学領域で学ぶあらゆる教科の基本的事項を習得させる。そのために教官側は分かりやすい授業を進めると共に、学生には復習を徹底させる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、必要最低限の重要事項のみ板書しながら授業を進める。当然のことではあるが授業には必ず毎回出席してもらい、その場で大まかに理解し、その日のうちに復習をさせる。また、各单元ごとに身近な話題や薬学との関連性について話し、学生の興味を惹きつけるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

授業の最後に当日の授業内容に関するレポート課題を提出させることにより評価した。また、レポート課題に対する解答内容が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正しい解答できるように誘導した。また、正しい解答をした場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。毎回レポート課題を提出させ総合的に評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

授業中に教員が話している内容、板書した内容をレポートにまとめさせ、学生のどの程度理解力しているかを重点にしてレポート内容を評価した。最終的な合格率が98%であったことから、学生は概ね授業内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

毎回レポート課題を提出させ総合的に評価する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	天然物化学	第3学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

植物、微生物、あるいは動物などが産生する有機化合物（天然物）の中には、我々の体に対して毒として作用するものもあれば、医薬品となっている化合物や医薬品のもとになった化合物も数多くある。本科目では、医薬資源としての天然物について、構造、生合成経路、および薬理作用などにより分類・整理できることを目標とし、天然物の利用に関する基本事項に留まらず臨床応用についても修得する。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

天然物化学の授業内容は多岐の分野に関わるが、『授業はよく準備されていた。』と『授業はシラバスに沿って、系統だっで行われた。』という項目で、そう思うと回答した学生は約8割以上で、総合評価の平均は78%以上であった。また、「基礎知識のみならず応用知識も含めて幅広く学ぶことが出来た。」というコメントを頂いており、目標はほぼ達成できたものとする。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

アドバンスト科目であるが、『授業は理解しやすいように工夫されていた。』という項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は約8割であったので、基礎だけでなく臨床応用について分かりやすい説明を継続したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

教科書「パートナ天然物化学（第4版）」の他、教科書のページを記載した補助プリントを作成し、基本的な構造は板書して、特に医薬品に関係する化合物を重点的に説明した。授業最後の10分間に、重要な化合物の構造式を描いてまとめるミニレポートを課題として、次回の授業で添削したものを返却した。毎回、授業の中でパワーポイントを利用して、5分程度天然物の構造をもとにして開発された医薬品などを紹介した。

2) 自己点検・評価

学生からは、『論文を探したり読み込んだりして、それを自分の中で上手くまとめてアウトプットすること、分かりやすいスライドを作ったり、聞きやすい発表を行えることなどでとても良い授業でした』とのコメントを頂いたことから、次年度以降も同様のレポート課題を継続したいと考えている。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

天然物化学はアドバンスト科目なので、授業時間の5分間だけ最近の研究動向などについてパワーポイントで紹介した。また、『教員は重要項目やポイントを強調して明らかにしてくれた。』『教員の授業に対する熱意を感じた。』という項目でおよそ8割の学生がそう思うあるいはどちらかと言えばそう思うと回答してくれたので、次年度以降も5分間の研究の説明は継続したいと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

毎回の授業での構造式などを描くミニレポートへの取組み(20%)と定期試験(80%)を総合的に判断して評価した。ミニレポートについては毎回添削して返却しており、各自が構造式を意識して正確に描けるように指導している。また、提出されたレポートは添削後にコメントを付けて返却している。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

本科目は選択科目であり、レポートを提出した学生は全員合格している。また、「レジュメにその時重要な構造がまとまっており、最後に確認問題もついているため、その日習ったことを復習しやすかった。」とのコメントも頂いたことから、レジュメが自己学習の一助となっていると考えている。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

ミニレポートが評価の20%を占めることから、毎回の授業で学生がミニレポートの課題に熱心に取り組んでいる様子が見られたので、レポートと毎回のミニレポートの評価の比率はこのままで良いと考えている。また、「基礎知識のみならず応用知識も含めて幅広く学ぶことができます。」とのコメントも頂いたので、アドバンストの部分もしっかり説明していきたいと考えている。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	実践臨床薬剤師論	第4学年
科目責任者(記載者)	中川 直人	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

日本では社会保障制度改革が進む中、薬剤師には薬物療法の高度化、在宅医療や地域医療への貢献、セルフメディケーション推進など多職種と連携し専門性を発揮する役割が期待されている。本講義では、薬剤師業務の多様化に触れながら、臨床現場で活躍する薬剤師像を描くことを目的とする。

2) 自己点検・評価（目標の達成状況と理由を含めて記載する）

「実際にあった症例の紹介やアメリカの薬剤師の紹介など、毎週臨床の現場で活躍されている先生方から話を聞けて楽しく感じた。」との感想があるように、臨床現場で活躍する薬剤師の生の情報に触れてもらうことができたと考えられ、目標は達成されたと考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

様々な分野に薬剤師の職能は発揮されているので、適任者の人選にアンテナを張っていきたいと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明（科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する）

講義聴講スタイル

2) 自己点検・評価

講演形式になるが、各専門業務の内容を理解しているかを測るために定期試験（マークシート）としている。定期試験で単位付与できているので、学生は理解できていると考える。

3) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

定期試験70%、普段の授業への取組み態度を30%で総合的に評価する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明（形成的評価・総括的評価の方法等について記載する）

定期試験70%、普段の授業への取組み態度を30%で総合的に評価する。

2) 総括的評価の結果（休学・退学者を除いた合格率を%で示してください）

合格率 (%)

3) 自己点検・評価（最終的な合格率を踏まえて評価する）

定期試験で単位付与できているので、学生は理解できていると考える。

4) 改善方策（学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する）

成績評価はこのまま継続していく。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	遺伝医学概論	第4学年
科目責任者(記載者)	熊本 隆之	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

遺伝子や染色体など生命科学の知識を基礎とし、疾病のなりたちや治療法を含む遺伝医学全般の知識を習得する。生物学や生化学、分子生物学で取り扱った基礎知識を基盤とし、家族歴・家系図や遺伝病、染色体異常、先天性疾患など遺伝医学ならではの分野を取り扱う。さらに検査法、治療法、分子標的薬との関係、そして倫理的課題やバイオエシクス、遺伝カウンセリング、先制医療の考え方を学ぶ。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

アドバンスト科目につきSB0sは存在しないオリジナル目標(独自目標)である。新規科目の初年度につきやや安定しない部分もあったが、概ね目標を達成することができた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

指定業者より教科書が学生に行き渡らないトラブルがあり(講義開始後3週ほど遅延)、また教室の機材故障が続き、シラバスを大幅に変更することを余儀なくされた。授業資料掲示が直前になる、ハンドアウトが間に合わない等、学生には不便をかけた。今後はバックアップ体制を整えたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書(遺伝医学, 渡邊淳 著, 羊土社)を基本に、オリジナルスライドおよびオリジナル要点集、患者会や製薬企業の解説動画を合わせ進めた。教科書が行き渡るまでは要点をピックアップしたレジュメを配布した。

2) 自己点検・評価

当該分野は日進月歩であり、基本を押さえ関連する薬学専門科目との関りを学んだ後は、ただ暗記でなく関心をもつことや知的好奇心を刺激することを企図したが、十分に伝えきれなかったと反省している。またゲノム医療学や生物系科目とのオーバーラップもあり、もう少し範囲を広げ遺伝医学に特化する必要性も感じられた。講義後に行われた実務実習を終えた学生から役に立ったと言われたことが救いである。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生からはもう少しスライドを活用したレジュメがあるとよいとの意見があり、ぜひ今後に生かしたい。また指定業者には講義開始時には教科書の販売を終えることを予め明確に伝えたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験(100%)とした。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

新規科目の初年度であり、またコアカリ等の外部の問題集もリンクせず、試験対策がやや困難であったと想像されるが、十分な数の合格者がありよく学んでいたと思われる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

上述のように成績は良好であったが、論文を引用した記述問題は不十分な解答が多くケーススタディを増やす必要性が感じられた。学生からのコメントは特に無かった。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床心理学	第6学年
科目責任者(記載者)	竹ヶ原 靖子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医療従事者として、相手の抱える心理的問題を理解し信頼関係を築くための能力を身に付け、様々な背景を抱える人々に対応するため臨床心理に関連した内容を習得する。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

基礎的部分にあたる「心理学」をすべての学生が履修しているわけではないこと、そもそも「心理学」の当時の担当者も異なることから、前提の知識が学生によってばらつきがある状態だった。合格率から目標は達成できたと思われるが本質的な理解については課題が残るといえる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

カリキュラムによる部分が大きいので根本的な改善は難しいが、復習もかねて「心理学」の重要な理論を再度解説するなどが必要である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

担当教員が作成した講義資料を用い、講義を進めた。

2) 自己点検・評価

疾患についてすでに習得している知識もありどのように学んできたのかの確認が不足していたため、重複する部分があったかもしれない。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

精神疾患など、これまで学生が学んできた内容と重複するものもあるため、その点を意識しつつ臨床心理学的視点から解説したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験100%で評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

合格率から見て大きな問題はないと思われる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

特になし。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	センサー概論	第6学年
科目責任者(記載者)	柏木 良友	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

機器を用いる先端的分析法の原理、その応用に関する基本知識を修得して、ガスセンサや医療用センサの仕組みについて説明できるようにする。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

センサはガスセンサや医療用センサとして今や我々の日常生活に欠かせないものとなっており、センサの基本的な原理を修得するとともに、特に電極反応が関与しているセンサを中心にその仕組みを理解する上で重要な教科であるが、理想的思考力を身につけ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢をまだ十分に養うことができていない学生も少なからず見受けられた。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生の授業評価からセンサー概論の授業に対して、一定の評価をしてきているものと判断できる。今後の改善として、学生が授業を知識向上のためにしっかり受けるよう、教官側も絶えず注意を払いたい。また、学生の不勉強が理解度の低下に繋がらないように、教官側も注意を払うが、学生側も当日の授業内容を踏まえ復習を心がけるよう徹底したい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

講義80%、レポート作成20%の割合で授業を進めた。プリント、スライドを使用しながら授業を行なった。また、授業の後半に当日の授業内容をレポート形式でまとめさせ知識の定着を図った。授業中に質問を行うことで、教官側の一方的な授業にならないように注意を払った。また、質問に対して回答がない場合には、内容をより分かりやすく理解できるように説明を行った。

2) 自己点検・評価

物理学、物理化学、分析化学、臨床分析化学との講義と連携しながら、ガスセンサや医療用センサとして今や我々の日常生活に欠かせないものであることを理解させ、薬学領域で学ぶあらゆる教科の基本的事項を習得させる。そのため教官側は分かりやすい授業を進めると共に、学生には復習を徹底させる。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生により一層の理想的思考力を身につけさせ、客観的に実験事実と理論を対比して考えられるような姿勢を養ってもらうために、プリントとスライドを併用させ授業を進める。当然のことではあるが授業には必ず毎回出席してもらい、その場で大まかに理解し、その日のうちに復習をさせる。また、各単元ごとに身近な話題や薬学との関連性について話し、学生の興味を惹きつけるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

授業最終日の授業内容に関するレポート課題を提出させることにより評価した。また、レポート課題に対する解答内容が誤っていたり、方向性が間違っている学生には、そのことを一方的に指摘するのではなく、学生自身が正しい解答できるように誘導した。また、正しい解答をした場合にもさらにそれらを深く掘り下げて理解できるように説明を行った。授業態度、レポート課題を提出させ総合的に評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格者を踏まえて評価する)

授業中に教員が話している内容、板書した内容をレポートにまとめさせ、学生のどの程度理解しているかを重点にしてレポート内容を評価した。最終的な合格率が100%であったことから、学生は概ね授業内容を理解できていると判断できる評価方法であると考えられる。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業態度、レポート課題を提出させ総合的に評価する。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	地域医療概論	第6学年
科目責任者(記載者)	佐藤 亜希子	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

地域医療における薬剤師の役割と薬剤師に必要なスキルの知識を含め全般的な知識を習得するという目標は、達成できた。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

介護と薬剤師職能のかかわりについての理解、介護にかかわる薬剤師に必要なスキル、地域医療における薬剤師の役割などについて網羅的に講義を行い、さらに総まとめとしてアクティブラーニングを行ったことによって目標が達成できたと考える。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業終了後に質問に来る受講生が毎回いた。授業内容もマッチしていたようで、興味をもって受講してもらえた。これからも、地域に根差した薬剤師の業務に興味を持ってもらえるよう教えていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

教科書のページをすべて網羅する方法をとった。さらに、全7コマ中の2コマを利用して、2つの模擬症例に取り組んだ。前もって課題を出し、各自に自宅で取り組んでもらい、授業では教員による解説を行った。欠席を重ねる受講生への対策としては、出席を促すメールを送り、出席するよう呼びかけた。

2) 自己点検・評価

アクティブラーニングの一環として模擬症例検討にも取り組んだので、双方向性のある授業をおこなえた。教科書を使った講義だけでなく課題にも取り組んだので内容が盛りだくさんだったが、受講生はよく取り組んでいたのが良かったと思う。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

新型コロナウイルス感染症の位置づけは、令和5年5月8日から「5類感染症」になり、この科目を教えていた時期は解除されていなかった又は解除直後だったので、やりたいと思っていたグループディスカッションが行えず残念であった。グループディスカッションをやりたいという意見はもっていたので、解除された今後は実施し、選択科目かつ受講生が少人数である、という利点を生かせるかと思う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

定期試験 100 %

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

全員が本試験を受験し尚且つ合格率 100 % だったので、特に問題ないと考える。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

成績評価については、改善方策は特にないと考える。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	新薬概論	第6学年
科目責任者(記載者)	西屋 禎	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

わが国では、毎年約50種類の新薬が発売されている。新薬には、全く新しい作用機序を持つもの、既存薬より有効性または安全性が高いもの、適応症を拡大したもの、新しい剤形としたものなどがある。新薬概論では、新薬と既存薬の違いを理解するために、新薬の開発の流れ、および最近6年間に発売された主な医薬品の薬理作用、副作用、適応症や特徴について、既存薬のそれらと比較しながら学習する。

2) 自己点検・評価(目標の達成状況と理由を含めて記載する)

定期試験において、正答率80%以上で合格した学生が全体の6割いたこと、最終的な不合格者が0名であったことから、教育目標は概ね達成できたと考える。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価は、すべての項目で全体平均を大きく上回っており、特に改善点は見当たらない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明(科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

本科目は、講義の割合が100%である。授業の内容上、教科書は特に指定していないが、適宜、プリントを配布した。

2) 自己点検・評価

アドバンスト授業の中では、毎年多くの学生が選択する人気の授業で、今年度も多くの学生が受講し、授業評価でも評判は良かった。

3) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

授業評価は、すべての項目で全体平均を大きく上回っていた。回答率が25.4%と低かったが、未回答者は特に不満がなかったと解釈でき、また、自由記述もなかったため、来年度も今年度のやり方を踏襲する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明(形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

形成的評価は行わなかった。総括的評価は定期試験の成績を100%で評価した。

2) 総括的評価の結果(休学・退学者を除いた合格率を%で示してください)

合格率(%)

3) 自己点検・評価(最終的な合格率を踏まえて評価する)

4人の教員が各々該当範囲の試験を作問し、試験の範囲や問題数が膨大であったにも関わらず、定期試験において正答率80%以上で合格した学生が全体の6割もいたこと、最終的な合格率が100%であったことから、成績評価は適切になされたと考えられる。

4) 改善方策(学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

学生からの不満が特にないことから、成績評価の方法については現行の方法で問題ないと考えられる。

2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有機化学IT技能演習	第3学年
科目責任者(記載者)	石山 玄明	

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

描画ソフトを利用した化学構造式や反応式の作成法、NMRスペクトルの解析、医療統計の基本を修得した上で、PMDAから医薬品の開発経緯、臨床効果を調査し、医薬品の安定配座や合成方法、生体内高分子との相互作用に関する文献を調べ、ファーマコフォアを推定し、より効果の高い医薬品をデザインしてグループ毎に発表する。これらの発表を通して、研究室に配属後に学ぶ基礎知識や基本的な技能について予め身につける。

2) 自己点検・評価 (目標の達成状況と理由を含めて記載する)

『授業は理解しやすいように工夫されていた。』という項目では、そう思うあるいはどちらかといえばそう思うと回答した学生は約8割であった。本演習は、薬の正しい使い方ではなく、むしろ作り方を意識した今年からスタートした演習であるが、グループ発表のレベルが高く、ほとんどの学生が秀の評価を得たことから、目標は達成できたものと考えている。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

グループ発表するためには、多岐にわたる分析や調査が必要であり、毎回、新しいソフトの使い方や、解析方法、インターネットを利用した調査方法を説明した。『授業はシラバスに沿って、系統だてで行われた。』という項目では、そう思うと回答した学生は約8割であったので、次年度以降も同様の順番で説明して、その後で演習時間を設けて授業を進めたいと考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明 (科目内における講義・演習等の割合、用いた資料、双方向性方策の内容等について記載する)

一人1台のPCを利用できる教室で演習を実施した。授業の前半は、新しいソフトの使い方や、解析方法、調べ方などを説明し、後半は各自が演習できるように工夫した。最後に、簡単なプロダクトを提出することで、学生と教員がともに理解度を確認した。途中からグループでの演習として、それぞれが得意とする部分を担当できるように分担して、パワーポイントを作成し、最終回ではグループ毎に発表した。

2) 自己点検・評価

学生からは、『論文を探したり読み込んだりして、それを自分の中で上手くまとめてアウトプットすること、分かりやすいスライドを作ったり、聞きやすい発表を行えることなどでとても良い授業でした』とのコメントを頂いた。また、『教員の授業に対する熱意を感じた。』という項目では、8割以上の学生がそう思うと回答してくれたことから、次年度以降も同様に演習を進めていきたい。

3) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

演習であるため、実際に調べたりソフトを利用してプロダクトを作成する時間をとっている。しかし、学生から『発表資料を作成する時間を授業内で確保していただけたらなお良かったと思う。』というコメントがあったので、グループ発表の資料作成の時間の確保について、次年度以降は検討したいと考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明 (形成的評価・総括的評価の方法等について記載する)

グループ発表の態度および完成度(80%)と演習中の態度(20%)を総合的に判断して評価した。

2) 総括的評価の結果 (休学・退学者を除いた合格者を%で示してください)

合格率 (%)

3) 自己点検・評価 (最終的な合格率を踏まえて評価する)

課題の中には、現在使用されている医薬品よりも標的分子に対して高い親和性を持つ化合物をデザインするなど、研究レベルに近い課題も含まれているが、グループ発表では高いレベルでの考察が発表されており、全員が高評価で合格している。また、『課題がとても難しかったですが、みんなと協力してできることができ、達成感を味わうことが出来ました。』というコメントも頂いたことから、課題は変えずに継続しようと思っている。

4) 改善方策 (学生による授業評価の結果を踏まえて改善方策を記載する)

演習中の態度も評価に含まれているためか、授業を真剣に受けて毎回のプロダクトもそれぞれができる限りのものを提出している。従って、次年度以降も同様の評価を考えている。また、グループ発表も継続することで、学生同士のディスカッションでお互いを高め合って、全員が高レベルで合格することを期待したい。